

# 吉野ヶ里遺跡

－田手二本黒木地区の弥生時代中期の石器－

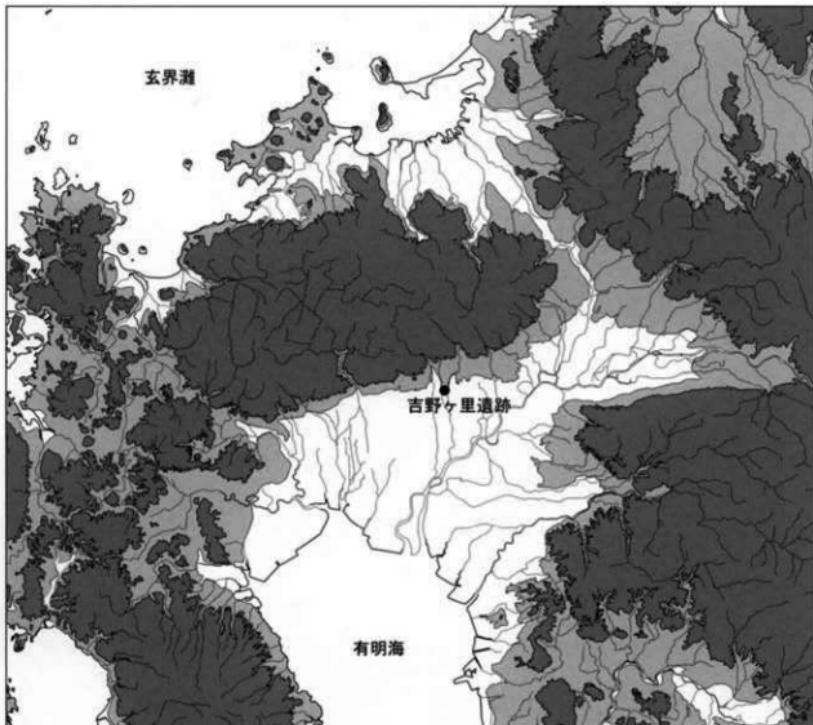


平成20（2008年）年3月

佐賀県教育委員会

# 吉野ヶ里遺跡

－田手二本黒木地区の弥生時代中期の石器－



平成20（2008年）年3月

佐賀県教育委員会

## 序

吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、神崎工業団地の造成に伴い、昭和61年から開始されました。その調査では、国内最大規模の弥生時代環壕集落跡や銅剣を副葬した甕棺墓を内部主体に持つ墳丘墓、甕棺墓の列埋葬、中国製の鏡破片等、数々の遺構遺物が発見され、大いに注目されました。遺跡には全国から100万人を超える人々が訪れるともに、遺跡の重要性から工業団地の中止と遺跡保存が決定されました。平成3年に、国の特別史跡として指定され、平成4年国営公園として整備・活用されることが決定されました。平成13年には、『国営吉野ヶ里歴史公園』として開園し、多くの来園者でぎわっています。

本書は、吉野ヶ里遺跡から出土した弥生時代中期の石器に関する報告書です。弥生時代中期は、吉野ヶ里遺跡南部の田手二本黒木地区を中心に集落が展開し、集落からは多数の土器・石器などの遺物が出土しています。特に石器は、石庖丁や石斧などの大陸系の磨製石器を主体としながらも、黒曜石やサヌカイト製の石鎌・石錐といった打製石器もまた中期を通じて使用されていることが明らかになりました。また、弥生時代中期の石器の分析を通じて佐賀平野の拠点集落である吉野ヶ里遺跡の石器組成の変化が判明しました。

本書の内容が本県の学術文化の向上に寄与するとともに、県民の皆様に郷土の歴史を理解する上でその一助になれば幸いに存じます。

なお、刊行にあたり、発掘作業に従事していただいた地元の皆様をはじめとする関係者に対し心から厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

佐賀県教育委員会

教育長 川崎 俊広

## 例　　言

1. 本書は、佐賀県教育委員会が平成元年度から国庫補助事業で実施している吉野ヶ里遺跡発掘調査事業のうち田手二本黒木地区の発掘調査報告書である。弥生時代中期を中心と報告する。
2. 発掘調査は、佐賀県教育委員会が主体となり、旧三田川町教育委員会（現吉野ヶ里町）の協力を得て実施した。調査には、文化庁をはじめ、大学、佐賀県文化財保護審議委員、その他各種機関の専門家の指導を得た。調査には、佐賀県文化課から七田忠昭、田島春美（現小川島小・中学校）、森田孝志、吉本健一、原直樹、渋谷裕、松尾法博、細川金也、市町から桑原幸則（神埼市教育委員会）、鶴見昌尚、草野誠司（吉野ヶ里町教育委員会）らが携わった。
3. 出土遺構の実測図作成は調査員、調査補助員、作業員が行ったが、一部業者に委託した。また、出土遺物の実測図作成は調査員、調査補助員、作業員が行った。石器のうち、打製石器については、一部委託を行った。調査記録の作成及び整理作業の分担は下記のとおりである。

遺構実測：石松澄子・中島茂子・平野三枝子

遺物実測：秋吉京子・伊東直子・緒方恭子・野口孝子・原口晴美・御厨瑞枝・横枕栄子・吉江博子・城門義廣、渡部芳久、戸塚洋輔、石田智子、岩橋由季、児玉洋志、濱田美紀

遺物復元：井筒子・江口啓子・大柿珠美・坂口サチ子・佐藤春子・竹下浩子・羽田すま子・平石明子・横枕栄子

遺構実測図整理・写真資料整理：石松澄子・伊東直子・大柿珠美・中島茂子・平石明子

トレース：御厨瑞枝・緒方恭子・デジタルトレース：馬場里美・皆越弘子・村山育子

4. 出土した遺物の写真撮影及び福集は小森義尚・渡部芳久・濱田美紀が行った。

5. 出土遺物の整理や調査記録類の整理は、吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所で行った。

6. 本書の福集は七田忠昭・廣瀬雄一・長崎浩の協力を得て細川金也が行った。執筆は目次に執筆者名を記している。

7. 出土遺物と調査記録類は、主に佐賀県教育委員会文化課吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所（〒842-0035 神埼郡吉野ヶ里町田手2721番地 TEL 0952-52-9735）に保管している。

8. 今回の報告書作成にあたっては、下記の関係者に協力を得た。記して感謝申し上げる。

渡部芳久、能登原孝道、石田智子（九州大学大学院）、岩橋由季（九州大学）、城門義廣（福岡県教育庁文化財保護課）、児玉洋志（西予市教育委員会）、藤井厚志（北九州市立自然史・歴史博物館）、敦賀一郎（前北九州市立自然史・歴史博物館）、梅崎恵司（財団法人北九州市芸術文化振興財團埋蔵文化財調査室）、小森義尚、戸塚洋輔、濱田美紀、田中健一郎（佐賀県文化課）天賀光広、村上浩明（株式会社とっぴん）

## 凡　　例

1. 本書では、吉野ヶ里丘陵南部の調査地点を田手二本黒木地区と呼称しているが、この地区には、吉野ヶ里丘陵地区Ⅳ区（YKG- IV）田手二本黒木地区Ⅱ区（TDN- II）、田手二本黒木地区Ⅲ区（TDN- III）、田手一本黒木地区I区（TDI- I）が含まれる。各地区と調査区の一覧は表1を参照のこと。
2. 遺構については、調査地区ごとに一連の番号を付し、その前に遺構の種別を示すアルファベット2文字の略号を記した。遺構の種別は以下のとおりである。  
SB…掘立柱建物跡、SD…環壕跡・溝跡、SE…井戸跡、SH…竪穴住居（建物）跡、SJ…甕棺墓、SK…土坑、SP…土壤墓・木棺墓、SX…不明遺構
3. 遺構の法量はm単位、遺物の法量はcm単位を原則として用いた。
4. 遺構分布図や遺構実測図の北方位や座標値は、国土座標（第II系）を用いた。

## 本文目次

第1章 調査の経過（細川金也）	1
第1節 調査にいたる経過	1
第2節 吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区の概要	1
第3節 調査の内容	4
(1) 田手二本黒木地区北部調査区	5
(2) 田手二本黒木地区南部調査区	5
(3) 田手二本黒木地区西部調査区	6
(4) 田手二本黒木地区のまとめと考察	6
第2章 佐賀平野東部地域における弥生時代中期の土器様相（石田智子）	10
第1節 土器編年	10
第2節 特徴的な土器について	14
第3節 まとめと今後の課題	16
第3章 吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区（316・318・346調査区）出土の石器（渡部芳久）	18
第1節 大陸系磨製石器	18
(1) 石庖丁	18
(2) 両刃石斧	22
(3) 片刃石斧	26
(4) 石鎌	32
(5) 紡錘車	34
(6) その他	34
(7) 磨石・敲石	34
(8) 石錐（穿孔具）	35
(9) 砥石	37
第2節 剥片石器	41
(1) スクレイパー	41
(2) 打製石鎌	43
第3節 小結	50
(1) 各器種の特徴	50
(2) 不定形剥片石器類の出土傾向	51
(3) 弥生時代中期の特質とその評価・位置づけ	51
第4章 吉野ヶ里遺跡出土の武器形石製品（城門義廣）	53
第1節 吉野ヶ里遺跡各地区出土石器	53
(1) 磨製石劍（大形磨製尖頭器）	53
(2) 磨製石鎌・石戈	56
(3) 墳墓出土打製石鎌	56
(4) 吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区 SJ0312 壱棺出土鎌	58
第2節 分析と考察	61
(1) 分析	61
(2) 考察	61
(3) まとめ	67
第3節 武器形石製品出土の壹棺について（濱田美紀）	67
第5章 まとめ（梅崎恵司）	71
(1) 石材	71
(2) 石材からみた石器生産地	71
(3) 土器	72
(4) 大陸系磨製石器	72

## 図 版 目 次

1 吉野ヶ里遺跡南部地区調査区配置位置図	3
2 吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区構造配置図	5
3 田手二本黒木地区集落間係構造変遷図①	8
4 田手二本黒木地区集落間係構造変遷図②	9
5 佐賀平野東部地域弥生時代中期土器編年	12
6 弥生時代中期の吉野ヶ里遺跡にみられる特徴的な土器	15
7 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土石斧丁①(1/3)	19
8 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土石斧丁②(1/3)	21
9 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土両刃石斧①(1/3)	23
10 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土両刃石斧②(1/3)	25
11 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土両刃石斧③(1/3)	27
12 田手二本黒木地区(316・318・461区)出土両刃石斧④(1/3)	28
13 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土片刃石斧①(1/2)	29
14 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土片刃石斧②(1/2)	30
15 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土片刃石斧③(1/2)	31
16 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土片刃石斧④未製品(1/2)	33
17 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土石鎌・筋鉤車・その他(1/3)	35
18 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土磨石・敲石(1/3)	36
19 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土石錐(打製2/3・磨製1/2)	37
20 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土砥石①(1/3)	39
21 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土砥石②(1/3)	40
22 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土スクレイバー(1/2)	42
23 田手二本黒木地区(SH2437)出土スクレイバー(1/2)	43
24 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土打製石錐①(2/3)	44
25 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土打製石錐②(2/3)	45
26 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土打製石錐③(2/3)	47
27 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土打製石錐④(2/3)	48
28 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣(大形磨製尖頭器)①(1/3)	54
29 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣(大形磨製尖頭器)②(1/3)	55
30 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣(大形磨製尖頭器)③(1/3)	57
31 吉野ヶ里遺跡出土磨製石錐(1/2)・石戈(1/3)	60
32 吉野ヶ里遺跡出土打製石錐(墳墓出土)(2/3)	61
33 吉野ヶ里丘陵地区II区SJ0312妻棺墓棺内出土錐(2/3)	62
34 石錐出土発掘(1/8)	70

## 表 目 次

表1 吉野ヶ里遺跡南部調査区配置位置図	2
2 佐賀平野東部地域の主要編年案の併行関係	11
3 弥生時代構造出土の剥片石器集計表(316区)	50
4 磨製石錐 型式・時期・遺構別出土数	64
5 吉野ヶ里遺跡磨製石錐法量表	64
6-1 打製石錐型式・時期別出土数(吉野ヶ里)	64
6-2 打製石錐型式・時期別出土数、打製石錐磨製石錐出土比率(吉野ヶ里)	64
7 玄界灘沿岸地域打製石錐型式別出土数	65
8 打製石錐法量(吉野ヶ里)	65
9 大形磨製尖頭器型式・時期・遺構別出土数(吉野ヶ里)	67
10 磨製石錐法量(玄界灘周辺、中期以降)	67
11 武器形石製品折損状況	67
12 吉野ヶ里遺跡の石器器種と石材	71
13 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土石器観察表	74~78
14 吉野ヶ里遺跡出土武器型石製品一覧表	78~83

## 写 真 図 版

- P L 1 1. 田手二本黒木地区出土石庖丁① / 2. 田手二本黒木地区出土石庖丁②  
3. 田手二本黒木地区出土石庖丁③ / 4. 田手二本黒木地区出土両刃石斧①  
5. 田手二本黒木地区出土両刃石斧② / 6. 田手二本黒木地区両刃石斧③  
7. 田手二本黒木地区両刃石斧④
- 2 8. 田手二本黒木地区出土片刃石斧① / 9. 田手二本黒木地区出土片刃石斧②  
10. 田手二本黒木地区出土片刃石斧③ / 11. 田手二本黒木地区出土石鎌  
12. 田手二本黒木地区出土紡錘車 / 13. 田手二本黒木地区出土板状素材  
14. 田手二本黒木地区用途不明石製品 / 15. 田手二本黒木地区出土砥石  
3 16. 田手二本黒木地区出土磨石 / 17. 田手二本黒木地区出土砥石①  
18. 田手二本黒木地区出土砥石② / 19. 田手二本黒木地区出土砥石③  
20. 田手二本黒木地区出土砥石④ / 21. 田手二本黒木地区スクレイバー①  
22. 田手二本黒木地区出土スクレイバー②
- 4 23. 田手二本黒木地区出土打製石鎌 / 24. 吉野ヶ里遺跡出土打製石鎌①  
25. 吉野ヶ里遺跡出土打製石鎌② / 26. 吉野ヶ里遺跡出土打製石鎌③  
27. 吉野ヶ里遺跡出土打製石鎌④ / 28. 吉野ヶ里遺跡出土打製石鎌⑤  
29. 吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区SJ312発掘出土鎌
- 5 30. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣① / 31. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣②  
32. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣③ / 33. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣④  
34. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣⑤ / 35. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石鎌①  
36. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石鎌・石戈 / 37. 吉野ヶ里遺跡出土有柄石剣  
6 38. 吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区調査前風景（南上空から）  
39. 歴史公園整備が続く田手二本黒木地区（南上空から）
- 7 40. 田手二本黒木地区316調査区全景（西上空から）  
41. 田手二本黒木318調査区全景（南上空から）
- 8 42. 田手二本黒木地区346調査区全景（北上空から）  
43. 田手二本黒木前期環壕（北西から）

## 第1章 調査の概要

### 第1節 調査に至る経過

吉野ヶ里遺跡の発掘調査は、神埼工業団地造成に伴い、昭和61年に開始された。この神埼工業団地は、佐賀東部地域に安定した企業の確保と雇用の機会を創出することを目的としたものである。この工業団地は、吉野ヶ里丘陵の西側67ha部分が造成の対象となった。佐賀県文化課では、昭和57年11月から確認調査を実施し、36haに及ぶ範囲に埋蔵文化財が存在していることが明らかになった。そのうち、遺跡が濃密に存在する6haについては、文化財保存縁地として現状保存し、残りの30haを記録保存の対象として発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、昭和61年から3年間かけて実施された。調査地点の北側に位置する志波屋四の坪地区では、弥生時代中期の長さ600mを超える長大な甕棺墓列群や甕棺墓に埋葬された頭部の無い人骨などが発見された。この志波屋四の坪地区とその西側に隣接する志波屋三の坪地区的南側には、丘陵を切り通してつくられた奈良時代の官道路が確認され、その周囲には、駅家や宿跡と考えられる官衙関連遺構が多数存在する。工業団地予定地の南部に設定された吉野ヶ里丘陵地区では、丘陵西側に沿って延長1kmを超える弥生時代後期の環壕が検出され、その環壕には、多量の弥生時代後期の土器とともに巴形銅器鋳型や深槽式銅劍、鑿や鉄斧を初めとする多種多様な鉄製品等が出土した。この環壕は、南側の田手二本黒木地区の西側縁辺を巡り、丘陵全体を囲むように巡るものと想定されており、約40haの広大な範囲を囲み、集落を形成すると考えられている。吉野ヶ里丘陵地区の北側に位置する弥生時代中期の墳丘墓は、全長約40mの長方形のマウンドに甕棺14基が埋葬されており、内7基に有柄細形銅劍を始めとする青銅器の副葬品が伴っていた。平成元年2月、吉野ヶ里遺跡が中国の史書である『魏志倭人伝』に記された邪馬台国の姿を彷彿させる遺跡として、新聞・テレビで報道されると、わずか3ヶ月の間に約100万人もの人が吉野ヶ里遺跡を訪れるなど全國的に注目を浴びた。

墳丘墓の調査で有柄細形銅劍やガラス製管玉が出土したことから、遺跡保存の動きが高まり、平成元年4月、香月知事（当時）の英断により吉野ヶ里遺跡の保存が図られた。この後、吉野ヶ里遺跡は、平成2年に国の史跡、3年には特別史跡と指定され、平成4年には国営公園として整備されることが閣議決定された。平成13年、国営飛鳥歴史公園に統き、国内で2番目の「国営吉野ヶ里歴史公園」として開園し、佐賀県民のみならず、全国からたくさんの来園者が訪れる歴史公園となっている。

保存が決定した後も吉野ヶ里遺跡では発掘調査が継続されている。平成元年以降、国の補助を受け、吉野ヶ里遺跡の範囲確認調査に着手している。平成元年には、墳丘墓東側地点（吉野ヶ里丘陵地区V区）、南内郭の南側（吉野ヶ里丘陵Ⅲ区）、弥生時代前期の環壕が存在している田手二本黒木地区等の調査を実施している。その後も弥生時代鉄造関連遺構の調査（田手一本黒木地区・平成2年度）、墳丘墓南側の北内郭の発見（吉野ヶ里地区VI区・平成4・5年）、遺跡南西部における弥生時代後期の多量の木製品の出土（田手二本黒木地区II区・平成8年度）、南内郭西方に広がる大規模掘立柱建物群（吉野ヶ里地区V区・平成10・11年度）、古墳時代初頭の前方後方墳（吉野ヶ里丘陵地区VII区・平成11・12年）、前期環壕内の集落構造（田手二本黒木地区・平成12・13年）など吉野ヶ里遺跡を理解するうえで重要な知見が相次いで判明した。

また、国営吉野ヶ里歴史公園に隣接する県営吉野ヶ里歴史公園に関する調査で、吉野ヶ里丘陵の西側に位置する枝町遺跡では、古墳時代初頭の直線的な条壕や方形周溝墓（平成11年）が明らかになるとともに墳丘墓北側に位置する吉野ヶ里遺跡大曲一ノ坪地区（平成9～13年）では、九州初出土の銅鐸が発見されたほか、奈良時代の寺院跡である辛上廬寺の寺域や建物構成が判明した。

### 第2節 吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区の概要

今回、分析の対象となる吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区は、吉野ヶ里丘陵の南端部分に位置する。南内郭の存在する丘陵部が一部くびれ、さらに大きく広がった標高約20mの洪積台地部にある。後述する弥生時代前期環壕付近がもっとも標高の高い場所になる。丘陵の中心部分は、主に田手二本黒木地区が占めるが、北側には吉野ヶ里丘陵地区

V区、南端部には、田手一本黒木地区と地区割りされている。この地区割りは、あくまでも調査時の便宜的な区分けのため、今回は、全体を田手二本黒木地区と総称して報告を行う。

この田手二本黒木の丘陵は一部西側に張り出し、丘陵頂部には大きな平坦地を持ち、田手川を挟んだ東側にも延びる。丘陵の南端には、JR長崎線と国道34号線が東西方向に走る。丘陵東側に沿って田手川が南流するが、田手二本黒木地区付近にある東妙寺の西側では丘陵の間を抜けている。これは、鎌倉時代頃に丘陵を開削し付け替えられたもので、それ以前の流路は、丘陵縁辺に沿って南東方向に流れていたものとみられる。

この田手二本黒木地区は、これまで数次の調査が行われている。平成元年に神埼工業団地に伴い丘陵西側部分を中心として調査が実施され、弥生時代前期の環壕の一部や前期から中期にかけての貯蔵穴を始めとする土坑群、甕棺墓群、弥生時代後期の環壕の一部などが検出されている。平成元年以降実施された範囲確認調査では、丘陵南端部で祭壇とみられる盛土遺構、それに隣接する青銅器鑄造関連遺構、弥生時代前期初頭頃の条壕、吉野ヶ里遺跡最古と考えられる細形銅劍を副葬した甕棺墓、遺構に伴う朝鮮系無文土器群、古墳時代初頭の全長約40mの前方後方墳と堅穴住居跡、鎌倉時代に建立された妙法寺開基遺構、中世後期の溝跡など、各時代にまたがり重要な遺構・遺物が出土している。

弥生時代前期環壕は、平成元年度に調査で出土した土器と石器の分析を行った。その結果、前期環壕は、出土土器から前期後半新段階（板付II式新段階）に埋没が開始され、その埋削年代の下限が明らかになった。また、埋没年代は、中期初頭段階であることも確認された。石器についても前期の石器が大陸系磨製石器群を中心に構成されている一方、黒曜石やサヌカイトでつくられた不定形な剥片石器群がある一定の割合を占めることも判明した。

### 第3節 調査の内容

これまで実施された田手二本黒木地区の発掘調査は表1のとおりである。図面上は遺構の繋がりが見られるが、隣接した調査区は、時間的な間隔を空けて調査している。187区・310区・316区を中心とする調査区を①田手二本黒木地区北部調査区、191・318・346区を中心とする調査区を②田手二本黒木地区南部調査区、平成元年に調査を実施した田手二本黒木地区と375区を③田手二本黒木地区西部調査区として概要を説明する。なお、今回の主目的である弥生時代の遺構を中心に概観する。

調査区名	調査年度	地区名	内 容 (弥生時代)	備 考
田手二本黒木	昭和63年度	田手二本黒木地区Ⅳ区	堅穴住居跡約16基、堅立柱建物跡1棟、土坑約200基、甕棺4基	神埼工業団地造成地内の発掘調査。
169区	平成9年度	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区	甕棺墓11基、土塙墓2基、埋跡1基、土坑約20基	310区の南西、221区の南側に位置。
171区	平成3年度	吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区	埋跡2基、溝跡1条	221区の西側に位置。
185区	平成6年度	吉野ヶ里丘陵地区Ⅹ区	埋跡4基、堅穴住居跡4基、堅立柱建物跡1棟	310区の北側、12年間に316区として再度調査。
186区	平成6年度	吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区	溝跡2基、堅穴住居跡2基	310区の南側、11年に316区として再度調査。
187区	平成6年度	吉野ヶ里丘陵地区Ⅷ区	溝跡3基、堅穴住居跡、土坑7基	316区の西側に位置。
191区	平成6年度	吉野ヶ里丘陵地区Ⅷ区	埋跡1基、甕棺2基	丘陵の西側斜面、346区の北側に位置。
227区	平成8年度	吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区	堅穴住居跡2基、甕棺墓8基、土坑3基、溝跡2条他	310区の北、11年に310区として再度調査。
228区	平成8年度	吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区	甕棺5基、溝跡3条他	310区の北、11年に310区として再度調査。
310区	平成11年度	吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区	堅穴住居跡4基、堅立柱建物跡2基、溝跡5基、甕棺38基	吉野ヶ里丘陵地区Ⅸ区の北側に位置。
316区	平成12年度	吉野ヶ里丘陵地区Ⅷ区	堅穴住居跡22基、堅立柱建物跡1基、土坑73基	吉野ヶ里丘陵地区Ⅷ区の南、187区の東側に位置。
318区	平成12・13年度	田手二本黒木地区Ⅴ区	埋跡1基、堅穴住居跡36基、土坑約230基	田手二本黒木地区Ⅴ区の北、316区の南側に位置。
345区	平成14年度	田手二本黒木地区Ⅳ区	埋跡1基、堅穴住居跡2基	346区の南側に位置。
346区	平成14年度	田手二本黒木地区Ⅳ区	堅穴住居跡9基、土坑110基、甕棺14基、埋跡1基、堅立柱建物跡1棟	316区の東側に位置。
367区	平成15年度	田手二本黒木地区Ⅲ区	堅穴住居跡5基、甕棺1基	吉野ヶ里丘陵東側斜面、346区の北東に位置。
375区	平成17年度	田手二本黒木地区Ⅱ区	埋跡1条、溝跡3条、土坑7基	316区の西側に位置。

表1 吉野ヶ里丘陵南部調査区配置位置図



第1図 吉野ヶ里遺跡南部地区調査区配置位置図 (s=1/4000)

## (1) 田手二本黒木地区北部調査区 (171・169・185・186・187・227・228・310・316区)

本地区は、前期環壕の存在する田手二本黒木地区の北側に当たる地点である。東西方向に走る環壕を境に北と南に分けられる。北側には、弥生時代の遺構として堅穴住居跡5棟、掘立柱建物跡2棟、前期末から中期中頃にかけての甕棺墓約170基、土坑約110基、溝跡5条などがある。また、この地区には古墳時代初頭に築造された全長約30mの前方後方墳1基が存在する。

堅穴住居跡には、平面形が円形と方形のものがあり、円形の堅穴住居跡2基は、中期の甕棺墓群に切られることからそれ以前の時期のものとみられる。このうち、SH2380堅穴住居跡は径が6mを越える大型の堅穴住居跡である。溝跡のうち、1条は東側斜面部に位置する弥生時代前期の環壕である。北側部分に出入り口を持つ。南側部分が調査区外になっているが、径が約20mのほぼ円形に復元できる。同様な小規模な環壕は、鳥栖市袖比町八ツ並金丸遺跡、吉野ヶ里町大曲瀬ノ尾遺跡で知られる。

北部調査区の北側を東西に走る環壕は、東側部分で非常に狭い出入り口部分を持つ。その幅は0.8m程度である。この出入り口付近の環壕の下層からは、城ノ越式段階の甕が出土している。後述するが、この環壕は前期環壕の北側延長部分と捉えられる。出入り口付近であることから、これら下層からの出土品は、中期初頭頃に再掘削された際の遺物ではないかと考えられる。

土坑は、約30基存在する。その大部分が前期末から中期にかけての貯蔵穴とみられる。ただし、旧169区では、甕棺墓と隣接する土坑も存在することから、土坑の中に土壙墓が含まれる可能性がある。ただ、南部に比べその数は少ない。

甕棺墓は前期末の金海式期から中期中頃の須玖式期にかけて営まれる。環壕の北側では、大小4つのグループが認められる。旧169区に位置する集塊状の甕棺墓群は、118基と環壕北側の甕棺墓全体の67%を占める大規模な甕棺墓群である。また、小児棺の割合が37%と高いことが特徴である。この甕棺墓群は金海式期から始まり汲田式期が主体を占める。確定な須玖式甕棺は1基のみであり、その終焉は汲田式と見られる。前方後方墳の前方部付近に位置する甕棺墓は33基と比較的まとまっているが、その範囲は広く、旧169区の甕棺墓群に比べ集中度合いは低い。両甕棺墓の北側には、5~8基程度で構成される小規模な甕棺墓群が2グループ認められる。なお、大型の甕棺墓群には、土壙墓数基も含まれる。

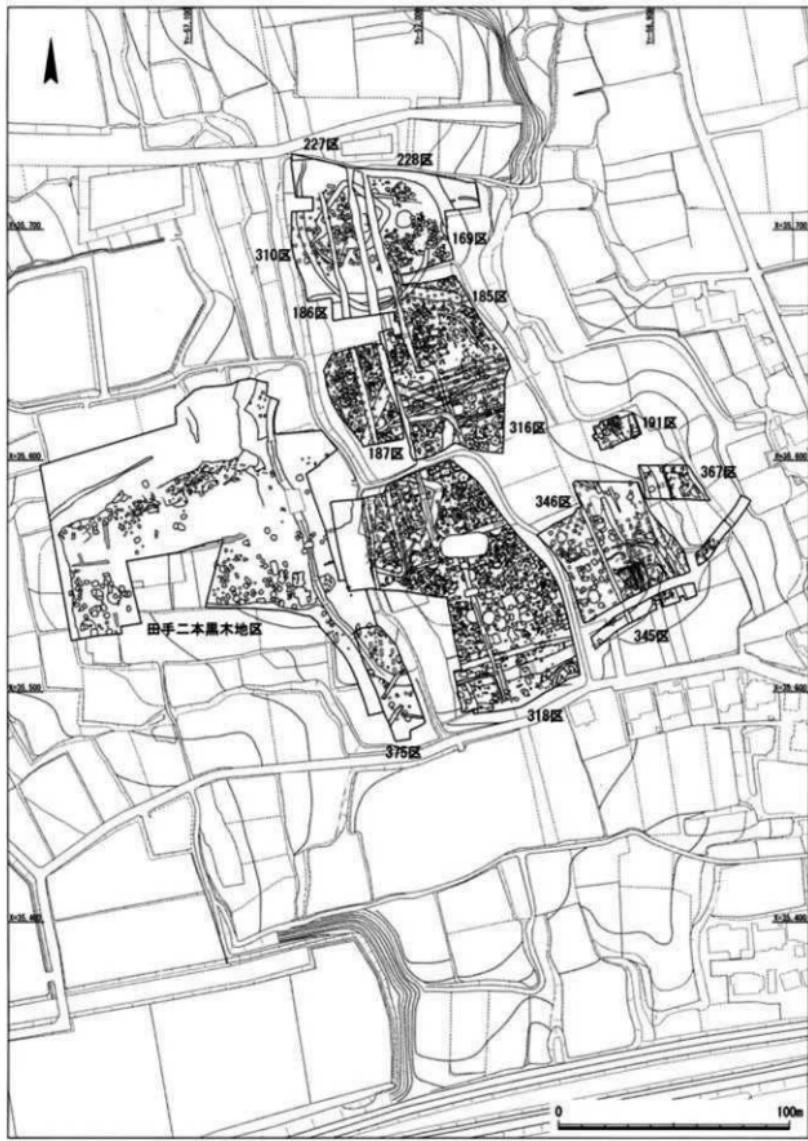
後期の遺構として、半円形に囲む環壕1条とそれを切り込んでつくられる環壕1条、直線的に東西方向に延びる「L」に曲がる溝跡1条とそれにつながる溝跡1条が存在する。また、削平を受けているが、後期の堅穴住居跡3棟も確認されている。

東西に走る環壕の南側（内部）は、187区と316区が対象となる。堅穴住居跡28棟、土坑約90基、掘立柱建物跡1棟、溝跡1条、甕棺墓6基などがある。この他、古墳時代初頭の方形周溝墓の周溝の一部と見られる溝跡も存在する。堅穴住居跡は、28棟検出しているが、平面円形の堅穴住居跡が22棟と多数を占める。円形の堅穴住居跡は、中期初頭の城ノ越段階から中期後半の須玖Ⅱ式段階まで存続する。土坑には、一部古墳時代や奈良時代とみられる土坑が一部含まれるが、60基以上が弥生時代前期後半から中期後半にかけての貯蔵穴跡である。318区同様、貯蔵穴が集中する場所である。

## (2) 田手二本黒木地区南部調査区 (191・318・345・346・367区)

本地区は、前期環壕内の中央部から南部付近にかけての地区である。特に、318・346区は面的な調査を実施したことから、弥生時代前期から中期にかけての環壕1条、堅穴住居跡42棟、土坑274基が検出されている。時期が未確定の土坑約70基のうち、多くが弥生時代に所属するものとみられ、かなりの数の土坑が存在したことになる。この他、古墳時代の前方後方墳1基や古墳時代初頭頃の堅穴住居跡6棟が確認されている。

前期の環壕は316区の南部を東西方向に走り、346区の南東部を北東に向かって延びる。191区付近で北西に方向を変え、田手二本黒木地区北部調査区の環壕出入り口部分に向け直線的に延びていく。316区での環壕は幅約4m、深さ2.4mと非常に規模が大きい。ただし、環壕から出土する土器の量は上・下層とも少量である。環壕には、須玖Ⅰ式



第2図 吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区遺構配置図 (1/2,000)

段階の小堀が切り込んでおり、316区付近では、中期前半が埋没の上限と考えられる。346区では、環壕の上層にはほぼ、完形の朝鮮系無文土器の壺が発見された状況で出土している。

また、367区では、この環壕から青銅器鑄造時に排出された銅滓が出土している。堅穴住居跡は平面が円形のものが主体を占め、住居跡から出土する土器からその最盛期が弥生時代中期にあったことが窺われる。弥生時代の土坑は300基以上存在し、その多くが貯蔵穴とみられる。貯蔵穴には、平面形が長方形を呈するものが多く、一部円形がみられる。なお、堅穴住居跡や土坑は切り合いを持つものが多く、一時期に存続した数は少なくなる。この地区での壺棺は比較的少ない。北東部に位置する191区で環壕埋没後に壺棺墓群約30基が営まれるが、集落の縁辺部にあたる。環壕の内部では、346区で13基が集中して営まれる程度である。その他、1~2基が散在的に集落内部及び環壕部分に認められる。

#### (3) 田手二本黒木地区西部調査区（田手二本黒木地区）

本調査区は、平成元年に神崎工業団地に伴い調査を実施した地点である。その南部について375調査区として平成16年に再度調査を実施した。この地点は、前期環壕の存在する丘陵の西側から大きく西に張り出した丘陵部分及びその丘陵西側斜面の約21,000m<sup>2</sup>である。

弥生時代の溝跡は5条検出している。375区の南側には、前期前半と思われる直線的な溝跡が1条認められる。この調査区の中でもっとも古い遺構のひとつである。調査区の東側には、前期環壕1条が南北方向に走る。この環壕には、多量の土器や石器を初めとする遺物のほか、シカやイノシシ、イヌ、カキ・アカガイ・テンゲニシなどの自然遺物も多数出土している。この前期環壕については、すでに別に報告を行っているが、下層の土器から前期後半以前には掘削され、城ノ越式段階の壺棺に切られることから中期初頭には埋没していたとみられる。丘陵の裾を巡る環壕2条は、後期の環壕で外環壕の一部とみられる。

堅穴住居跡は、18棟以上存在するが、弥生時代前期から中期にかけての堅穴住居は7棟である。前期環壕の内部に営まれた堅穴住居跡と比較し、その数は少ない。後世の削平も考慮に入れる必要があるが、他の堅穴住居跡は後期後半以降とみられる。200基に上る土坑は他の田手二本黒木地区同様、大部分が貯蔵穴と見られるが、丹塗土器が発見された土坑も一部存在するようである。土坑の時期は中期前半を中心として、一部中期後半に営まれる。

壺棺墓群は3ヶ所認められる。ひとつは、金海式から城ノ越式の壺棺墓群が9基、前期環壕の周辺部に集中し、その内、城ノ越式の壺棺が環壕を切る。その北側に位置する8基からなる墳墓群は削平が著しい。本稿では、図示していないが、丘陵裾部に汲田式期の壺棺21基が営まれる。

#### (4) 田手二本黒木地区のまとめと考察

これまでの調査成果から田手二本黒木地区の弥生時代前期から中期にかけての遺跡の変遷をまとめると図3・4のとおりとなる。対象とした遺構は、前期環壕内部にあたる316・318区の堅穴住居跡43棟・土坑133基である。地区内のすべての遺構の分析を終了していないが、この量の遺構があることで概ね集落変遷の傾向を把握することが可能である。<sup>31)</sup> その集落の変遷は下記のとおりまとめられる。

田手二本黒木地区では、前期前半から遺構が確認されているが、その活動が明確になるのは、前期後半以降である。この時期、丘陵の頂部を取り囲むように約22,500m<sup>2</sup>の環壕が形成される。ただし、堅穴住居跡や土坑などの遺構は少ない。ただ、田手二本黒木地区西部地区に位置する前期環壕の内部には、前期後半（板付II式投壠）の多量の土器と食器残渣が認められることから、前期環壕の周辺が生活空間であったことは間違いない。また、前期環壕の北側には、径約20mの円形の環壕が営まれる。この小さな環壕の性格はいまのところ不明確である。

前期末から中期初頭（城ノ越段階）以降、堅穴住居跡や土坑の数の増加が顕著になる。中期前半になると、前期環壕内に30棟に近い堅穴住居跡と土坑93基がつくられ最盛期を迎える。この集落は中期後半まで存続するが、次第に數を減らし、後期初頭になるといったん途絶えるようである。

環壕は前期の間は機能していたと見られるが、田手二本黒木西部地区や191区で城ノ越段階の壺棺墓に切られるこ

とから、中期初頭段階ではば、埋没していたとみられる。ただし、埋没後も環境の意味は失われず、堅穴住居跡などの集落関連遺構は環境の内部に集中する。また、田手二本黒木地区北部調査区に位置する北側環環境では、最下層から城ノ越段階の土器がまとまって出土している。このため、時期が異なる条塙の一部とみることも可能であるが、環境の位置関係からこの場所は前期環境の一部と考えることもできる。時期が異なる土器の存在は、前期環境を利用し、新たに条塙として再掘削された後に廃棄されたものと推定される。環境北側は、中期初頭以降、丘陵南部を区切る条塙として機能していたとみられる。

墳墓関係では、100基を超える壺棺墓群が環境北側に存在するほか、前期環境周辺や内部に5、6～30基のグループが9ヶ所認められる。環境内部には、346区の13基からなる壺棺墓群が最大で、小さな群は認められるものの、非常に散在的である。これらの壺棺墓群は、前期末（金海式）から中期初頭（城ノ越式）にかけて埋葬が開始された墳墓で中期前半（汲田式）がもっとも多い。これは、集落の変遷ともほぼ、一致する。墳墓は時期が未確定な点も多いため、整理を行い、集落との関係を明らかにする必要がある。

#### （参考文献）

佐賀県教育委員会「吉野ヶ里遺跡－佐賀県神埼郡三田川町・神埼町に所在する吉野ヶ里遺跡の確認調査報告書」佐賀県文化財調査報告書第100集 1990.3

佐賀県教育委員会「吉野ヶ里－神崎工業団地計画に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書」佐賀県文化財調査報告書第113集 1992.3

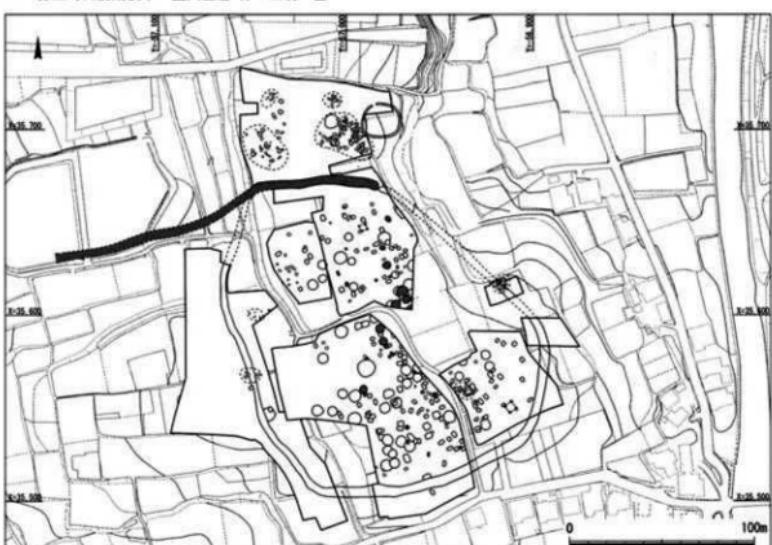
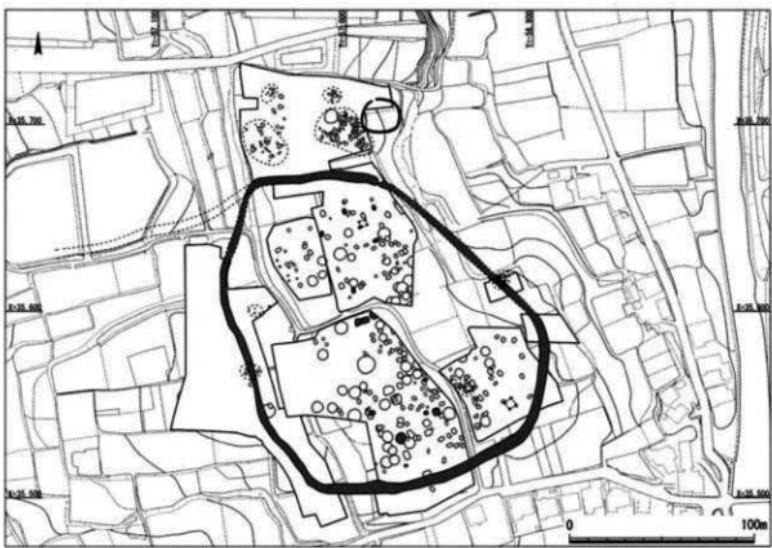
佐賀県教育委員会「吉野ヶ里遺跡－平成2～7年度の発掘調査の概要」佐賀県文化財調査報告書第132集 1990.3

佐賀県教育委員会「吉野ヶ里遺跡－平成8～10年度の発掘調査の概要」佐賀県文化財調査報告書第156集 1990.3

佐賀県教育委員会「吉野ヶ里遺跡－平成11～12年度の発掘調査の概要」佐賀県文化財調査報告書第156集 1990.3

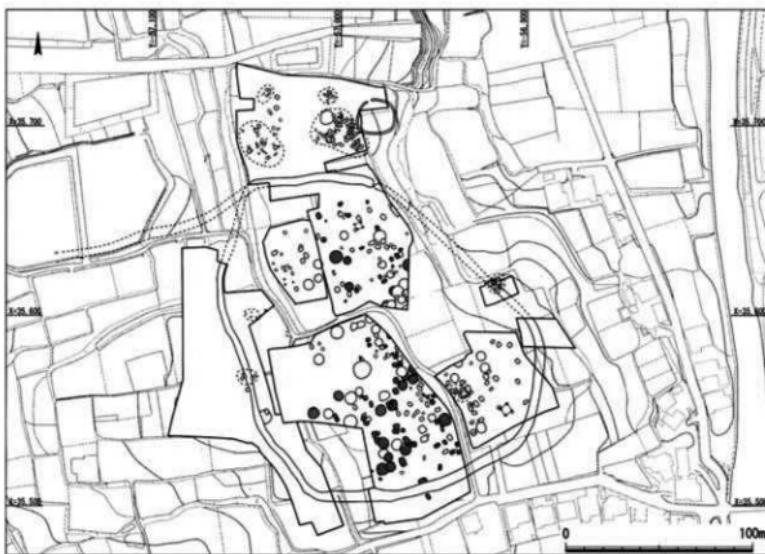
佐賀県教育委員会「吉野ヶ里遺跡－田手二本黒木地区弥生時代前期環境出土の土器と石器」佐賀県文化財調査報告書第156集 1990.3

註1) 今回報告する遺構の時期別の数は、2008年3月末段階のものである。整理作業を併行して進めているが、時期の確定していない住居跡や土坑も多くある。これらの遺構の数は今後の整理により変動することがある。

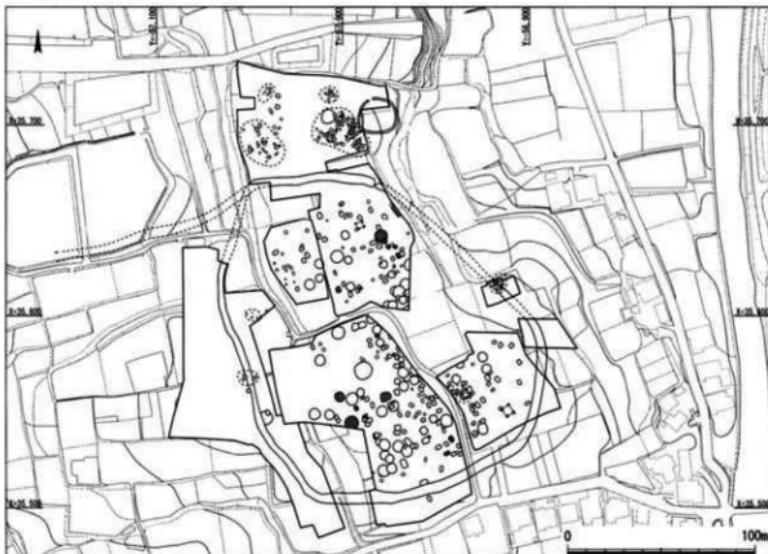


2. 弥生時代前期末～中期初頭 竪穴住居9棟 土坑22基

第3図 田手二本黒木地区集落関係遺構変遷図① (1/2,500)



3. 弥生時代中期前半 竪穴住居27棟 土坑79基



4. 弥生時代中期後半 竪穴住居5棟 土坑19基

第4図 田手二本黒木地区集落関係遺構変遷図② (1/2,500)

## 第2章 佐賀平野東部地域における弥生時代中期の土器様相

佐賀平野における弥生時代の土器編年は、前期土器（中野2004）および後期土器（蒲原2003）の編年案は提示されているが、中期土器に関する編年案はこれまで指摘されていない。また、佐賀平野の土器様相を検討する際には、佐賀市・鳥栖市域出土の質量豊富な土器資料が用いられることが多く、両市域間の佐賀平野東部地域の土器様相に関しては看過されてきた。しかし、佐賀平野東部地域には吉野ヶ里遺跡をはじめとする遺跡が多数検出されており、いずれも弥生時代中期を中心として盛行する。したがって、当該期の地域的特徴を明らかにするためには、佐賀平野東部地域における弥生時代中期の土器様相を示すことが不可欠である。

本稿では脊振山地南麓および筑後川以北の地域を対象とし、現在の行政区画では神埼市・吉野ヶ里町・上峰町・みやき町の範囲を扱う<sup>21)</sup>。吉野ヶ里遺跡を中心として、詫田西分遺跡・天建寺南島遺跡・姫方原遺跡をはじめとする近隣の集落遺跡出土土器を対象資料とする。

### 第1節 土器編年

佐賀平野東部地域の弥生時代中期の土器に関しては、これまで北部九州全域を対象として構築された武末純一氏の土器編年（武末1987）を援用して時期認定が行われてきた。しかし、武末氏により設定された土器様式は用いられず、「中期前半」などの調査担当者の経験に基づく時期区分が行われているのが現状であり、微妙な箇所での編年観の齟齬につながる。佐賀平野東部地域における弥生時代中期の土器編年は、詫田西分遺跡（森田1983）・天建寺南島遺跡（天本1989）・坊所三本松遺跡（小松1998）の報告で行われているが、各遺跡の主体時期に偏りがあるため遺跡編年に留まっており、佐賀平野東部地域全体を見通す編年が求められる（表2）。

本稿では、編年の指標となる器種として、甕（甕・丹塗甕・樽形甕）、鉢（素口縁鉢・鋤先口縁鉢）、壺（広口壺・無頭壺・袋状口縁壺）、高杯、器台（器台・筒形器台）、支脚、蓋を扱う（第5図）。また、形態的特徴以外に時期的変化を示す指標として、暗文と塗彩土器をあげる。

#### 〔第Ⅰ期〕中期初頭（城ノ越式）

全体的に前期の名残を留める。甕は、断面三角形の口縁が多く、底部は分厚く、平底・上げ底がある（1・2）。胴部はあまり張らない。鉢は、甕と同様の口縁部形態である（3）。高杯は、杯部が深い。広口壺は、頸部が短くつけねが綺麗り、直線的に立ち上がりあまり開かない（4・5）。器台および支脚<sup>22)</sup>は、上下ともに同程度やや聞く（7・8）。蓋は、丈が長く、頭部が分厚い（10）。

中期初頭には、等間隔<sup>23)</sup>の太い暗文が壺の頭部に施される<sup>24)</sup>。土器への塗彩は行われない。

#### 〔第Ⅱ期〕中期前葉（須玖工式古段陶）

甕は、平坦口縁が長く伸びはじめるが、内側への突出は目立たない（11・12）。胴部が張り、胴部最大径もやや下がる。底部は平底が主体であるが、厚みがある。樽形甕が出現する（13・14）。高杯は、深めの杯部であるが、前段階よりやや浅くなる（17）。広口壺は、頸部が直線的に聞き、胴部最大径の方が口径よりも大きい（18・19）。鋤先口縁は、前段階より口縁部が水平になり、長く伸びはじめる。蓋は、前段階よりやや据部が広がる（22）。

中期前葉では、等間隔のやや太い暗文が壺の頭部に施される。無塗彩土器が多数であるが素口縁広口壺には黒塗が施される例がある<sup>25)</sup>。

#### 〔第Ⅲ期〕中期中葉（須玖工式新段陶）

甕は、口縁部がさらに長く伸び、内側への突出も目立ちはじめる（23・24）。高杯は、鋤先口縁が長く伸びる（28）。広口壺は、頭部がさらに大きく聞き、口径が胴部最大径を上回るものが出る（29・30・31）。鋤先口縁もさらに長くなる。筒形器台が出現し、脚上の長さが短く、脚部に透かしが施される（33）。

中期中葉では、暗文施文器種のバリエーションが増える（壺・甕・高杯・筒形器台）。広口壺では、素口縁広口壺には等間隔暗文と分割暗文の2種類が施文されるが、鋤先口縁広口壺は等間隔暗文だけである。丹塗土器の割合が増加するが、50%は越えない。



表2 佐賀平野東部地域における主要編年案の併行関係

#### [第IV期] 中期後葉（須玖II式古段階）

壺は、口縁部がさらに長く伸び、内側への突出も目立つようになる（36）。高杯は、脚部が長くなる（39）。広口壺は、頭部がさらに大きく開くようになり、口縁部も長く伸びる（40-41）。筒形器台は、前段階よりさらに長大化する（42）。器台は、口径・底径が大きくなる（43）。蓋は、低く据部が広がり、頭部の厚みが薄くなる（44）。

中期後葉では、壺・壺・高杯・筒形器台に暗文が施される。広口壺の口縁部形態に応じて、暗文と塗彩の対応関係が明確化する。つまり、素口縁広口壺は等間隔暗文・分割暗文と丹塗が施され、鋸先口縁広口壺は分割暗文と黒塗・無塗彩が相関する。全体的に丹塗土器の割合が増加する。

#### [第V期] 中期末葉（須玖II式新段階）

壺は、口縁部がくの字状に立ち上がるるものが多くなるが、口縁部の様は明瞭ではない（45）。胴部は張りが強くなる。高杯は、口縁部は長く伸びるが、脚部は短くなる（51）。広口壺は、頭部の締まりがゆるくなり、頭部が大きく開く。袋状口縁壺が出現する（52）<sup>26)</sup>。筒形器台は、さらに長大化し、透かしは施されない（54）。

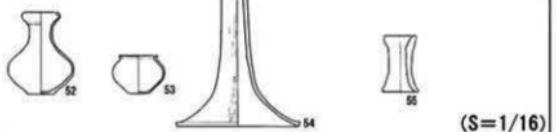
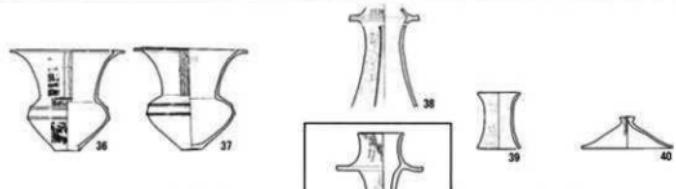
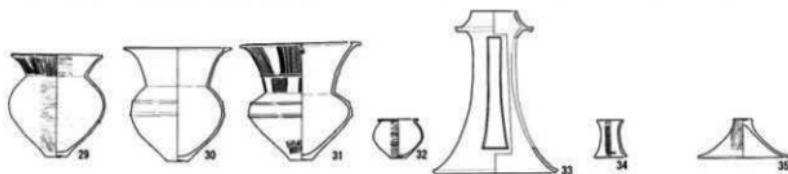
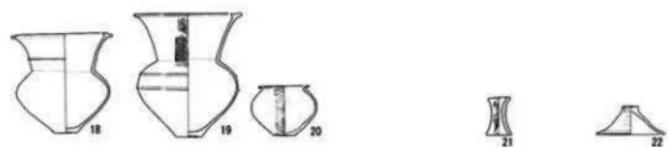
中期末葉には、暗文施文器種は壺・筒形器台だけになり、丹塗と100%対応する。等間隔暗文と分割暗文が併存するが、分割暗文が多数になる。

佐賀平野東部地域における弥生時代中期土器は、基本的には遠賀川以西系須玖式土器の編年観（武末1987）と大差ない。佐賀平野東部地域の土器の特徴は、土器の形態的特徴や画期の時期より、むしろ器種の存否や壺口縁部形態のバリエーション・比率・出現のタイミングに現れる<sup>27)</sup>。本稿では佐賀平野東部地域の現状の整理を行ったにすぎず、今後さらに細かな検討を行うことが必要である。ただし、佐賀平野東部地域では、前期末～中期初頭・中期前葉～中期末葉に相当する資料が多いが、中期後葉～末葉の資料が非常に少ない点は注意する必要がある。

	壺	鉢	高杯
<b>第Ⅰ期</b> 中期初頭 (城ノ越式)	1 2	3	
<b>第Ⅱ期</b> 中期前葉 (須玖Ⅰ式古段階)	11 12	13 14 15 16	17
<b>第Ⅲ期</b> 中期中葉 (須玖Ⅰ式新段階)	23 24	25 26 27	28
<b>第Ⅳ期</b> 中期後葉 (須玖Ⅱ式古段階)	29 36	37	38 39
<b>第Ⅴ期</b> 中期末葉 (須玖Ⅱ式新段階)	45	46 47 48 49 50	51

第5図 佐賀平野東部地域弥生時代中期土器編年

壺 器台 支脚 蓋



## 第2節 特徴的な土器について（図6）

吉野ヶ里遺跡では、在地の土器様式構造に含まれない土器や、地域的特徴をもつ土器の出土が確認される。以下、個別に事例を確認し、吉野ヶ里遺跡の特徴を明らかにする。

### ①朝鮮系無文土器

吉野ヶ里遺跡の吉野ヶ里丘陵地区・田手二本黒木地区からは、朝鮮系無文土器の出土事例が確認される。弥生時代中期初頭を中心として、前期末～中期前半の時期幅におさまる。器種は朝鮮系無文土器の甕（1～5）、牛角把手付壺（6）および牛角把手が出土している。

### ②瓢形土器

吉野ヶ里遺跡出土の瓢形土器（7）は、複合土器上部の甕と下部の壺との接合位置における屈曲角度から判断すると、下部の甕胴部が丸みを帯びていない古い型式のものである。この瓢形土器は、中期前葉に二日市地峠帯～筑後川流域～佐賀西部地域の範囲に分布しており（8）、中期後半期に福岡地域～筑紫地域にかけて分布する複合土器下部の甕胴部が丸みを帯びる新しい型式の瓢形土器（9）（高田2003）に先行する。弥生時代開始期の資料で、久保泉丸山遺跡支石墓供獻土器に甕と壺を組み合わせた複合土器（10）がすでに存在しており、佐賀平野西部地域において複合土器を生み出す動向が早い時期から存在していた可能性が想定される。

### ③遠賀川以東系須玖式土器

吉野ヶ里遺跡からは、少數ではあるが、遠賀川以東系須玖式土器の甕の跳ね上げ口縁部破片（11・12）および長頸甕口縁部破片（16）が出土している。特に、甕口縁部の跳ね上げ部形態が明瞭ではなく、口縁端部をわずかに上方につまみ上げる弱い「跳ね上げ状」口縁を呈することから、小澤住恵氏が指摘した筑後川中流域で出現頻度が高い型式のものと判断できる（14）（小澤2005）。この型式は、明瞭な跳ね上げ口縁の遠賀川以東系須玖式土器（15）と、口縁端部を丸くおさめる遠賀川以西系須玖式土器（13）との中间的様相を示す。時期は中期末に相当し、地域間関係および時間的併行関係を検討する上で有効な資料である。

### ④脚付無頸壺

脚付無頸壺は、糸島地域～壱岐を中心として分布するが、佐賀平野東部地域でも確認されており、さらに韓国昌原茶戸里遺跡（佐賀県教育委員会2007）でも出土している。糸島地域で出土する脚付短頸壺は非常に丁寧に製作される（精製胎土、丁寧な丹塗、多量の暗文施文、多条突帯）（20）が、吉野ヶ里遺跡出土土器（18-19）は丹塗のみ施される。時期は中期末に相当する。同時に、本分貝塚で「糸島型祭祀用土器」（石橋1992）の袋状口縁壺（21）が出土しており、佐賀平野東部地域と糸島地域との関連が想定できる。また、脚付注口土器（22）の出土が注目される（間壁1999）。

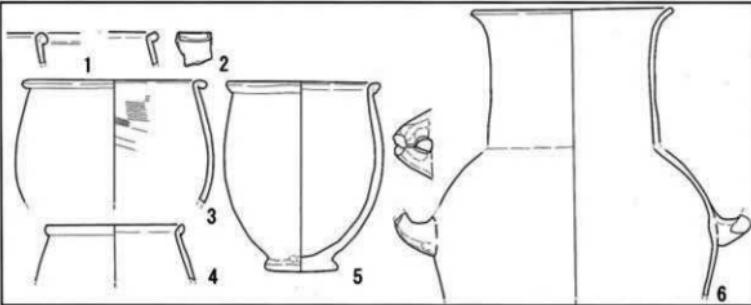
中期前半期においては、瓢形土器や柱状土製支脚にみられるように、脊振山地南麓～東麓にかけての地域に特徴的な土器が吉野ヶ里遺跡でも出土する。特に、中期初頭に朝鮮系無文土器が環壕集落内で確認される点は、渡來系集団と弥生人社会の関係や、朝鮮系無文土器が多数出土する近隣遺跡との関係を検討する上で重要である。また、中期後半期には、糸島地域や遠賀川以東地域～筑後川中流域にかけての地域に特徴的な土器が吉野ヶ里遺跡で出土する点が注目される。これらの土器は面的分布を示すのではなく、吉野ヶ里遺跡に点的に分布することから、吉野ヶ里遺跡の交通の結節点としての重要性が指摘できる。

## 第3節 まとめと今後の課題

吉野ヶ里遺跡を中心とした佐賀平野東部地域弥生時代中期土器編年を構築する上での問題として、①良好な一括資料の抽出、②弥生時代前期/中期および中期/後期の画期、③「日常土器」と「祭祀土器」の区別の3点があげられる。

まず、良好な一括資料を抽出することが重要であるが、吉野ヶ里遺跡は継続的に営まれた大遺跡であるがゆえに一括資料を見出しが困難である。加えて、吉野ヶ里遺跡だけでなく周辺集落遺跡においても、弥生時代前期末～中期初頭と中期前葉～中葉の2時期に土器の出土が偏り、特に中期後葉～末葉の時期の土器出土量が少ないため、中期全体の通時的検討が難しい。土器研究を行う上で、弥生時代前期から後期まで安定した土器出土量のある吉野ヶ里遺跡は重要な遺跡であるが、あまりに量が多いため個別土器の観察に関してはまだ不十分である。

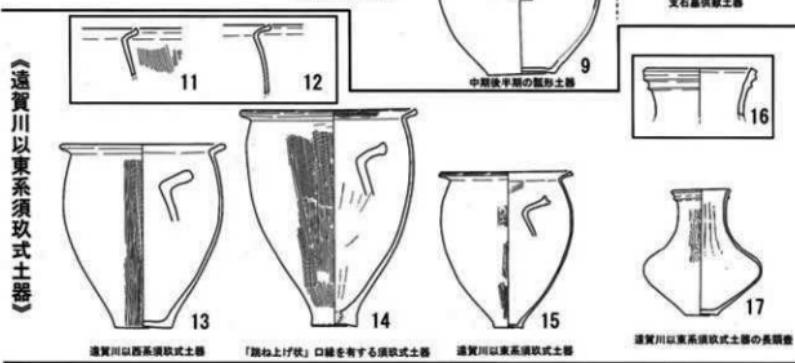
《朝鮮系無文土器》



《瓢形土器》



《遠賀川以東系須玖式土器》

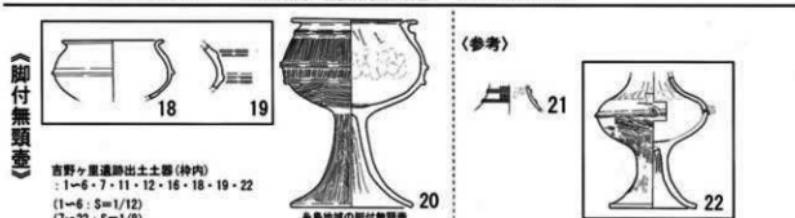


〈参考〉



遠賀川以東系須玖式土器の長頸型

《脚付無頭壺》



吉野ヶ里遺跡出土土器(仲内)  
: 1-6・7・11・12・16・18・19・22  
(1-6 : S=1/12)  
(7-22 : S=1/8)

第6図 弥生時代中期の吉野ヶ里遺跡における特徴的な土器

また、土器編年における弥生時代前期と中期の画期、中期と後期の画期を明確に示すことができない点が問題である。吉野ヶ里遺跡の出土事例からは、前期～中期および中期～後期への変化は連続的なものであり、形態変化などの明確な基準を元にした画期を示すことは難しいと判断した<sup>註1)</sup>。むしろ、中期土器同士の関係だけではなく、前期土器と中期土器、中期土器と後期土器の共伴事例に注意を払うことが肝心であろう。

さらに、佐賀平野東部地域特有の問題として、「日常土器」と「祭祀土器」の区別が困難である点があげられる。佐賀平野東部地域～筑紫地域では、特に中期前半期において、集落内土壤から「日常土器」および「祭祀土器」が混在する状況で多数出土する事例が多い<sup>註2)</sup>。中期後半期においても、佐賀平野東部地域では祭祀遺構出土土器に「日常土器」の占める割合が高い。したがって本稿では、そもそも「祭祀土器」が存在するのではなく祭祀行為に用いられた結果「祭祀土器」として認識されるとの立場をとっており、両者の区別は行っていない<sup>註3)</sup>。

本稿では、吉野ヶ里遺跡が、佐賀平野東部地域に立脚点を置く一方で、弥生時代中期を通じて他地域と強い関係を持つ重要な遺跡であることを土器の観点から再確認した。佐賀平野東部地域における弥生時代中期土器研究発展の系図となれば幸いである。

#### 註)

- 註1) 対象範囲の決定に際しては、自然地形の条件に加えて、道路分布のまとまりの点から判断した。
- 註2) 図5-9の柱状型土製支脚は、前期末～中期初頭の脊振山地東側周辺（早良地域～二日市地峡帯～筑紫地域～佐賀平野東部地域）に出土が限られた形態である。支脚として報告されているが、精製胎土で作られ、ススコゲの付着が見られないことから、用途は不明である。高さは10cm程度、中実で、断面は円形・方形の2種がある。上部に棒状の凹みがあったり、体部中央に穴が貫通しているなど、バリエーションは豊富である。
- 註3) 暗文については、1本ずつ等間隔に施すタイプを「等間隔暗文」、数本ずつまとめて施すタイプを「分割暗文」と呼ぶ。
- 註4) 中期初頭段階で土器に暗文を施す地域は、佐賀平野東部地域～筑紫地域に限られる。
- 註5) 弥生時代中期前半期には、佐賀西部地域～筑紫地域～筑後地域の範囲で窓に黒墨を施す例が見られる。朝鮮系無文土器の黒色磨研技法（岡2006）、要棺に黒墨を施す技法（井上1978）と合わせて考慮する必要がある。
- 註6) 袋口縁壺の出現時期に関しては、佐賀地域における中期と後期の境界の基準とする見解（小松1998・蒲原2003）がある。しかし、佐賀平野東部地域における袋口縁壺は須玖Ⅱ式新段階～高三瀬式古段階の土器群と共伴して出土する事例が多いため、福岡地域と比較してややタイミングが存在する可能性はあるものの、中後期の境界の基準にはならないと判断した。
- 註7) 佐賀平野東部地域においては、①變形土器のうち博形變の占める割合が高い、②広口壺のうち鷹先口・緑広口壺の占める割合が素口・緑広口壺と比べて高い、③須玖Ⅱ式新段階において長く伸びた鷹先口・緑端部があまり垂れ下がらない、などが特徴である。今後さらに検討していくことで、より詳細な地域的特徴が明らかになるであろう。
- 註8) 濱口孝司氏は、弥生時代中後期の境界をめぐる北部九州～近畿の併行関係におけるズレの問題を述べる中で、土器のみで時期を区切ることの不可能さと危険さを指摘している。特に、文様に大きな時間的变化の属性を見出す四輪文土器様式と比較すると、形態変化に時間的属性を見出す須玖式土器様式では漸移的に変化するため土器だけで明快に時期区分を行うことはできず、何らかの外的な尺度が必要であるとの見解を示した（浜口2004）。
- 註9) 吉野ヶ里遺跡、天建寺南島遺跡、託西西分遺跡、大坂井遺跡などで確認される。いずれの遺跡でも、形態は多様であるが方形を基調とした土壤から、多量の土器が廃棄された状態で出土している。
- 註10) 「日常土器」および「祭祀土器」の区別と出土遺構の性格との関係は、「祭祀土器が出土するから祭祀遺構である」としくは「祭祀遺構から出土するから祭祀土器である」との循環論理規定が行われているのが現状である。なお、祭祀の脈絡で出土する土器には器形の強調（壺頭部の拡大、高杯・筒形容器台脚部の長大化など）や加飾（丹絵、暗文、多条突帯など）が行われているものが多いが、これは祭祀行為に視覚的訴求力の強い土器が優先して選択・使用された結果であり、中期後半期にさらに傾向が強まるものと考えられる。今後は、場に応じた土器の使用方法および目的を考慮した上で検討が必要である。

#### 【参考文献】

- 天本洋一1988「まとめ」「天建寺南島遺跡」三根町文化財調査報告書第6集 三根町教育委員会  
石橋新次1992「糸鳥型祭祀用土器の成立とその意義」有明文化を考える会編「北部九州の古代史」名著出版  
井上裕弘1978「要棺を黒く塗る風習」山口陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書第9集 福岡県教育委員会  
梅崎恵司2005「東北部九州の弥生時代中期から後期前半の土器」「研究紀要」第19号 北九州市芸術文化振興財團埋蔵文化財調査室  
岡めぐみ2005「久保遺跡出土の黒色磨研土器について」「久保遺跡」久留米市文化財調査報告書第22集 久留米市教育委員会  
小泽住恵2005「牟婁遺跡出土の須玖Ⅱ式土器群について」「牟婁遺跡Ⅱ」下巻 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第23集 福岡県教育委員会  
片岡宏二1999「弥生時代渡来人と土器・青銅器」雄山閣出版  
蒲原宏行2003「佐賀平野における弥生後期の土器編年」「満を研究者」第27集 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館

小松説1998「佐賀平野の弥生中期後半～後期初頭の土器群」「筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書」5 佐賀県文化財調査報告書第136集 佐賀県教育委員会

佐賀県教育委員会編2007「日韓特別企画展 吉野ヶ里遺跡と古代韓半島」 佐賀県教育委員会

高田知恵2003「瓢形土器について」「大城中筒井遺跡」北野町文化財調査報告書第17集 北野町教育委員会

武末純一1987「須灰式土器」「弥生文化の研究」第4巻 雄山閣出版

武末純一2004「弥生時代前半期の層年代」「福岡大学考古学論叢」小田富士雄先生追憶記念事業会

田崎博之1985「須灰式土器の再検討」「史蹟」第122輯 九州大学文学部

徳富則久1996「弥生～古墳時代の佐賀平野平坦地の集落」「Museum Kyushu」第52号 博物館等建設推進九州会議

中野光2004「佐賀平野の弥生早・前期土器編」「板付I式期の再検討」発表要旨集 球藏文化財研究会

平美典2004「北九州における中期～後期前半の土器と併行関係」「弥生中期土器の併行関係」第53回埋蔵文化財研究集会

間瀬義子1999「弥生時代の九州の注口土器」「神女大史学」第16号 神戸女子大学史学会

溝口孝司2004「須灰式土器様式と凹線文土器様式」「弥生中期土器の併行関係」基礎講演 第53回埋蔵文化財研究集会

森田孝志・徳富則久1983「続括」「筑西分貝塚」千代田町文化財調査報告書第2集 千代田町教育委員会

#### 〔国版〕使用土器出土遺構

〈図5〉

吉野ヶ里遺跡〔吉野ヶ里丘陵地区〔V区-9: No12トレンチ、11: SK04/II区-19: SK0609/VII区-36・38・43・50: SK1159〕、志波屋四の坪地区〔27・28・47・54: SX0185、14・18: SK1262、25・26・30・39・42: SK0430〕、手二本黒木地区〔I区-40: SX210、46: 黒色流れ込み〕、託田西分遺跡〔I区-13: SD054、17・23: SK012、15・24: SK003、21: SK041、22: SE002第6層、32: SK013、34: SK014〕、II区-12: 包含層、29: SK301/III区-6・7: SK6500〕、船石遺跡〔1: SH039、2: SK346〕、瓶原原遺跡〔F地区-3・5: SK203、45・48・49・55: SB120、52: SB208、53: SB110/B地区-44・29号遺構〕、西田遺跡〔20: SK2043、37: SK2065、41: SK2063〕、八藤遺跡〔15: SK966〕、天達寺南島遺跡〔16: SK103、29・31: SK118〕、本分貝塚〔51: 第2層〕、利田柳遺跡〔9区-4: SK9106、8: SK9085〕、宝満谷遺跡〔33: SK001祭祀遺構〕、貴別当神社遺跡〔10: SK038〕(S=1/16)（吉野ヶ里遺跡出土土器以外は各報告書より引用・変更・再トレース）

〈図6〉

吉野ヶ里遺跡〔吉野ヶ里丘陵地区〔VII区-1: SH2437、6: SK2449、7: SD1801、11: SK2424/VII区-12: SH1113、16: SH1112/V区-18・19・22: SD01〕、手二本黒木地区〔III区-2: SD336、3: SK914上層、4: ST0568、5: SD336上層〕、みやこ遺跡〔8: SK219〕、那珂遺跡〔9: 21次調査第48号祭祀土壤C群〕、久保泉丸山遺跡〔10: SA026支石墓〕、瓶原原遺跡〔13: F地区SB120〕、堂塙遺跡〔14: I区17号土坑〕、前田山遺跡〔15: 地区43号祭祀下室、17: C地区21号祭祀遺構〕、井原塙遺跡〔20: 1号祭祀遺構〕、本分貝塚〔21〕(1~6: S=1/12、7~22: S=1/8)（吉野ヶ里遺跡出土土器以外は各報告書より引用・変更・再トレース）

#### 〔国版〕使用土器掲載報告書

天本洋一編1989「天達寺南島遺跡」三根町文化財調査報告書第6集 三根町教育委員会

大庭孝夫編2004「堂塙遺跡Ⅱ」一般国道210号浮羽バイパス周辺埋蔵文化財調査報告第20集 福岡県教育委員会

桑原幸司編2000「西田遺跡」神埼町文化財調査報告書第66集 神埼町教育委員会

桑原幸司編2001「西田橋遺跡」神埼町文化財調査報告書第71集 神埼町教育委員会

多々良友博編1981「瓶原原遺跡」中原建設

田平健児・久保和彌編1979「原方原遺跡」中原町教育委員会文化財調査報告書第3集 中原町教育委員会

堤安信編1991「貴別当神社遺跡Ⅰ」千代田町文化財調査報告書第13集 千代田町教育委員会

徳富則久編1996「筑西分貝塚Ⅱ」千代田町文化財調査報告書第20集 千代田町教育委員会

徳富則久編1999「筑西分貝塚」千代田町文化財調査報告書第23集 千代田町教育委員会

長嶺正秀編1987「前田山遺跡」行橋市文化財調査報告書第19集 行橋市教育委員会

林覚編1992「井原塙遺跡」前原町文化財調査報告書第38集 前原町教育委員会

原田大介編1989「船石遺跡Ⅱ」上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会

原田大介編1999「八藤遺跡Ⅲ」上峰村文化財調査報告書第16集 上峰村教育委員会

原田保則編1986「みやこ遺跡」武雄市文化財調査報告書第15集 武雄市教育委員会

東中川忠美編1980「宝満谷遺跡」北茂安町教育委員会

東中川忠美編1986「久保泉丸山遺跡」九州機械自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 佐賀県教育委員会

藤口健二編1981「本分貝塚」佐賀県立博物館調査研究者第7集 佐賀県立博物館

森田孝志・徳富則久編1983「筑西分貝塚」千代田町文化財調査報告書第2集 千代田町教育委員会

山口譲治編1992「那珂5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集 福岡市教育委員会

本稿作成にあたっては、七田忠昭・細川金也・梅崎恵司・中野光・森田孝志の諸氏および佐賀県教育委員会・吉野ヶ里遺跡発掘調査事務所の皆さまから多大な御意見・御協力をいただきました。末筆ながら記して感謝いたします。

## 第3章 田手二本黒木地区（316・318・346調査区）出土の石器

今回報告をおこなうのは、田手二本黒木地区的SD0001環境内部に位置する316・318・346調査区から出土した石器資料のうち、固化をおこなった資料269点と、吉野ヶ里遺跡全体から出土した武器形石製品（磨製石剣・磨製石鎌・石戈・墳墓出土打製石族）148点、の合計417点である。

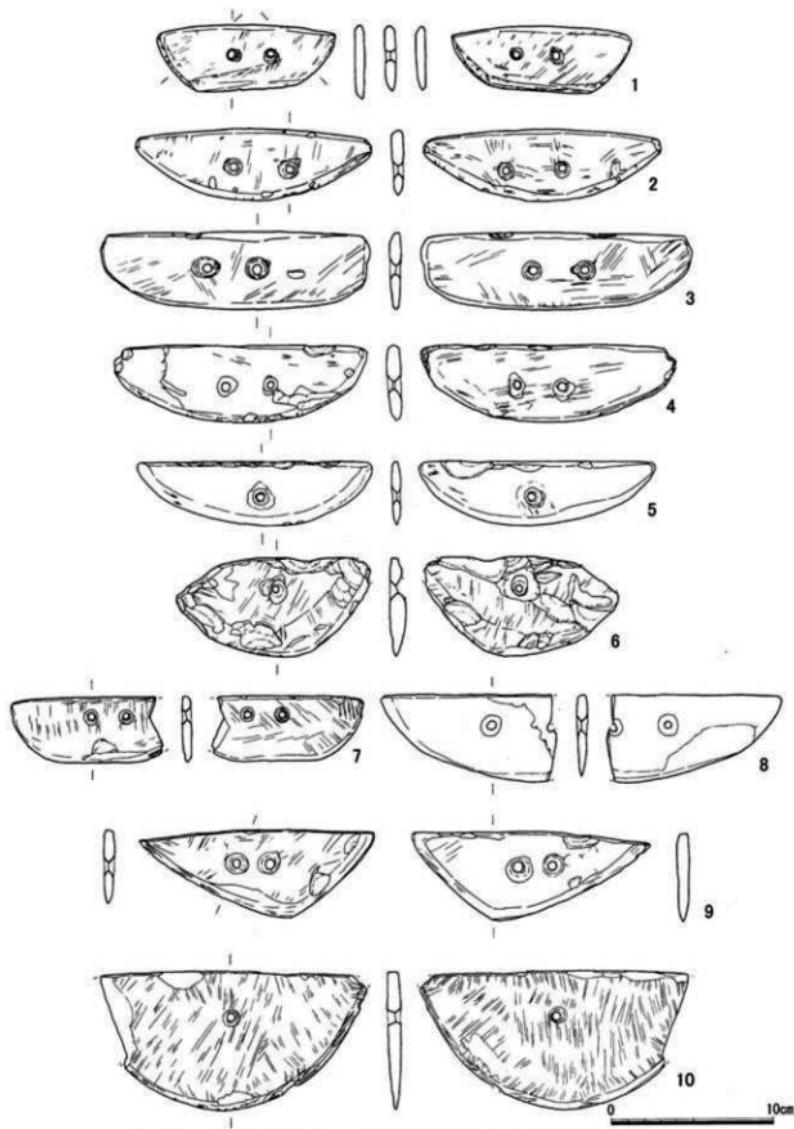
本章では、大陸系磨製石器類と剥片石器類に大別し、器種ごとに順に説明をおこなう。各個別資料の法量・出土遺構・時期などの情報については本文中では省略し、巻末の表13・14に一括して記載している。また、当該調査区から出土した磨製石剣・磨製石鎌については、次の第4章：吉野ヶ里遺跡出土の武器形石製品のなかで併せて報告をおこなう。

資料の石材鑑定においては、北九州市立自然史・歴史博物館の藤井厚志氏、北九州市芸術文化振興財團埋蔵文化財調査室の梅崎恵司氏からの御教示を賜った。文中の石材名称については前回の報告（細川・梅崎編2005）と同様、藤井氏の設定した用語で統一した。なお、石材については第5章：まとめで後述する。

### 第1節 大陸系磨製石器

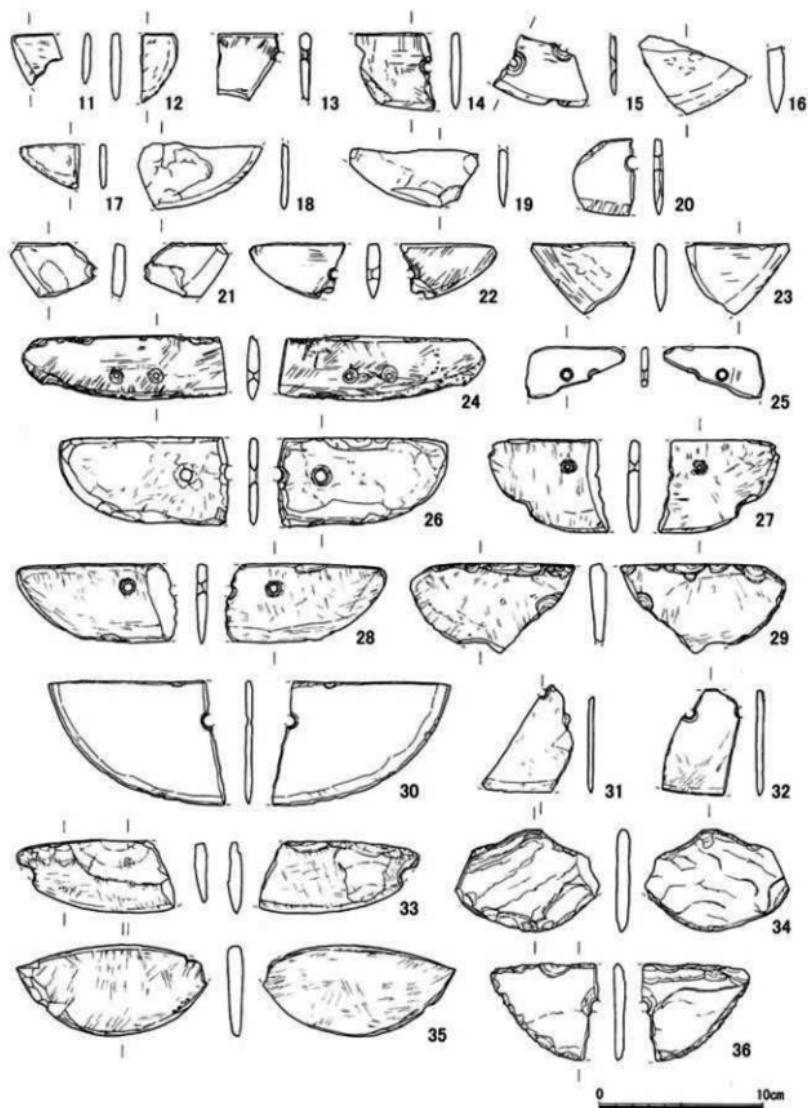
#### （1）石庖丁（第7・8図）

- 1：平面形は刃部中央が直線的で、背部側が僅かに膨らむ外湾刃の完形品である。刃部平面形は両端が左右交互刃、中央部は両刃で、砥ぎ直しによりやや斜めの直線刃である。刃部中央には微細剥離痕が残存する。刃部縦断面形は、交互刃の両端が片刃に近い偏刃で中央部分は左右対称的な両刃である。孔は両孔とも敲打後両面からの回転穿孔である。背部横断面は研磨により丸みを帯びた形状である。研磨は全体的に丁寧に施されている。石材は赤紫色泥岩である。
- 2：平面形は背部側が僅かに膨らむ外湾刃半月形の完形品である。刃部縦断面形は左右対称的な両刃である。孔は両孔とも敲打後両面からの回転穿孔である。孔の位置が低いことから、刃部の研ぎ直しによって幅が狭まり、細身になつたものとみられる。研磨は全体的に丁寧に施されている。石材は赤紫色泥岩である。
- 3：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形で、孔部分で接合する完形品である。孔は両孔とも敲打後両面からの回転穿孔である。背部横断面は研磨による平坦面が形成されているが、二箇所に背潰れ痕が認められる。刃部は鏽が不明瞭で、鈍い両刃である。研磨は全体的に丁寧に施されている。石材は赤紫色泥岩である。
- 4：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。片側端部を僅かに欠損し、孔部分で接合する。孔は両孔とも両面からの回転穿孔である。孔の位置が低いことから、刃部の研ぎ直しによって幅が狭まり、細身になつたものとみられる。刃部は鈍い両刃である。石材は片岩である。
- 5：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形の完形品である。孔は1つで両面からの回転穿孔である。孔の位置が低いことから、刃部の研ぎ直しによって幅が狭まり、細身になつたものとみられる。刃部は鋭利で、鏽が明瞭な左右対称的な両刃である。石材は凝灰質粘板岩ホルンフェルスである。
- 6：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形で、端部を僅かに欠損するがほぼ完形である。孔は1つで両面からの回転穿孔であるが、両面とも外孔が比較的大きい。刃部縦断面は左右対称的な両刃である。背部横断面は研磨による平坦面が形成されている。研磨は全体的に丁寧に施されている。石材は緑色片岩である。
- 7：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。片側端部を欠損する。背部横断面は研磨による平坦面が形成されている。刃部縦断面は両刃に近い偏刃であるが、端部は研ぎ出し途中とみられる。孔は両孔とも両面からの回転穿孔である。研磨は全体的に丁寧に施されているが、一部にやや粗い研磨痕を残している。石材は赤紫色泥岩である。
- 8：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。孔部分で折損し、全体の約2/3が残存する。背部縦断面は研磨による平坦面が形成されている。孔は両孔とも敲打後両面からの回転穿孔である。全体的に風化が激しく、研磨痕は残存していない。石材は凝灰質粘板岩ホルンフェルスである。
- 9：平面形は背部が直線的な三角形状を呈し、孔部分で接合する完形品である。孔は両孔とも両面からの回転穿孔で、孔間距離は比較的短い。刃部は鏽が明瞭な左右対称的な両刃である。石材は凝灰質粘板岩ホルンフェルスである。
- 10：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。両端部を欠損する。孔は1つで両面からの回転穿孔である。刃部



第7図 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土石庖丁①(1/3)

- 縦断面は左右対称的な両刃である。背部縦断面は研磨による平坦面が形成されている。研磨は全体的に非常に丁寧に施されている。刃部には表裏ともに使用痕とみられる面的な光沢が明瞭に認められる。石材は灰色凝灰岩である。
- 11：背部が直線的で、刃部が膨らむことから外湾刃半月形の端部片とみられる。石材は凝灰質粘板岩である。
- 12：平面形は背部が直線的で、孔部近くの小片である。孔は両面からの回転穿孔である。石材は凝灰岩である。
- 13：平面形は背部が直線的な、孔部近くの小片である。孔は両面からの回転穿孔である。研磨は全体的に丁寧に施されている。石材は石英玄武岩である。
- 14：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。背部から孔を通って縱方向に折損する。背部横断面は研磨によって角張る形状である。刃部は薄い鏡をもつ両刃である。孔は両面からの回転穿孔である。研磨は全体的に丁寧に施されており、粗い研磨痕が明瞭に観察される。石材は赤紫色泥岩である。
- 15：刃縁から両孔にかけての小片で、孔部分を通って折損している。孔は片面からの回転穿孔に偏っており、左孔の位置が刃部に近いことから二次穿孔である可能性がある。石材は凝灰質粘板岩である。
- 16：刃縁の一部を残存する小片である。刃の湾曲度と厚さから大型石庖丁とみられる。表面は風化による剥落のため、研磨痕は不明瞭である。石材は凝灰質粘板岩である。
- 17：平面形は背部が直線的な外湾刃で、孔よりも左側で折損する端部片である。石材は凝灰質粘板岩である。
- 18：外湾する刃縁の一部を残存する小片である。全体的に風化が激しく、表面の一部が剥落している。石材は凝灰質粘板岩である。
- 19：外湾する刃縁の一部を残存する小片である。全体的に風化が激しく、表面の一部が剥落している。石材は凝灰質粘板岩である。
- 20：外湾する刃縁の一部を残存する小片である。石材は凝灰質粘板岩である。
- 21：片側端部の破片である。残存する背部と刃縁が直線的なことから平面形は三角形状とみられる。全体的にやや厚手である。孔は敲打後両面からの回転穿孔である。全体的に風化が激しく、研磨痕は不明瞭である。石材は凝灰質粘板岩である。
- 22：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。孔部分を通って折損する。孔は両孔とも両面からの回転穿孔である。背部は研磨によって平坦面が形成されている。研磨は全体的に丁寧に施されている。石材は赤紫色泥岩である。
- 23：端部片側の破片である。残存する背部と刃部が直線的なことから平面形は三角形状とみられる。石材は凝灰質粘板岩である。
- 24：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。片側端部を欠損する。背部が長く、両孔の位置が低いことから、大型品の刃部研ぎ直しによって細身になったとみられる。刃部は薄い鏡をもつ偏刃である。孔は両面からの回転穿孔である。石材は赤紫色泥岩である。
- 25：平面形は背部が直線で、刃部と両端部を欠損する小片である。孔は両面からの回転穿孔である。全体的に風化が激しく、研磨痕は残存していない。石材は凝灰質粘板岩である。
- 26：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。孔部分を通って縦方向に折損する。孔は両面からの回転穿孔であるが、片面に偏っている。風化によって表面は剥落しており、研磨痕は認められない。石材は凝灰質粘板岩である。
- 27：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。孔部分を通って縦方向に折損する。孔は敲打後両面からの回転穿孔である。刃部は薄い鏡をもつ偏刃である。研磨は全体的に丁寧に施されている。石材は砂岩である。
- 28：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。孔部分を通って縦方向に折損する。刃部は中央部が直線的で端部は左右交互刃である。孔は両面からの回転穿孔である。破損面の一部に研磨が施されていることから、折損後に転用が図られたものとみられる。刃部は左右対称的な両刃である。研磨は全体的に丁寧に施されており、一部に粗い研磨痕が認められる。石材は凝灰岩である。
- 29：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。孔部分を通って斜方向に折損する。背部横断面は研磨によって平坦面が形成されている。石材は石英玄武岩である。
- 30：平面形は背部が直線的な大型の外湾刃半月形で、部分を通って縦方向に折損する。孔は両面からの回転穿孔であ



第8図 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土石庖丁②(1/3)

る。背部横断面は研磨による平坦面が形成されている。刃部は薄い鎌をもつ偏刃で、全体的に身薄である。石材は凝灰質粘板岩である。

31：大型の外湾刃半月形とみられる刃部片である。全体的に風化しており、研磨痕はやや不明瞭である。全体的に身薄で、刃部は偏刃である。石材は凝灰質粘板岩である。

32：平面形は背部が直線的な大型の外湾刃半月形とみられる。背部と刃部の一部を残存し、両孔部分で折損する。孔はほぼ片面のみからの回転穿孔である。全体的に風化が激しく、研磨痕は認められない。石材は凝灰質粘板岩である。

33：平面形は背部が僅かに膨らむ外湾刃半月形である。片側端部を欠損する。端部には明瞭な抉り加工が施されている。背部横断面は研磨による平坦面が形成されている。製作時のものとみられる表面の剥離面に回転穿孔途中的痕跡が認められる。研磨は全体的に丁寧に施されているが、背部近くには未研磨の部分が認められる。このことから穿孔直前（仕上げ段階）の未製品とみられる。石材は赤紫色泥岩である。

34：平面形は紡錘形に近い形状である。石材の業理に沿って板状に剥離した後、周縁部に剥離調整を施した段階の未製品とみられる。背面と刃部の一部に僅かに研磨が施されているが、左側面には自然面が残存する。石材は白色片岩である。

35：平面形は紡錘形で、端部を僅かに欠損するがほぼ完形である。背部側が身厚である。研磨は全面丁寧に施され、研磨の方向も明瞭である。刃は研ぎ出されておらず、穿孔もなされていないことから、研磨段階の未製品とみられる。石材は石英玄武岩である。

36：平面形は背部が直線的な外湾刃半月形である。孔部分を通じて縦方向に折損する。背部から刃部にかけて両面から調整剥離が施されており、打裂調整段階の未製品とみられる。孔は両側からの回転穿孔である。穿孔途中に折損したものか。石材は凝灰質粘板岩である。

## (2) 両刃石斧（第9・10・11・12図）

いわゆる太形蛤刃石斧、繩文系の両刃の磨製石斧を合わせて「両刃石斧」と呼称する。第9図は太形蛤刃石斧で、石材は40が細粒砂岩でそれ以外は全て玄武岩である。

37：刃縁と基端部を僅かに欠損するが完形である。平面形は基部がやや窄まり平基で、刃部は僅かに偏刃である。基端部には敲打痕が残存する。刃部横断面は左右非対称的な蛤刃である。側縁部は身部のほぼ中央付近を境に、上半分が敲打・下半分が研磨に分かれており、着柄部分を示している可能性がある。両側縁は端部が角張る形状で、横断面形はレンズ状である。

38：基端部を残存する基部片で、斧身の長軸と垂直方向に折損する。平面形は基部がやや窄まり円基である。横断面は厚手の楕円形である。折損面は平坦で、二次的な転用がなされた可能性がある。

39：基端部を残存する基部片で、裏面の破損は基端部近くにまで及ぶ。平面形は基部がやや窄まり平基である。基端部は平坦面が形成されている。両側縁は端部が角張って横断面形はレンズ状である。

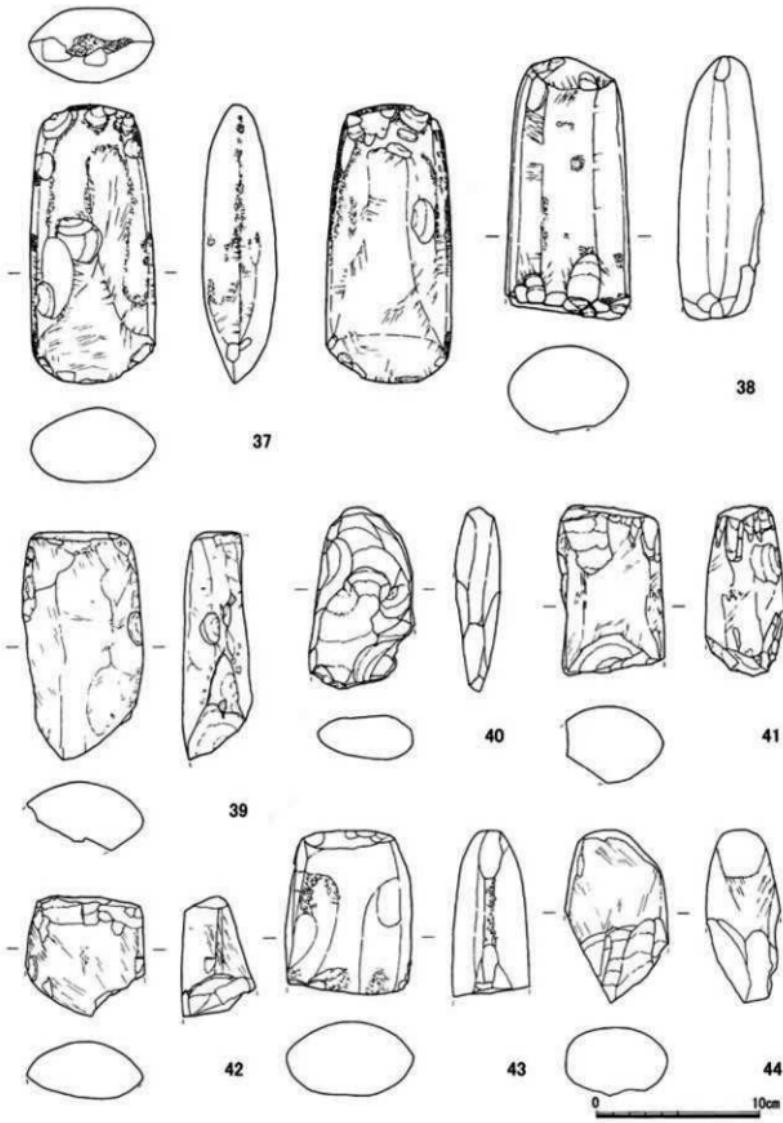
40：小型の基部片で、刃部側は両面とも大きな剥離が及んでいる。平面形は基部が窄まり円基である。全体的に身薄で、横断面は扁平な楕円形である。石材は細粒砂岩である。

41：基端部近くから胴部にかけての破片である。上下端とも斧身の長軸と垂直方向に折損し、折損面は平坦である。破損は複数回によるものとみられる。両側縁は端部が角張る。

42：基端部を残存する基部片で、刃部側の破損は中央部が突出した三角形状である。平面形は基端がやや窄まり平基である。研磨は全体的に丁寧であるが、基端部には敲打痕が残存する。両側縁は研磨によって面取りがなされ、端部が角張って横断面形はレンズ状である。

43：基端部を残存する基部片で、斧身の長軸と垂直方向に折損する。平面形は両側縁がほぼ平行し平基である。基端部は平坦面が形成されている。両側縁は端部が角張って横断面形はレンズ状である。風化によって研磨痕が消滅し、全体的に粗い敲打痕が認められる。

44：基端部を残存する基部片で、刃部側の破損は中央部が鋭く突出した三角形状である。平面形は基部が窄まり円基である。基端部には敲打痕の集中が認められるが、敲打痕の上からさらに敲打痕が切り合うため、刃部破損後に敲打



第9図 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土両刃石斧①(1/3)

具として転用されたものとみられる。横断面形は扁平な梢円形である。全体的に風化が激しい。

45：縄文時代の乳棒状石斧の形状を呈する完形品である。平面形は基部が窄まり尖基である。縦断面形は偏刃で、刃部は鈍く、刃縁は摩滅している。研磨は刃部を中心に胴部や基端部にも施されるが、両側縁を中心に粗い敲打痕が残存する。体部中央に最大厚がある。石材は蛇紋岩である。

46：小型品で、基端部を僅かに欠損するがほぼ完形である。平面形は基部が窄まり円基である。横断面形は扁平な梢円形である。刃部は丁寧な研磨が施されているが、体部には粗い敲打痕を残している。刃部縦断面は僅かに左右非対称的な偏刃である。石材は細粒砂岩である。

47：小型の完形品である。平面形は基部が窄まり円基である。基端部は丸みを帯びている。刃部砥ぎ直しの繰り返しによって全長が短くなったものとみられる。刃部縦断面は左右対称的な蛤刃状である。刃縁は面上に摩滅しており、擦痕が認められることから磨石として転用されたものとみられる。横断面形は梢円形である。研磨は刃部にのみ施され、体部から基部にかけては敲打痕が残存する。石材は安山岩とみられる。

48：小型の基部片で、裏面は基端部近くまで大きく剥落する。平面形は基部が窄まり円基である。刃部は破損後に両面からの研ぎ直しがなされた跡が認められる。横断面形は扁平な梢円形である。体部は基端部から約1/3の部分で色調がやや異なり、どちらも敲打痕が残存するが、基端部に近い部分はより磨耗しており、体部中央のほうが粗い。表面にのみ認められることから、埋没状況に起因するものと考えられる。研磨は刃部を中心に丁寧に施されている。石材は青白色の細粒砂岩である。

49：小型の基部片で、基端部の片側を欠損する。平面形は基部が窄まり円基である。研磨は丁寧に施されている。横断面形は扁平な梢円形である。石材は砂岩である。

50：刃先を欠損する小型の基部片で、裏面は刃部から基端部近くまで大きく剥落する。平面形は基部が窄まり尖基で、基端部は丸みを帯びている。素材の原礎に直接敲打をおこなったあと仕上げの研磨を施して製作したものとみられる。全体的に研磨が施されるが、側縁部には敲打痕が残存する。形態的には縄文時代の乳棒状石斧に近いがやや不定形的である。横断面形は梢円形である。石材は堆積岩系とみられるが不明である。

51：小型の刃部片である。残存する刃縁は鋭く、刃部平面形は僅かに偏刃で、縦断面形は左右対称的である。横断面形は扁平な梢円形である。体部には敲打痕が残存するが、全体的に風化が激しく、研磨痕は認められない。石材は細粒砂岩である。

第11図は太形蛤刃石斧の破片で、石材は55が黒色細粒砂岩、59が砂岩でそれ以外は全て玄武岩である。

52：基端部を残存する基部片で、平面形は基部が窄まり円基である。斧身の長軸と垂直方向に折損するが、折損面は抉れた形状である。両面とも体部中央付近に浅く凹んだ痕跡が認められるが、二次的な加工痕の可能性がある。全体的に激しい風化のため研磨痕が認められず、敲打痕が多く残存する。

53：基端部の一部を残存する基部片である。刃部側は斧身の長軸と垂直方向に折損する。平面形は基部がやや窄まり平基である。横断面形は厚手の梢円形である。

54：基端部を残存する基部片である。刃部側は斧身の長軸に垂直方向に折損するが、表面の一部が突出して残存する。平面形は基部がやや窄まり平基である。両側縁は端部が角張って横断面形はレンズ状である。

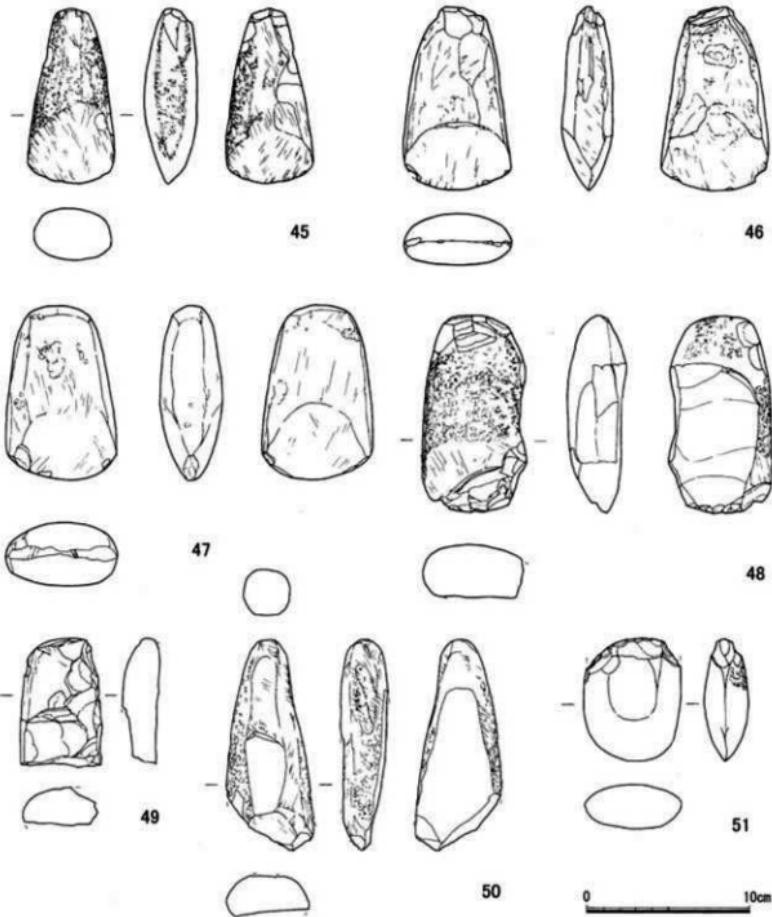
55：小型の基端部の小片である。平面形は基部が窄まり平基である。研磨は一部施されているが表面は粗い敲打痕を多く残している。剥離面より上方方向からの加熱によって剥落したものとみられる。石材は黒色細粒砂岩である。

56：小型の基部片である。両面とも複数方向からの剥離によって大きく破損しており、原形をとどめていない。全体的に風化が激しい。

57：上下方向不明の胴部片である。平面形は両側縁が平行する。両側縁は端部が角張って横断面形はレンズ状である。裏面は欠損し、基部側・刃部側とともに各方向から剥落している。

58：刃先近くの胴部片である。両側縁は端部が角張る形状である。研磨は全体的に丁寧に施されているが、表面の一部には敲打痕が残存する。

59：刃縁を残存する刃部片である。平面形は両側縁が平行し、横断面形は扁平な梢円形である。刃部平面形は偏刃で、



第10図 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土両刃石斧②(1/3)

刃部縦断面形は左右対称的である。研磨は全体的に丁寧に施されており、刃部側縁には研磨による面取り整形がなされている。横断面形は扁平な楕円形である。両側縁と表面に敲打痕が認められるが、表面の中央部分には特に敲打痕が集中することから、この部分は敲打工具としての転用によるものとみられる。石材は砂岩である。

60：刃縁を残存する刃部片で、斧身の長軸と垂直方向に折損する。破損面の剥離痕より、上方から打撃によって折損したものとみられる。刃部縦断面形は左右対称的である。刃部側縁から刃縁にかけて角張る鋭利な形状である。

61：刃縁を残存する刃部片で、基部側は斧身の長軸に対して斜方向に折損する。刃部平面形は僅かに偏刃である。研磨は全体的に丁寧に施されているが、片方の側縁部には敲打痕が残存し、もう片方の側縁は研磨による面取り整形が

なされている。

62：刃縁を残存する刃部片で、基部側は斧身の長軸と垂直方向に折損する。折損面は平坦である。刃縁は微細な剥離の連続によって潰れている。

63：刃縁の一部を残存する刃部片で、基部側は斧身の長軸と垂直方向に欠損し、破損面は平坦である。残存する刃縁は摩滅している。刃面は両面とも丁寧に研磨が施されているが、脇部には敲打痕が多く残存する。両側縁は端部が角張って横断面形はレンズ状である。折損の順序としては、まず刃先の方向から真っ直ぐな力が斧身に加わり、振り下ろす力とぶつかる面で折損し、その後に刃先の部分が折れたと考えられる。

第12図は太形蛤刃石斧の小破片およびそれを再加工して転用したスクレイパーである。石材は66が細粒砂岩、65が砂岩系でそれ以外の4点は玄武岩である。

64：刃縁の一部を残存する刃部片で、使用によって剥落した刃先である。刃部には丁寧な研磨が施されているが、体部には粗い敲打痕が残存する。刃縁は摩滅している。

65：刃先部分の小破片で、両側縁と刃縁を残存する。表裏面の破損は別のものとみられる。

66：刃先部分の小破片で、刃縁の一部を残存する。側縁部には僅かに研磨による面取り整形がなされている。

67：刃縁を残存する刃先の小破片である。刃縁の一部に微細な剥離痕が認められる。

68：刃先近くの小破片で、側縁から刃縁の一部にかけて残存する。破損は複数回の加熱によるものとみられる。

69：剥落した太形蛤刃石斧の体部表面の小破片である。周縁部に二次的な調整剥離が施されていることから、スクレイパーとして転用されたものとみられる。

70：剥落した太形蛤刃石斧の体部表面の小破片である。上端部は破損後に再研磨されており、側縁部には僅かに調整剥離が施されていることから、スクレイパーとして転用されたものとみられる。

## (2) 片刃石斧（第13・14・15・16図）

第13図の石材は、71が層灰岩、72・73・74が黒色泥岩ホルンフェルスである。

71：抉り柱状片刃石斧の完形品である。平面形は抉りの上部が直上し、基端部は丸みを帯びた平基である。刃部はうすい鎌をもつ曲刃で、後主面形は刃先に向かって緩やかに内傾する。横断面形は上端が丸みを帯びたトンネル形である。抉りは研磨によって浅く入れられている。刃幅が体部最大幅よりも狭まることから、側縁部分の研ぎ直しによるものとみられる。刃縁は潰れ、平坦面を形成していることから刃先の研ぎ直し途中とみられる。研磨は全面丁寧に施され、定型的なつくりである。316区の表採品であるが、形態的特徴から前期に属するものとみられる（下條1994）。

72：大型の扁平片刃石斧で、刃部の一部を欠損するがほぼ完形である。前主面には製作時の敲打痕が残存し、後主面は研磨によって平坦に整形されている。横断面形はカマボコ形である。全体的に風化が激しい。

73：柱状片刃石斧の刃部から体部にかけての破片で、基部側を欠損する。刃幅は体部最大幅よりも僅かに狭まる。前主面には敲打痕が残存し、それ以外の部分には丁寧な研磨が施され、定型的なつくりである。

74：刃縁と基部を欠損する柱状片刃石斧の破片で、抉り部の途中で折損する。前主面には敲打痕が残存し、それ以外の部分には丁寧な研磨が施される。抉り部は基端部からの加熱によって破損したものとみられる。

第14図は小型の扁平片刃石斧と柱状片刃石斧である。石材は83が緑色片岩で、それ以外は全て層灰岩である。

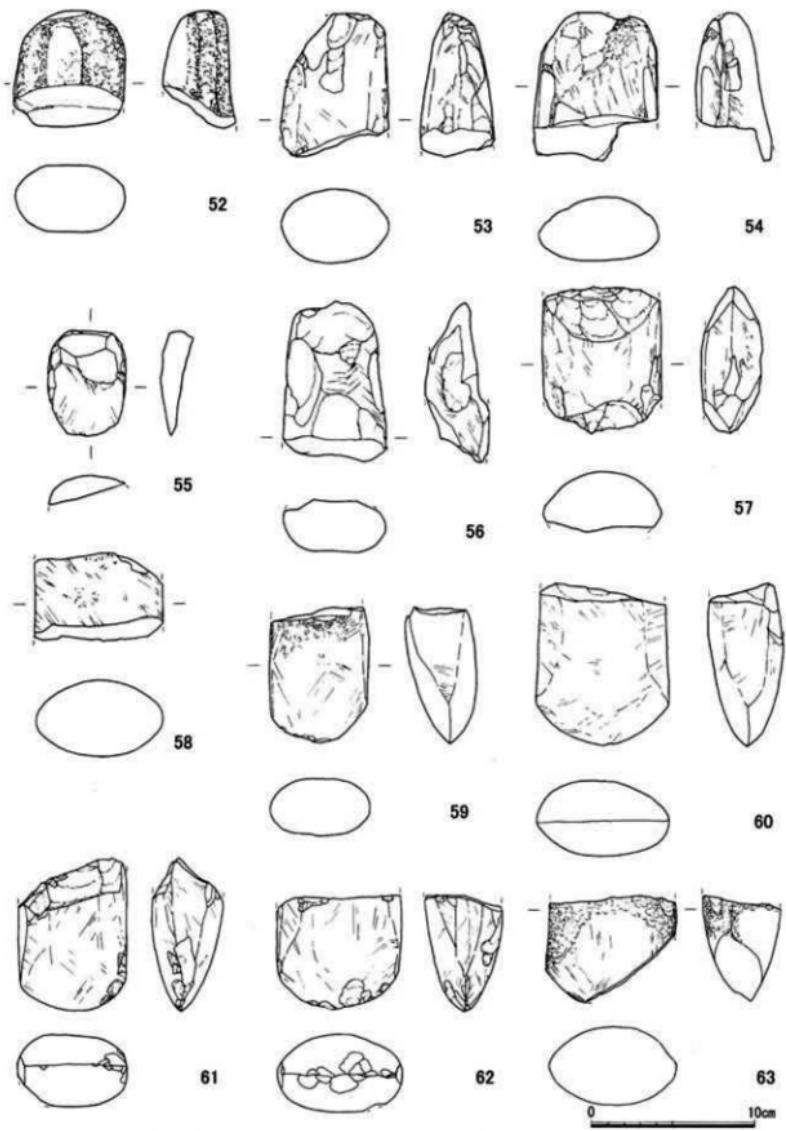
75：基端部を残存する小型の扁平片刃石斧の基部片である。研磨は全体的に丁寧に施されており、基端部と両側面は研磨による面取り整形が施されている。

76：基端部を残存する小型の扁平片刃石斧の基部片である。研磨は全体的に丁寧に施されており、基端部と両側面は研磨による面取り整形が施されている。

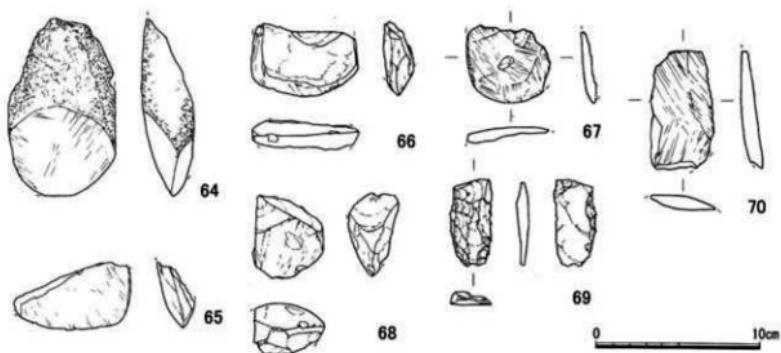
77：小型の扁平片刃石斧の刃部片で、基端部を欠損する。刃部の鎌は不明瞭である。全体的に風化が激しい。

78：小型の扁平片刃石斧の刃部片で、刃縁の一部を残存する。刃部の鎌は不明瞭で、横断面形は後主面が刃先に向かって僅かに内傾し、両刃状である。

79：小型の扁平片刃石斧で、基端部の一部を欠損するがほぼ完形である。基部は破損後に再加工されたものとみられる。刃部の鎌は不明瞭である。刃部横断面形は後主面が僅かに内消するが、素材の形状が反映されたものとみられる。

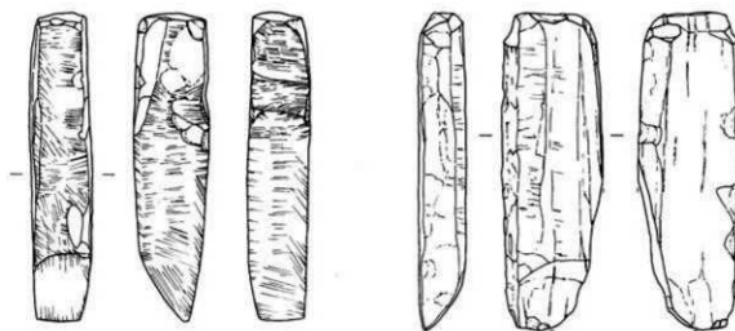


第11図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土両刃石斧③(1/3)

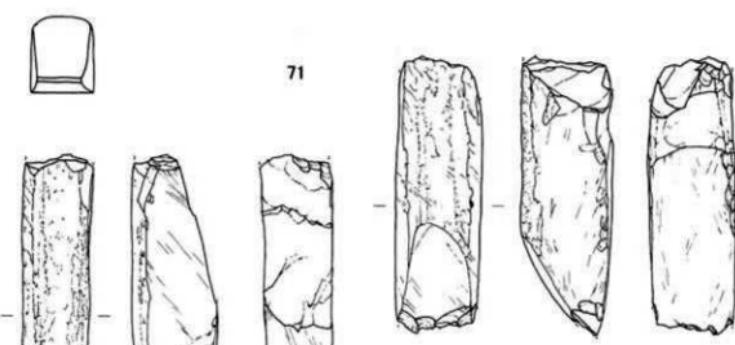


第12図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土両刃石斧④(1/3)

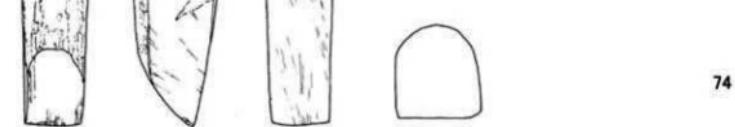
- 80：小型の扁平片刃石斧の刃部片で、左側面と刃縁の一部を残存する。刃部の鏽は不明瞭で、刃部縦断面形は曲線状で、後正面形は直線的である。石材は縱方向の葉理に沿わず斜方向に取られている。
- 81：小型の扁平片刃石斧で、刃縁の一部を欠損するがほぼ完形である。後正面側の表面に縱方向の溝状の凹みがあり、横断面が浅いV字状であることから人為的な擦切痕とみられ、さらに小型のものへの分割が図られたものとみられる。
- 82：小型の扁平片刃石斧の完形品である。平面形は基部が窄まり平基である。刃部は明瞭な鏽を持ち、さらに刃縁近くにもう一段角度を変えて研磨が施され、鏽が形成されている。
- 83：小型の扁平片刃石斧の完形品である。平面形は基部が平基で両側縁が外削し、全体的に丸みを帯びた不整形な形状である。刃部には鏽は認められず、刃縁は面的に潰れている。研磨は全体的に丁寧に施されている。
- 84：小型の扁平片刃石斧で、基端部と前正面を僅かに欠損するがほぼ完形である。刃部幅が基部幅よりも狭まり、基端部側が厚い。刃部は鏽が明瞭で、刃部縦断面形は直線状である。後正面形は刃縁に向かい強く内傾し、刃縁から約0.3cmの部分が新たに研ぎ出され両刃状である。
- 85：小型の扁平片刃石斧で、刃縁から片側縁部にかけて斧身の長軸に沿って約1/3程度折損する。刃部の鏽は明瞭で、さらに刃縁近くにもう一段角度を変えて研磨が施され、鏽が形成されている。
- 86：小型の柱状片刃石斧の完形品である。平面形は基部が窄まり、基端部の両肩が取れて円基状であるが、基端部は研磨によって平坦に整形された平基である。刃部の鏽は明瞭で、さらにもう一段角度を変えて研磨が施され、鏽が形成されている。
- 87：抉入柱状片刃石斧の基部の小破片で、基端部と抉りの一部を残存する。
- 88：小型の柱状片刃石斧の完形品である。基端部には研磨による平坦面が形成され、基部縦断面形は基端部が尖る形状である。刃部は薄い鏽を持ち、縦断面の後正面形は刃縁に向かって僅かに内傾する。横断面は両側縁が脛張るカマボコ形である。
- 89：小型の柱状片刃石斧の完形品である。平面形は基部がやや窄まり平基である。基端部は研磨によって平坦面が形成されている。刃部は不明瞭な鏽を持ち、縦断面の後正面形は刃縁に向かって強く内傾する。
- 90：小型の柱状片刃石斧の完形品である。刃部は薄い鏽を持ち、縦断面の後正面形は刃縁に向かってやや内傾する。横断面形はやや丸みを帯びた長方形状である。
- 91：基端部と抉りの一部を残存する柱状片刃石斧の基部片である。抉り上部は基端に向かって直上して内傾し、基部は尖基である。横断面形は丸みを帯びたトンネル形である。全体的に風化が激しく、研磨痕は不明瞭である。石材は黒色泥岩ホルンフェルスである。
- 92：片側縁を残す柱状片刃石斧の刃部片である。破損は側縁部が斧身の長軸方向に、基部側が長軸と垂直方向に



72



71



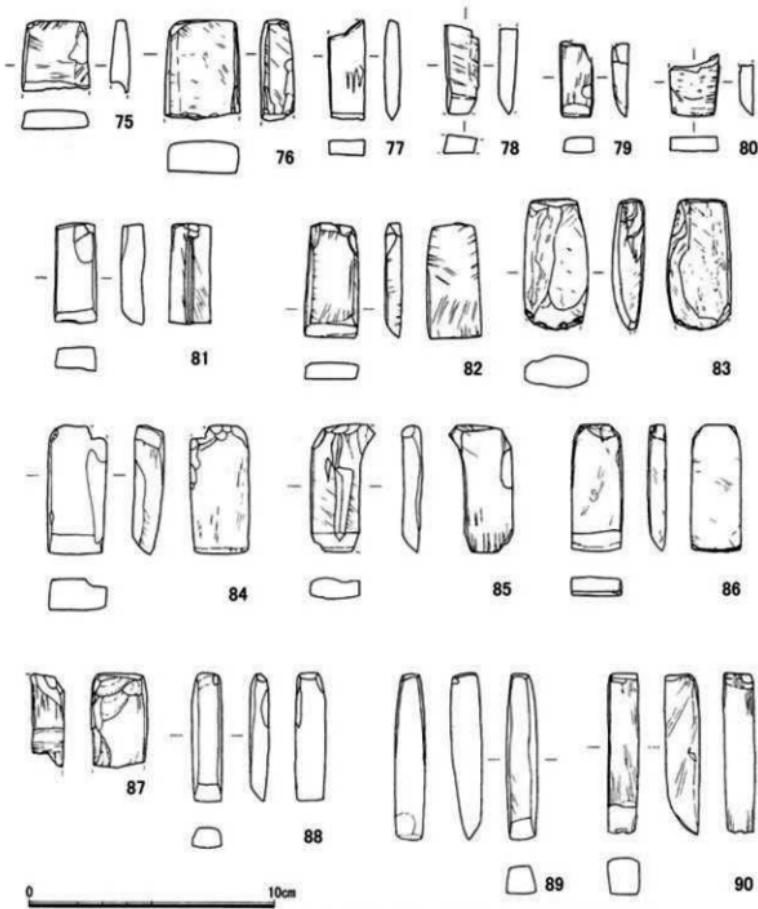
74



0 10cm

73

第13図 田手二本木地区（316・318・346区）出土片刃石斧①(1/2)



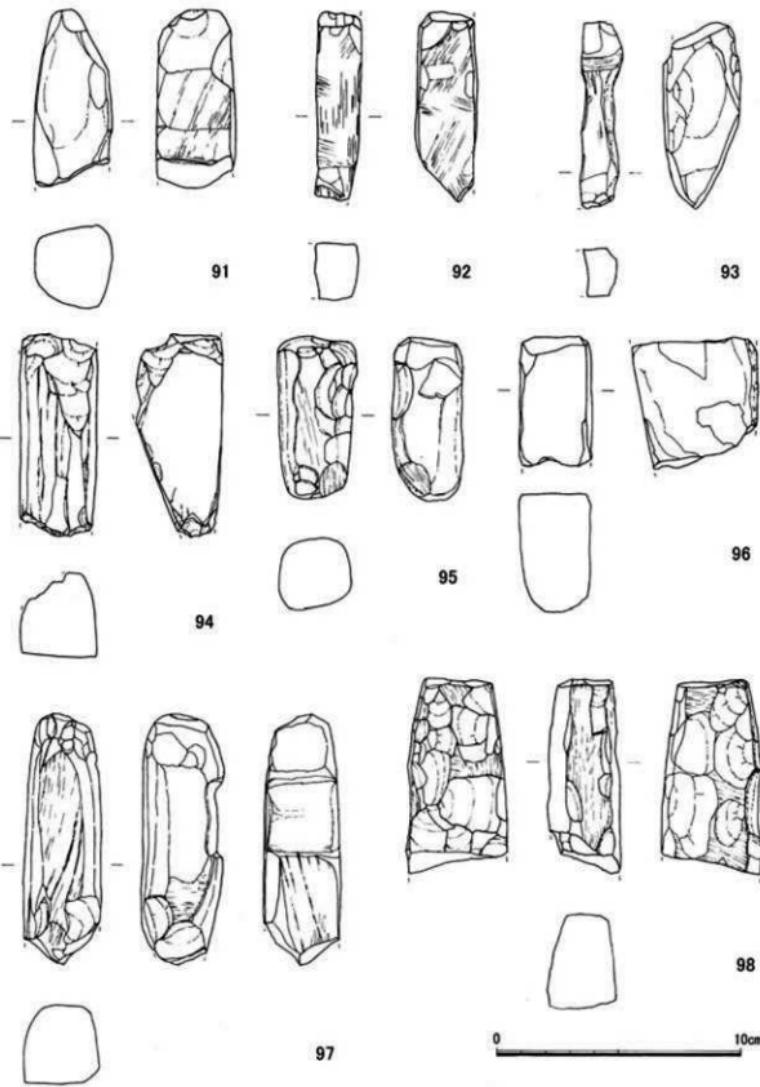
第14図 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土片刃石斧②(1/2)

折損し、さらに刃縁を欠損している。石材は層灰岩である。

93：小型の柱状片刃石斧の刃部片とみられ、抉りの一部が残存する。後主面は研磨が施されており、両側面は剥離によって大きく窪む。刃部は未形成であることから、製作途中か再加工による失敗品の可能性が考えられる。石材は層灰岩である。

94：刃先と基部側を欠損する柱状片刃石斧の刃部片である。破損は基部側が上方向からの加撃によって斧身の長軸と垂直方向に折損しており、刃縁側には複数回の剥落が認められる。石材は黒色泥岩ホルンフェルスである。

95：柱状片刃石斧の基部片とみられるが部位不明で、全体的に丸みを帯びている。表面は一部研磨が施されているものの、剥離痕や自然面を多く残存する。全体的に風化が激しい。製作途中あるいは再加工による失敗品の可能性が考



第15図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土片刃石斧③(1/2)

えられる。石材は黒色泥岩ホルンフェルスである。

96：柱状片刃石斧の刃先近くの破片で、もとは大型品とみられる。両側面を残存しており、基部側と刃部側とも斧身の長軸と垂直方向に折損している。前面には敲打痕が残存している。石材は層灰岩である。

97：刃部を欠損する柱状片刃石斧の基部片である。平面形は基部がやや窄まり円基である。抉りはコの字形に明瞭に施され、抉り上部は基礎部に向かって内傾する。刃部は複数回の剥離によって欠損しているが、破損面の一部に研磨痕が認められることから、破損後の研ぎ直しとみられる。研磨は両正面とも丁寧に施されている。石材は砂岩である。

98：抉りと基礎部を残存する柱状片刃石斧の基部片である。刃部側は斧身の長軸と垂直方向に折損している。抉りは敲打のみによって浅く施されており、抉り上部は内傾して基礎部は平基である。全体的に剥離痕が残存し、その上から粗い研磨が施されている。SJ0828甕棺墓坑内から出土した。石材は層灰岩である。

第16図の7点はいずれも扁平片刃石斧の未製品（再加工途中品）とみられる。石材は101が緑色片岩、103が黒色泥岩ホルンフェルスでそれ以外は層灰岩である。

99：上下端部を欠損する体部片で、両側縁の一部を残存する。縦断面は弓状に湾曲しており、元々の素材の形状が反映されたものとみられる。全体的に風化が激しい。

100：下端部を欠損する体部片である。側面に一部敲打による抉りの痕跡が認められることから、元々は大型の抉入柱状片刃石斧で、その破損品を扁平片刃石斧に転用しようとしたものとみられる。ただし石の葉理は斧身の長軸と直交する横方向であることから、斧としての使用による衝撃への耐久性は弱いと考えられる。体部と両側面は平坦面が形成されており、全体的に定型的であるが、研磨整形によるものではなく素材の自然面とみられる。全体的に風化が激しい。

101：上下端部を欠損する体部片で、両側縁の一部を残存する。体部は平坦面を持ち定型的であるが、研磨によるものではなく素材の自然面とみられる。全体的に風化が激しい。

102：上下端部を欠損する体部片で、両側面は素材の自然面を残存している。上下端に粗い調整剥離が施されている。縦断面は弓状に湾曲した形状であるが、元々の素材の形状が反映されたものとみられる。全体的に風化が激しい。

103：基礎部と両側縁を残存する基部片である。体部は平坦面を持ち定型的であるが、研磨によるものではなく素材の自然面とみられる。全体的に風化が激しく、表面には素材の縱方向の葉理が認められる。縦断面は弓状に湾曲しており、素材の形状が反映されたものとみられる。全体的に風化が激しい。

104：上下端部を欠損し、両側縁の一部を残存する体部片である。表面は複数回の剥離によって大きく剥落しており、裏面は主要剥離面が残存したままである。全体的に風化が激しい。

105：刃部形成途中の未製品とみられる。両側縁と裏面は研磨による面取り整形が施されているが、表の面は粗い剥離後に一部研磨が施されている。全体的に風化が激しい。

#### (4) 石鎌（第17図-106～111）

106：基礎部の破片で、端部は丸みを帯びる形状である。研磨は全体的に丁寧に施されている。石材は凝灰岩である。

107：大型品の基部片である。背部は研磨によって平坦に整形され、下端部にも研磨による刃部形成の痕跡がみられる。表面には自然面が残存している。石材は凝灰質砂岩である。

108：刃先に近い部分の刃部片で、刃部は両刃で直線的である。全体的な風化のため両面とも大きく剥落する。石材は凝灰質粘板岩である。

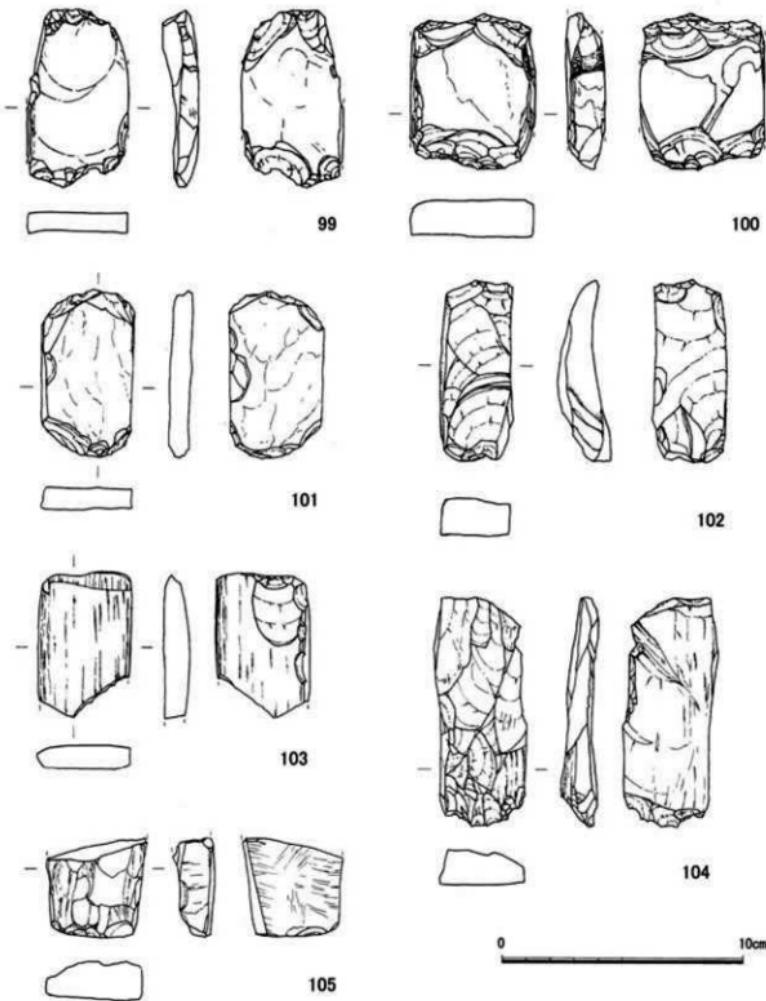
109：刃先を残存する刃部片で、平面形は背部が湾曲し刃部は直線的で、全体的に風化する。石材は凝灰質粘板岩である。

110：刃先を残存する刃部片で、平面形は背部が湾曲し刃部は直線的で、全体的に風化する。石材は黒色泥岩である。

111：刃先を残存する刃部片である。平面形は背部が湾曲し、刃部は手前側が僅かに内湾し、刃先近くで屈曲して直線状である。背部は研磨によって平坦に整形されている。刃部縦断面は手前側が左右対称の両刃、刃先近くが偏両刃である。全体的に風化している。石材は凝灰岩ホルンフェルスである。

#### (5) 紡錘車（第17図-112～116）

112～116の石材は全て片岩である。



第16図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土片刃石斧④未製品（1/2）

112：全体的に厚手の完形品である。孔は両面からの回転穿孔である。端部は丸みを帯びており、側縁部は研磨による面取り整形が施されている。研磨は全体的に丁寧に施されている。

113：全体的に薄手の完形品である。孔は両面からの回転穿孔による。表面は端から約0.5cm付近に周囲をめぐる稜を持ち、稜と端部の間は研磨痕が周囲をめぐる方向に認められる。研磨は全体的に丁寧に施され、側縁部は僅かに研磨

面取り整形が施されている。

114：全体の約1/4を残存する。孔は両側からの回転穿孔による。研磨は全体的に丁寧に施されている。

115：全体の約1/4を残存する。風化のため表面の一部を剥落するが、研磨痕は明瞭に観察される。

116：全体の約1/2を残存する。側縁部には明確な面取り整形は施されていない。孔は両面からの回転穿孔である。

(6) その他（第17図-117～121）

117：用途不明の小型の板状素材である。平面形は二等辺三角形状で、片方に擦切痕が認められ、もう片方は両面からの整形によって刃縁状を呈している。磨製石鏡の未製品とみられる。石材は堆積岩とみられるが不明である。

118：用途不明の石製品である。平面形は両側縁が削り、全体的に丸みを帯びた形状である。研磨は全体的に丁寧に施されており、上下端部には平坦面が形成されている。上端部近くに穿孔があり、両側からの回転穿孔である。なお、遺構出土の土器は須玖I式であるが、当該期に属するものであるかどうかは不明である。石材は黄白色であるが不明である。

119：扁平身薄な板状をなし、自然面と剥離面を有することから石器素材と考えられるが、表面の中央部分に穿孔途中とみられる痕跡が不明瞭ながらも認められることから、紡錘車の未製品の可能性もある。石材は緑色片岩である。

120：扁平身薄な板状であることから石器素材とみられる。石材は凝灰質粘板岩ホルンフェルスである。

121：大型で扁平身薄な板状である。表面は自然面を残している。上端部に平坦面を持ち、平面形は左方向に窄まる形状であることから石鏡の未製品である可能性もあるが、下端部には刃部らしき痕跡は認められず、また通常の石鏡に比べて明らかに大型であることから、石器素材と考えられる。石材は凝灰質砂岩である。

(7) 磨石・敲石（第18図）

石材はいずれも火成岩系とみられる。

122：円礫を素材とした敲石の完形品である。両面とも中央部分に敲打痕が集中しており、側縁部にもそれぞれ敲打痕が認められる。被熱によるものとみられる煤が両面に付着している。

123：楕円形の礫を素材とした磨石で、下端部を欠損している。使用面は表裏両面とも平坦で、不定方向の擦痕が認められる。

124：片面の一部のみを残す磨石の破片である。使用面は平坦で、不定方向の擦痕が認められる。

125：円礫素材の磨り敲き石の片側縁部の破片である。残存する表裏両面とも不定方向の擦痕が認められ、側縁部には広く面的な敲打痕が認められる。磨石と敲石の両方として使用されたものとみられる。SH2437床面から出土した。

126：円礫を素材とする完形品である。中央部に敲打痕と擦痕がともに認められることから、磨石と敲石の両方として使用されたとみられる。裏面中央部分の底面は元々の素材の形状とみられる。

127：円礫を素材とする磨石の片側縁部の破片である。残存する表裏両面に擦痕が認められることから、両面とも磨石として使用していたと見られる。石材は安山岩とみられる。

128：楕円形の自然礫を素材とした小型の敲打具で、下端部を欠損する。先端部に二つの面的な敲打痕の集中部分が認められることから、敲打具としての使用部分とみられる。また、下端部の欠損部分付近にも敲打痕が認められる。

(8) 石錐（穿孔具）（第19図）

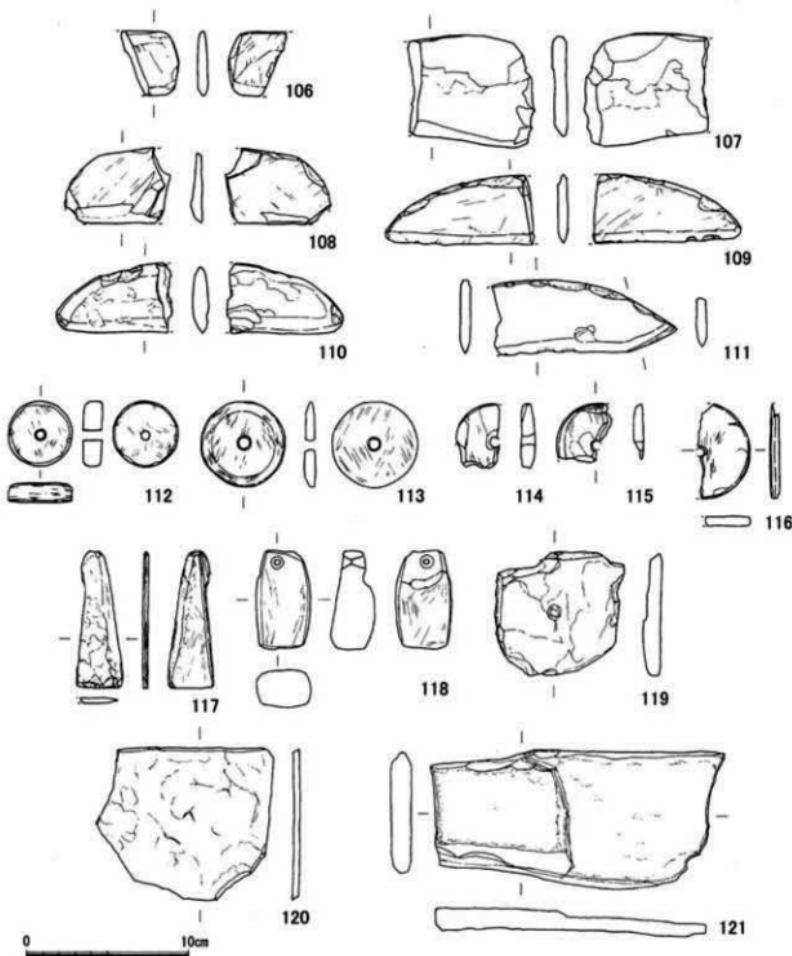
第19図は打製・磨製の石錐で、石庵丁・紡錘車・石戈などの穿孔に用いられたと考えられる。これらはいわゆる大陸系磨製石器類ではないが、それに付随する石器としてここで扱う。石材は、打製の6点（129～134）のうち129が黒曜石でそれ以外はサヌカイト、磨製の2点は135が花崗質砂岩、136が砂岩である。

129：小型品で、先端部を残すし上端部は欠損する。全体的に丁寧な調整剥離が施されており、平面形は両側辺が緩やかに膨らむ形状である。

130：先端部と上端部とともに欠損する。調整剥離は粗く、全体的に風化が激しい。SH2437床面から出土した。

131：先端部を僅かに欠損する。上端部には平坦な自然面が残存する。錐部分は調整剥離によって細長く整形されており、横断面は菱形である。

132：基端部の片側を欠損し、上端部の一部に自然面を残す。錐部分は調整剥離によって細長く整形されており、

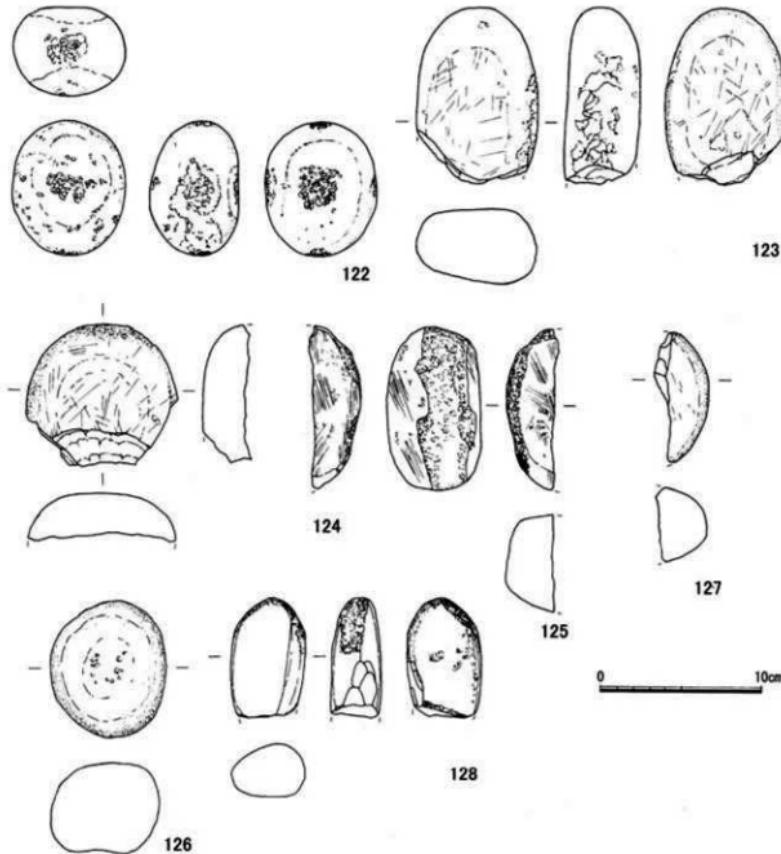


第17図 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土石鎌・紡錘車・その他(1/3)

横断面は菱形である。石材はサスカイトとみられるが、風化の違いによるものか表面の色調が他とやや異なる。

133：大型の剥片を素材としている。先端部を僅かに欠損する。全体的に不整形的で、表面には粗い調整剥離が施されているが、裏面および側面には未加工の自然面が残存する。

134：全体的に厚手の剥片を素材としている。先端部を僅かに欠損するが、周辺部には回転使用による摩滅痕が面上に認められる。上端部には平坦な自然面が残存する。



第18図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土磨石・敲石（1/3）

135：小型の円柱状で、研磨によって全体的に面的な整形が施されている。下端部が僅かに窄まり、横断面が正円形であることから磨製穿孔具とみられる。一部砥石として転用された可能性もある。

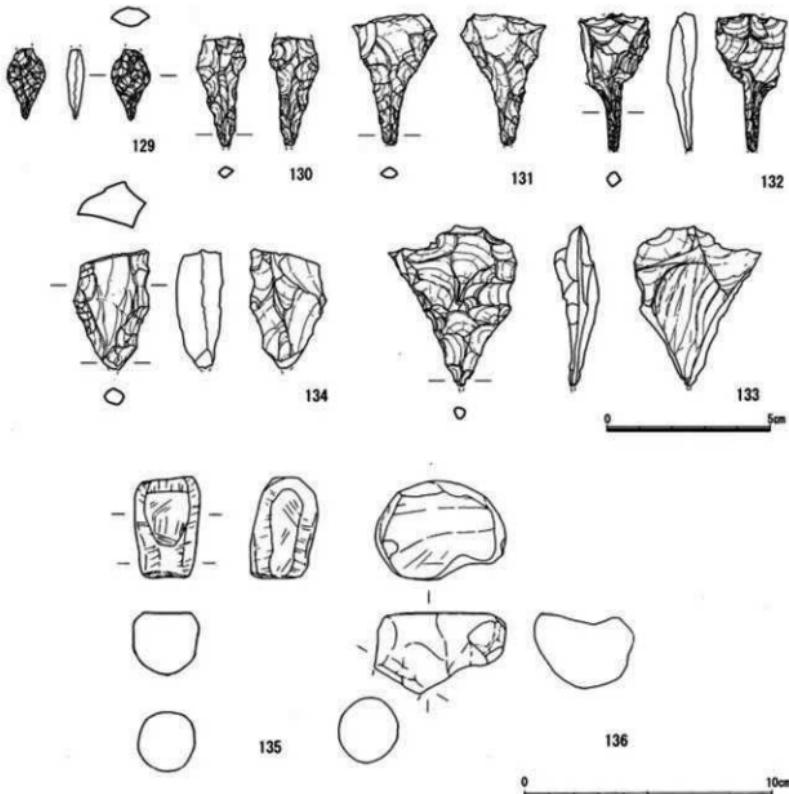
136：左下を向く先端部を欠損するが、欠損部分が窄まり、横断面が正円形であることから磨製穿孔具とみられる。上端部の平坦面は砥石として転用されたものとみられる。

(9) 砥石（第20・21図）

砥石の観察においては、定形砥石と不定形砥石の区別は砥面と底面とが明瞭な角を持つか否かを基準とした。また、砥面の使用痕の分類は村田裕一氏の基準に依拠している（村田2002）。石材は、139が凝灰岩、それ以外は砂岩である。

137：極小型の定形砥石で、下端部を欠損する。砥面は下端部以外の5面が使用されている。仕上げ砥。

138：柱状の多面砥石で、上端部を欠損する。砥面は4面が使用されている。全体的に風化が激しい。中砥。



第19図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土石錐（打製2/3・磨製1/2）

- 139：細長い柱状の定形砥石で、下端部を欠損する。砥面は4面が使用されている。石材は凝灰岩とみられる。仕上げ砥。
- 140：小型で直方体状の定形砥石の完形品である。表裏面には縱方向に複数の溝状痕が認められる。砥面は6面全てが使用されている。使用痕はClコが認められる。中砥。
- 141：小型の定形砥石で、表裏面と側面を残存する。砥面は5面が使用されている。使用痕はD(RD)が認められる。中砥。
- 142：小型の定形砥石で、下端部を欠損する。一部に溝状痕が認められる。砥面は6面が使用されている。中砥。
- 143：小型の定形砥石の角部分の破片である。砥面は6面が使用されている。中砥。
- 144：直方体状の小型の定形砥石である。砥面は3面が使用されている。粗砥。
- 145：小型の定形砥石で、完形品とみられる。砥面は2面が使用されている。粗砥。
- 146：上下端を欠損し、全体的に身薄な定形砥石である。砥面は3面が使用されている。粗砥。
- 147：平面形は不整形的な定形砥石である。全体で5面が使用されている。使用痕はRCが認められる。仕上げ砥。
- 148：円錐を素材とした不定形砥石で、中央部分で接合する完形品である。表面左側の面に縱方向の溝状痕が認めら

れる。全体的に風化が激しい。使用痕は深く明瞭なDが認められる。粗砥。

149：定形砥石の破片である。砥面は3面が使用されている。仕上げ砥。

150：柱状の定形砥石の端部片で、表面は使用により浅く窪んでいる。砥面は4面が使用されている。粗砥。

151：大型柱状定形砥石の端部片である。砥面は3面が使用されている。粗砥。

152：長方形の定形砥石である。砥面は5面が使用されている。使用痕はRCluが認められる。仕上げ砥。

153：長方形の定形砥石で下端部を欠損する。砥面は4面が使用されている。粗砥。

154：長方形の定形砥石で、端部を僅かに欠損するがほぼ完形である。砥面は使用によって全て浅く窪んでおり、6面全てが使用されている。使用痕は左側面にC2uが認められる。粗砥。

155：柱状の定形砥石で下端部を欠損する。砥面は4面が使用されている。粗砥。

156：大型で身薄の定形砥石の端部の破片である。中央は使用によって広く浅く窪んでいる。砥面は5面が使用されている。使用痕はDとE2Lが認められる。中砥。

157：平面形は三角形状の定形砥石の完形品である。砥面は使用によって浅く窪んでおり、上端部以外の5面が使用されている。使用痕はEluが認められる。粗砥。

158：大型で身薄な石皿状の置砥である。上端部と左下端部を欠損している。表面は使用によって広く窪んでいる。使用痕はGが縦方向に認められる。砥面は5面が使用されている。仕上げ砥。

159：定形砥石の破片である。全体的に湾曲した形状であるが、素材の形状が反映されたものとみられる。砥面は3面が使用されている。粗砥。

160：定形砥石の角部分の破片である。砥面は4面が使用されている。中砥。

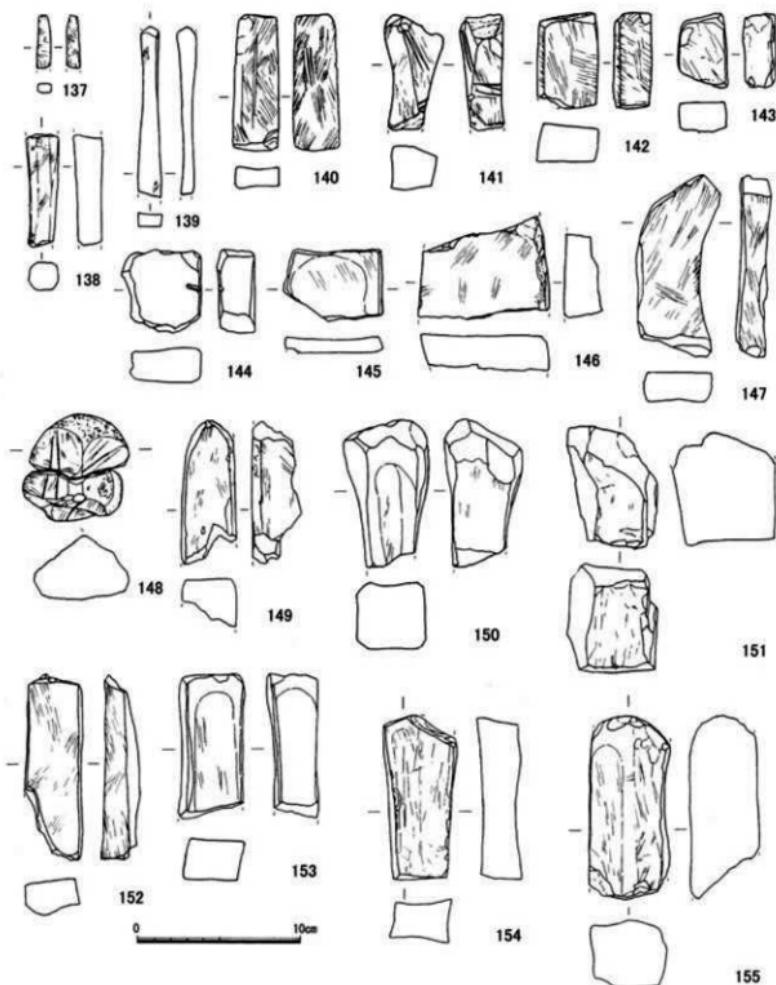
161：平面形は円柱状で先端部が鋭く尖る形状である。表裏面の中央にみられる破損は擦切によって折損したものである可能性がある。尖端部分には使用痕は認められないが、下端部は面的な磨耗によって丸みを帯びていることから、磨石としても使用された可能性がある。中砥。

162：不定形砥石の端部片である。砥面は2面が使用されている。全体的に風化が激しい。粗砥。

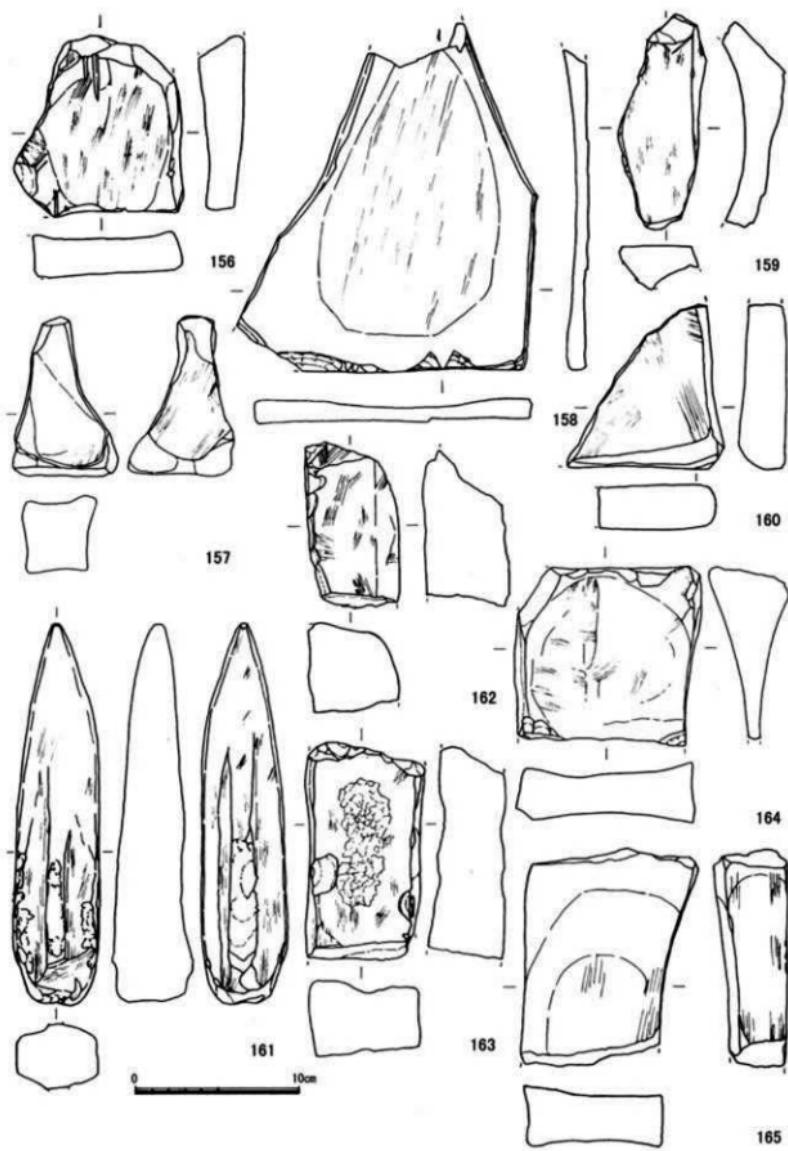
163：長方形の定形砥石で上下端を欠損している。表の面の二箇所に敲打痕の集中による窪みがあり、その中央に鉄滓？とみられる付着物が認められる。また、側面部にも同様の痕跡が認められる。この石器が鐵器製作における台石として使用されたかどうかは不明であるが、砥石以外に台石としても使用されたものとみられる。中砥。

164：大型定形砥石の端部片で、下端部にかけて身薄になり折損している。表裏面とも使用によって深く窪んでいる。砥面は4面が使用されている。使用痕はRA2が上から下方向へ認められる。中砥。

165：大型定形砥石の端部片で、下端部を欠損する。表面は使用によって浅く窪んでおり、砥面は4面が使用されている。使用痕はEluが認められる。中砥。



第20図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土砥石①（1/3）



第21図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土磁石②（1/3）

## 第2節 剥片石器

以下では剥片石器類として、スクレイバーと打製石器について報告をおこなう。なお、スクレイバーの器種認定基準については、前回の報告（細川・梅崎編2005）と同様、「剥片の縁辺部にその長さの1/2以上におよぶ連続的な二次加工を施して刃部を作り出した剥片石器」と定義している。

### (1) スクレイバー（第22・23図）

第22図の石材は、166～169が黒曜石、170～173がサヌカイトである。

166：小型の縦長剥片を素材とし、打面は櫛打面である。背面・腹面ともそれぞれ右側縁に片面側から二次加工が施され、刃部を形成している。上下端部には自然面を残存する。

167：小型の縦長剥片を素材とし、打面は平坦打面である。背面左下側縁と右上側縁に二次加工が施され、刃部を形成している。背面と末端部の一部に自然面を残存する。

168：横長剥片を素材とする。背面はほぼ未加工で、腹面左側縁のノッチ状の加工は腹面側から施されている。腹面左側縁と右上側縁に二次加工が施され、刃部を形成している。

169：縦長剥片を素材とし、打面は線打面である。打面以外の周縁部に両面から二次加工が施され、背面左側縁から末端部にかけて刃部を形成している。

170：大型の縦長剥片を素材とし、打面は櫛打面である。背面は自然面が広く残存し、末端部と右側辺部に二次加工が施されている。腹面は左側辺の一部に二次加工が施されている。

171：縦長剥片を素材とする。背面の右側辺部は欠損したものとみられる。末端部に両面から二次加工が施されている。背面には自然面が広く残存する。

172：厚手の横長剥片を素材とする。左側辺から末端辺にかけて二次加工が施されている。背面の右下端部の一部に自然面を残存する。

173：大型で厚手の縦長剥片を素材とし、打面は櫛打面である。両側辺を中心に二次加工が施されており、背面右側辺は腹面側から、背面左側辺は両面から施されている。背面は厚みが不均一で、上端部は平坦な自然面を残存する。

第23図の9点は全て316区SH2437から出土した。石材は、174・176が黒曜石、175・177～182はサヌカイトである。

174：小型の横長剥片を素材とする。腹面の剥離は浅く、自然面を多く残存する。背面右側辺に背面側から二次加工が施され、刃部を形成している。床面から出土した。

175：小型の縦長剥片を素材とし、打面は櫛打面である。背面右側辺に背面側から二次加工が施されており、背面左側辺および腹面は未加工である。背面から末端部にかけて自然面を多く残存する。

176：小型の残核を素材とする。実測図左の右側辺に両面から二次加工が施され、刃部を形成している。上下端部は未加工で、背面左側辺には自然面を多く残存する。

177：縦長剥片を素材とし、打面は櫛打面である。上端部と腹面右下に平坦な自然面を残存し、腹面右上と左下部分に背面側から二次加工を施して刃部を形成している。

178：横長剥片を素材とする。末端部に両面から二次加工を施して刃部を形成している。床面から出土した。

179：横長剥片を素材とする。末端部に両面から二次加工を施して直線的な刃部を形成している。上端部と両側縁部は未加工で、実測図左の右側縁部分は欠損しているものとみられる。

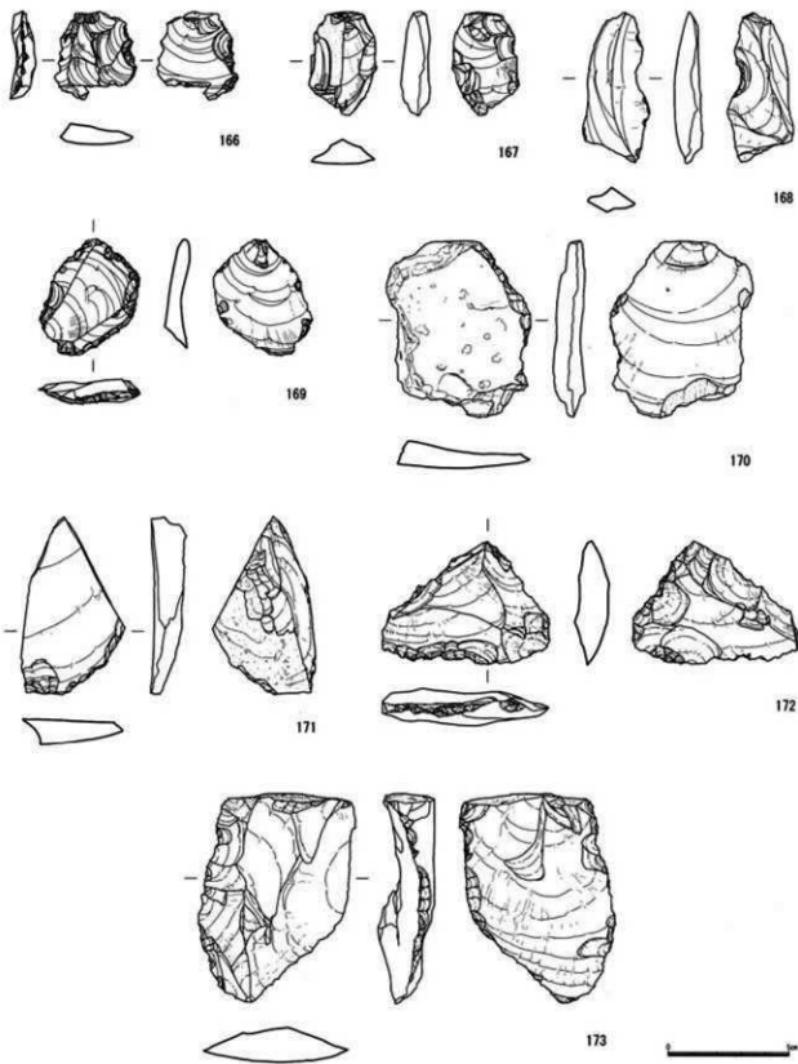
180：縦長剥片を素材とする。両面とも上方から剥離面を大きく残しておらず、左右対称的な形状である。末端部から実測図右の右側縁にかけて両面から二次加工が施され、半円状の刃部を形成している。

181：長幅比約1対1の剥片を素材とする。実測図左の左上部分には石匙のようなツマミ状に突出した整形加工が施されており、端部には自然面が残存する。また、末端部には平坦な自然面が残存する。

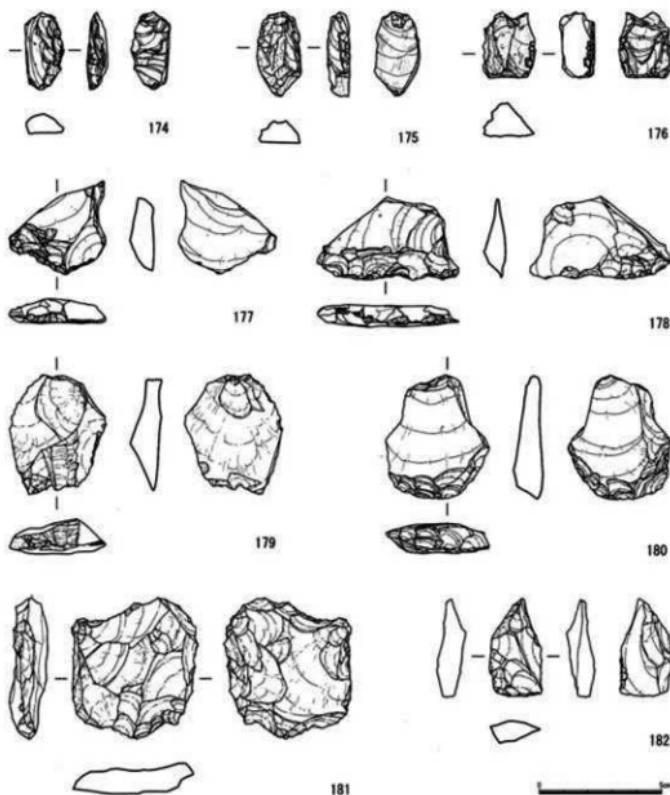
182：小型の横長剥片を素材とする。背面の左側辺は両面から、末端部は背面側のみから二次加工が施され、刃部を形成している。背面左上には平坦な自然面が残存する。床面から出土した。

### (2) 打製石器（第24・25・26・27図）

石材は183～191・193・194・196、198～205がサヌカイト、192・195・197が黒曜石である。

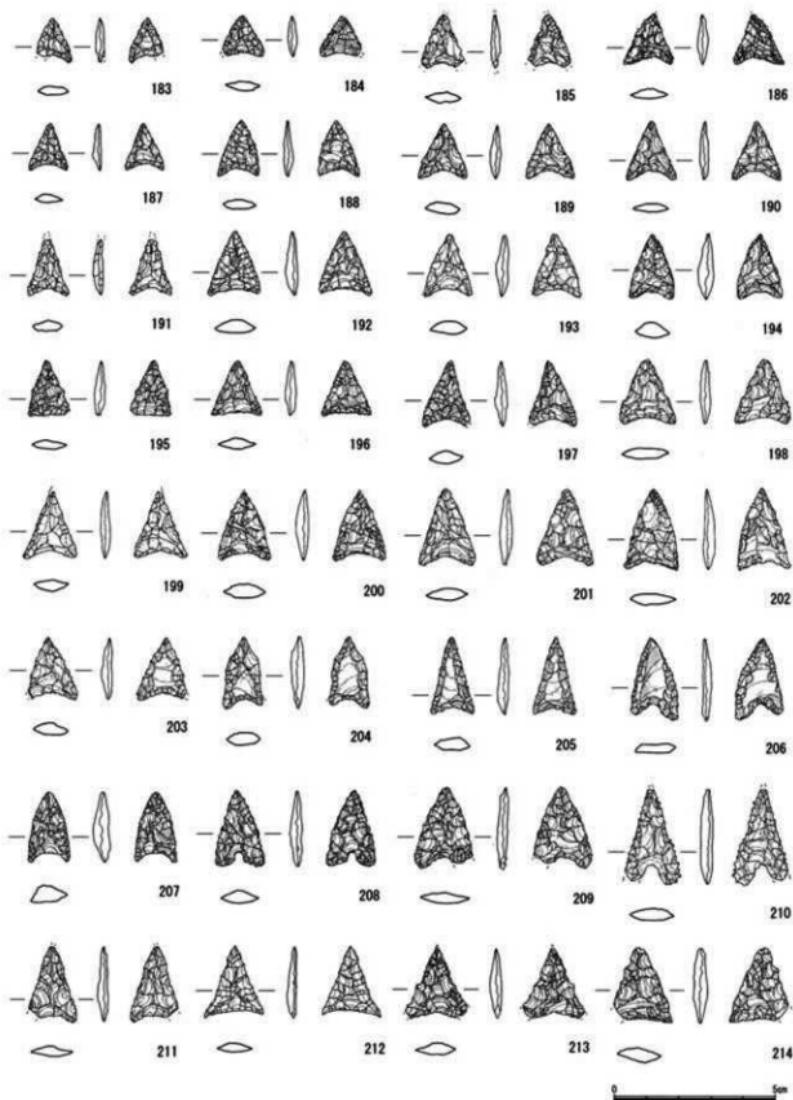


第22図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土スクレイバー（1/2）

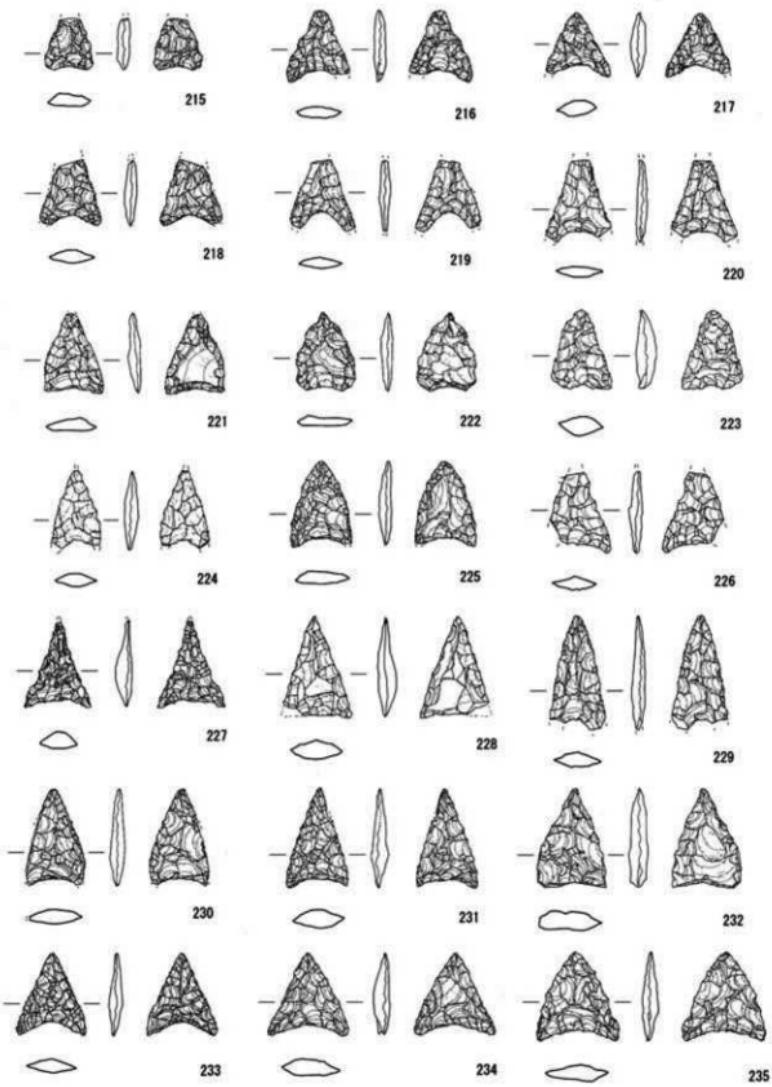


第23図 田手二本黒木地区SH2437出土スクレイバー (1/2)

- 183：小型の無茎凹基式で片脚端部を欠損する。抉りは比較的深い。
- 184：小型の無茎凹基式で片脚端部を僅かに欠損する。抉りは浅く、平面形は丸みを帯びた正三角形状である。
- 185：無茎凹基式で先端部と両脚端部を欠損する。抉りは比較的浅い。
- 186：無茎凹基式で先端部を欠損する。抉りは比較的浅い。
- 187：無茎凹基式で、片側辺の一部を僅かに欠損するがほぼ完形である。抉りは広く比較的浅い。
- 188：無茎凹基式の完形品で抉りは広く浅い。刃部両側辺は緩やかに膨らみ左右非対称的である。
- 189：無茎凹基式の完形品で、抉りは比較的浅い。
- 190：無茎凹基式の完形品で、抉りは比較的深い。先端部は僅かに丸みを帯びている。
- 191：無茎凹基式で先端部を僅かに欠損する。抉りは比較的浅い。
- 192：無茎凹基式の完形品で抉りは広く浅い。刃部両側辺は直線的である。



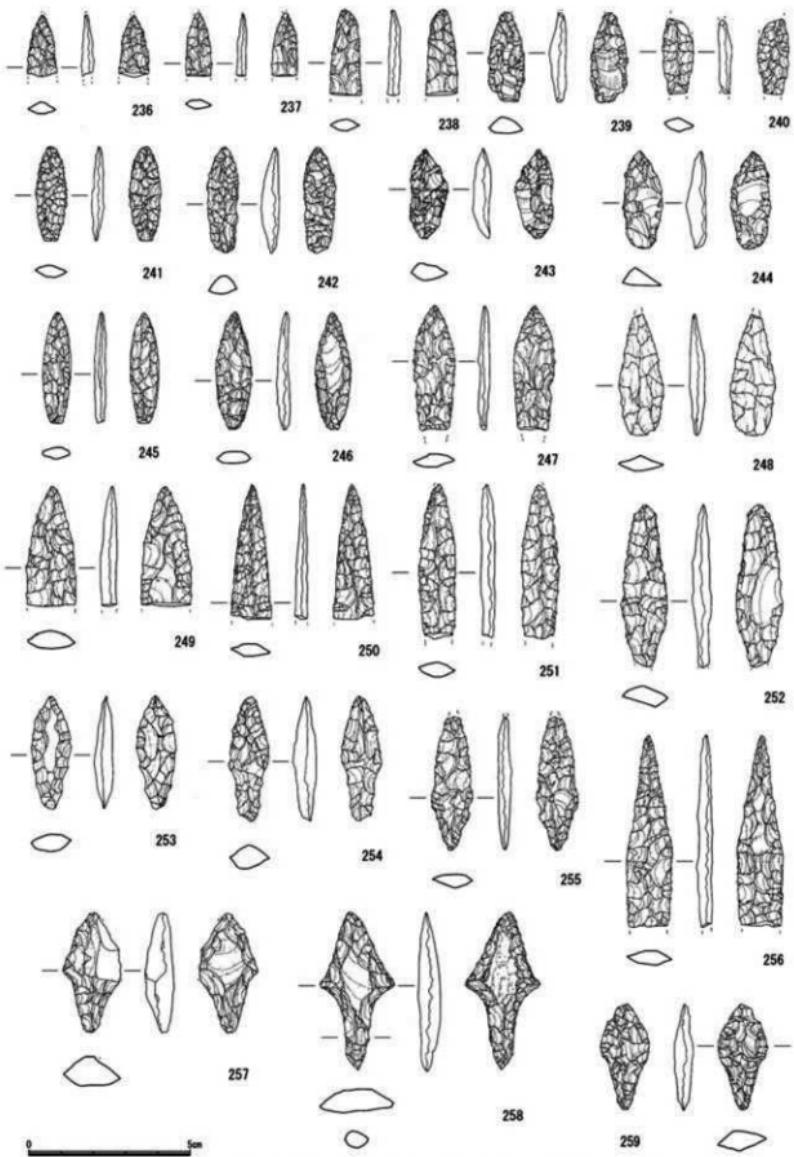
第24図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土打製石器①（2/3）



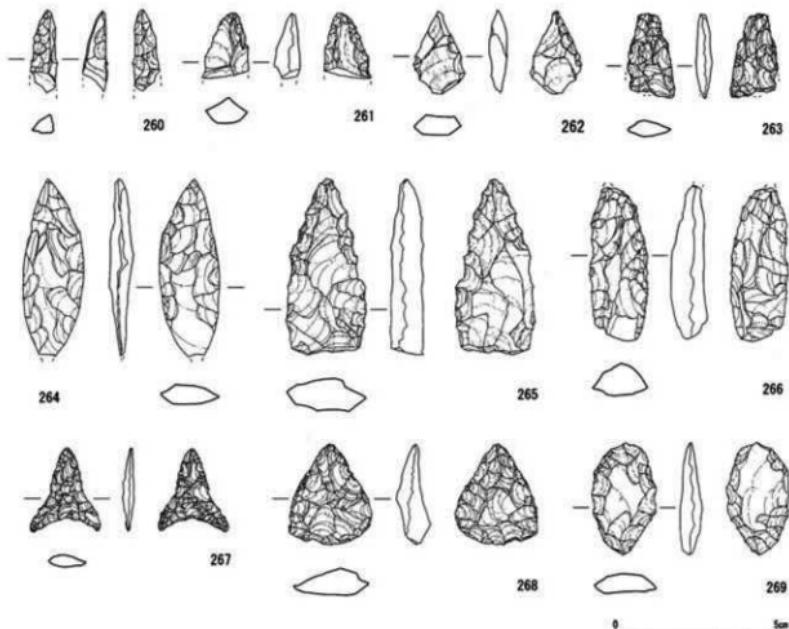
第25図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土打製石錐②（2/3）

0 5mm

- 193 : 無茎凹基式の完形品で抉りは比較的浅い。刃部両側辺は僅かに左右非対称的である。
- 194 : 無茎凹基式の完形品で、抉りは比較的浅い。基部側が厚手である。
- 195 : 無茎平基式で片脚端部を僅かに欠損する。平面形は二等辺三角形状である。
- 196 : 無茎凹基式の完形品で、抉りは浅い。両側辺は直線的である。
- 197 : 無茎凹基式で片脚端部を僅かに欠損する。刃部両側辺は左右非対称的である。
- 198 : 無茎凹基式の完形品で抉りは広く浅い。先端部は鈍く、刃部両側辺は僅かに左右非対称的である。
- 199 : 無茎凹基式で先端部を僅かに欠損する。
- 200 : 無茎凹基式の完形品で抉りは広く浅い。刃部両側辺は緩やかに膨らむ形状である。
- 201 : 無茎凹基式の完形品で抉りは比較的浅い。先端部は丸みを帯びている。
- 202 : 無茎凹基式の完形品で抉りは広く浅い。刃部両側辺は緩やかに膨らみ左右非対称的である。
- 203 : 無茎凹基式で片脚端部を僅かに欠損する。抉りは比較的浅い。刃部両側辺は僅かに左右非対称的である。
- 204 : 無茎凹基式で片脚端部を僅かに欠損する。抉りは比較的深い。平面形は刃部両側辺が角張り五角形状である。体部中央には主要剥離痕が残存する。
- 205 : 無茎凹基式の完形品で抉りは比較的浅い。表裏両面とも縁辺部には調整剥離が施されているが、中央部分には主要剥離痕が残存する。
- 石材は206～209、212～215が黒曜石、210・211はサヌカイトである。
- 206 : 無茎凹基式で両脚端部を僅かに欠損する。抉りは比較的深い。表裏面とも体部中央に主要剥離痕が残存している。刃部両側辺は左右非対称的である。
- 207 : 無茎凹基式の完形品で、抉りは広く深い。体部の中央付近が厚手である。
- 208 : 無茎凹基式の完形品で抉りは狭く深い。平面形は全体的に僅かに左右非対称的である。
- 209 : 無茎凹基式で片脚端部を僅かに欠損する。抉りは比較的深い。
- 210 : 無茎凹基式で抉りは深い。先端部と片脚端部を僅かに欠損する。刃部両側辺は直線的で、表裏両面からの調整剥離によって鋸歯状を呈する。
- 211 : 無茎凹基式で先端部と片脚端部を僅かに欠損する。抉りは比較的浅い。刃部両側辺は僅かに左右非対称的である。
- 212 : 無茎凹基式の完形品で抉りは広く浅い。表面の左側辺は僅かに内湾し、両側辺は左右非対称的である。
- 213 : 無茎凹基式で両脚端部を僅かに欠損する。表面の右側辺が僅かに内湾する形状である。
- 214 : 無茎凹基式で抉りは浅く、平面形は正三角形に近い。片脚端部を僅かに欠損する。先端部は丸みを帯びている。
- 215 : 無茎凹基式で先端部を僅かに欠損する。抉りは浅い。石材は肉眼観察によれば佐世保市針尾島産の黒曜石とみられる。
- 石材は216・217が黒曜石、218～221がサヌカイトである。
- 216 : 無茎凹基式で片脚端部を僅かに欠損する。先端部は丸みを帯びており、刃部両側辺は左右非対称的である。
- 217 : 無茎凹基式で片脚端部を僅かに欠損する。長幅比は約1対1で、抉りは広く深い。
- 218 : 無茎凹基式で先端部を欠損する。抉りは比較的深い。
- 219 : 無茎凹基式で先端部と両脚端部を欠損する。抉りは広く深く明瞭に入れられている。
- 220 : 無茎凹基式で抉りは比較的浅い。先端部と両脚端部を僅かに欠損する。
- 221 : 無茎凹基式で先端部を僅かに欠損する。抉りは僅かに入れられている。裏面には主要調整剥離痕が残存している。刃部両側辺は緩やかに膨らみ左右非対称的である。
- 石材は222・223・226・227が黒曜石、224・225がサヌカイトである。
- 222 : 無茎凹基式の完形品で抉りは僅かである。平面形は刃部両側辺が大きく膨らみ不定形的である。
- 223 : 無茎凹基式で抉りは浅く、平面形は三角形に近い。先端部は丸みを帯びている。全体的にやや厚手である。
- 224 : 無茎凹基式で先端部と両脚端部を僅かに欠損する。抉りは比較的深い。
- 225 : 無茎凹基式で片脚端部を僅かに欠損する。抉りは広く浅い。刃部両側辺は緩やかに膨らむ形状である。



第26図 田手二本黒木地区(316・318・346区)出土打製石錐③(2/3)



第27図 田手二本黒木地区（316・318・346区）出土打製石器④（2/3）

226：無茎凹基式で先端部と片脚部を欠損する。抉りは広く浅い。

227：無茎凹基式で先端部を僅かに欠損するがほぼ完形である。抉りは広く浅い。体部中央付近が最も厚くなる。刃部両側邊は僅かに内済する形状である。

石材は228～232、234～235がサスカイトである。

228：平面形は二等辺三角形を呈し、片脚端部を僅かに欠損する。

229：無茎凹基式で両脚端部を欠損する。抉りは比較的深い。先端部は僅かに丸みを帯びている。

230：無茎凹基式で片脚端部を僅かに欠損するがほぼ完形である。抉りは広く浅い。

231：無茎凹基式の完形品で、抉りは比較的浅い。中央やや下の部分が最も厚くなる。

232：無茎凹基式の完形品で抉りは僅かに入れられている。刃部両側邊は緩やかに膨らむ形狀で左右非対称的である。

233：無茎凹基式の完形品で抉りは比較的深く明瞭である。体部の中央付近が最も厚くなる。石材は黒曜石である。

234：無茎凹基式の完形品である。長幅比は約1対1で、抉りは広く浅い。

235：無茎凹基式で抉りは広く浅い。長幅比は約1対1で、刃部両側邊は緩やかに膨らむ形狀である。

石材は236～238、240～245～258がサスカイト、239・241～244が黒曜石である。

236：基部側と先端部を僅かに欠損する。基部側が厚手である。

237：小型の先端部片で、基部側を身の長軸と垂直方向に欠損する。

238：基部側は身の長軸と垂直方向に欠損する。先端部は丸みを帯びている。

239：先端部と基端部を僅かに欠損する。基部は平基で両側邊は緩やかに膨らむ。裏面には主要剥離痕が残存する。

- 240：凸基式で先端部と基端部を欠損する。刃部両側辺は緩やかに膨らむ形状である。
- 241：無茎凸基式の完形品である。先端部は丸みを帯びている。
- 242：無茎凸基式の完形品とみられる。先端部は丸みを帯びており、刃部両側辺は僅かに左右非対称的である。
- 243：無茎凸基式とみられるが平面形は左右非対称的である。未製品の可能性がある。
- 244：無茎凸基式の完形品である。体部の中央付近が最も厚くなる。
- 245：無茎凸基式の完形品である。刃部両側辺には先端部から約3分の2程度の部分に研磨による面取り整形が施されている。
- 246：無茎凸基式の完形品で、平面形は柳葉形である。
- 247：先端部片で基部を身の長軸と垂直方向に欠損する。刃部両側辺は緩やかに膨らむ形状である。
- 248：無茎凸基式で先端部を僅かに欠損する。
- 249：大型の先端部片で、基部側を身の長軸と垂直方向に欠損する。刃部両側辺は緩やかに膨らむ形状である。
- 250：基部側を身の長軸と垂直方向に欠損する。刃部は長い直線状を呈し、先端部は锐利に整形されている。
- 251：平面形は柳葉形で、基部側と先端部を僅かに欠損する。
- 252：有茎式で茎部を欠損する。先端部はやや丸みを帯びており锐利ではない。刃部両側辺は僅かに左右非対称的である。
- 253：無茎凸基式の完形品である。表面とも周縁部に調整剥離が施されているが、体部中央には自然面が残存している。
- 254：有茎式の完形品で茎部は太い。刃部両側辺は僅かに左右非対称的で、先端部はやや丸みを帯びている。
- 255：有茎式で先端部を僅かに欠損する。刃部両側辺は僅かに膨らむ形状である。
- 256：大型の先端部片で、基部側を身の長軸と垂直方向に欠損する。全体的に長大で、刃部両側辺は角張る形状で、左右は僅かに左右非対称的である。
- 257：有茎式で表面の刃部右側辺を欠損する。全体的に大型・厚手で、先端部は残存するが丸みを帯びている。
- 258：有茎式の完形品で全体的に大型・厚手である。裏面の体部中央付近には自然面が残存する。先端部は残存して丸みを帯びており、刃部両側辺は僅かに内湾した形状である。
- 259：有茎式で先端部を僅かに欠損する。刃部両側辺は緩やかに外湾する。石材は黒曜石である。
- 石材は264・267が黒曜石、それ以外はサヌカイトである。
- 260：基部側を欠損する。全体的に不定形的で、右側辺には一部自然面が残存する。全体的に調整剥離は粗い。未製品か。
- 261：基部側は身の長軸と垂直方向に欠損する。表面は両側辺からの剥離によって中央部が高まり、全体的に厚手である。
- 262：平面形は五角形状で、基部には未加工の自然面が残存する。全体的に調整剥離が粗いことから未製品の可能性がある。
- 263：無茎凹基式で抉りは浅く、先端部と片脚端部を欠損する。
- 264：基端部を僅かに欠損する。先端部と両側縁に研磨痕が面的に認められる。調整剥離は全体的に粗く、両面とも剥離面を大きく残存する。刃部両側辺は左右非対称的である。
- 265：大型・厚手で基部は平基、刃部両側辺は緩やかに膨らむが僅かに左右非対称的である。未製品か。
- 266：全体的に厚手で不定形的な形状を呈し、表面の一部に自然面が残存する。無茎凸基式の未製品か。
- 267：無茎凹基式の完形品で抉りは広く深い。先端部は丸みを帯びており、刃部両側辺は大きく内湾する特異な形状である。
- 268：平面形は全体的に丸みを帯びており、基部側は厚手のままである。未製品か。
- 269：平面形は丸みを帯びており、明確な先端部は作り出されていない。表面とも周縁部に粗い調整剥離が施され、中央部に剥離面が大きく残存する。未製品か。

### 第3節 小結

#### (1) 各器種の特徴

石庵丁は、平面形態は背部が直線的で刃部が外湾する外湾刃半月形が主体であるが、三角形が1点（第7図9）あり、未製品の2点（第8図34・35）は紡錘形である。孔は二孔のものが主体で、一孔のものは僅か3点にとどまり、うち1点は大型品（第7図10）である。穿孔方法は両面から敲打後に回転穿孔を施したもののが主体である。刃部は縦断面形が左右対称的な両刃が主体で、偏刃もみられるが、明確な片刃のものはない。背部横断面は研磨による平坦面を持つものが多い。破損の仕方は孔部分を通じて縦方向に折損しているものが最も多い。

両刃石斧は、石材から今山産玄武岩製とその他の石材製とに二分される。前者はいわゆる太形蛤刃石斧で、平面形が両側平行で基部が平基、横断面形は両側縁が角張るレンズ状のものが多く、北部九州の中間に一般的な形態的特徴を示す。刃部は縦断面形が左右対称的な蛤刃のものが主体で、僅かに偏刃もみられる。後者は多様な石材が用いられており、サイズは玄武岩製に比べて小さい。形態的には基部が窄まり円基で、横断面は扁平楕円～稍円形のものが主体である。北部九州における同時期の他遺跡と同様、主体は今山産玄武岩製であるが、それ以外の石材もともに使用されていたと推測される。

柱状片刃石斧は、大型・中型・小型の各サイズに分化している傾向がうかがえる。刃部は縦断面形が両刃に近いものもみられ、刃線は直線的なものと曲線的なものがある。特に小型品はいわゆる「石ノミ」などと呼称されているもので、いずれも全面研磨が施された定型的なつくりである。

扁平片刃石斧は、中～小型のサイズのものが中心で、大型品は1点（第13図72）のみである。小型品は柱状片刃石斧の小型品と同様に全面研磨が施された定型的なつくりである。柱状片刃石斧の小型品と共に木工等における機能分化が存在していたものと考えられる。また、未製品（再加工途中品）の7点（第16図）は、北部九州地域の同時期の遺跡においても片刃石斧の未製品の出土例は比較的少ないことから貴重な資料といえる。

石鎌は、刃部片4点のうち3点は刃部平面形が直線刃である。紡錘車は、厚手のものと薄手のものに分かれ、穿孔方法は両面からの回転穿孔である。研磨は全面に丁寧に施されている。

打製石錐（穿孔具）は、サヌカイト製が多く、明確な錐部を作り出す定型的なものと、全体的に不定型的なものの二者がみられる。磨製の2点（第19図135・136）は口径が大きく、明確な回転痕は認められない。

砥石は、砥面と底面とが明確な棱をもって接する定形砥石が主体である。サイズは極小型のもの（第20図137）から大型のものまで多様である。砥面に溝状の痕跡を残存するものもみられるが、これらが鉄器用の砥石かどうかは即断できない。

打製石鎌は、無茎凹基式が主体であるが、有茎式も比較的多い。そのほか、側縁に研磨を施して面取りした局部磨製の石鎌が2点（第26図245・第27図264）みられるのも特徴的である。

遺構	時期	スクレ イバ ー			R M F	石 核	剥 片	R M F	模 形 石 器	打 製 石 鎌	合 計	黒 曜 石	サ ヌ カ イ ト
			R	M									
SH2400(住居跡)	中期前半	2	9	2							13	9	4
SH2405(住居跡)	中期前半	3	4	2	6						18	18	
SH2407(住居跡)	中期初頭～中期前半	1	5	1	4					1	12	7	5
SH2437(住居跡)	中期初頭	9	14	31	5	72	23			5	159	83	76
SH2440(住居跡)	中期初頭	4	2	17	4	8	3				38	27	11
SH2444(住居跡)	中期前半	1	2	3	2	2	1	2			13	7	6
SX2475(不明土壙)	中期初頭	1	2	3	2	8					16	12	4
SD2523(溝)	中期後半	6	1	3	5	7	1				23	12	11
SK2419(土壙)	前期後半～中期初頭	7	4	17	6	36	2				72	58	14
SK2490(土壙)	中期初頭	3	1	3	1	7	1				16	8	8
SK2451(土壙)	中期前半	1	2	5	9	1					18	16	2

表3：弥生時代遺構出土の剥片石器集計表(316区)

スクレイパーは、図化したのは17点のみであるが、石材は未報告分も含めて黒曜石よりもサスカイトのほうが多く、かつサスカイト製のほうが大型なのが特徴的である。また、裏面を残す剥片を素材としているものが多く、調整剥離は全体的に粗い。そのほかにも、部分的に二次加工が施された剥片や微細剥離痕をもつ剥片が膨大に出土しており、スクレイパーとの明確な識別が難しい。いずれにせよ、いわゆる使い捨てナイフのような万能的な用途が推測される。

### (2) 不定形剥片石器類の出土傾向

今回の報告対象地区のうち、316調査区の弥生時代遺構から一定量出土した不定形剥片石器類を表3に集計した。

なお、器種設定の定義については前回の報告（細川・梅崎編2005）と同様、RFは剥片の縁辺に部分的な二次加工を施した剥片（retouched flake）、MFは剥片の縁辺に微細剥離痕がみられる剥片（microflaking scars）としている。剥片については、二次加工が施されないもの（町田2002）としている。

基本的には中期初頭～前半の土器を伴う遺構からの出土が主体である。器種としてはスクレイパー・RF・MF・楔形石器・打製石器などがみられ、それに石核や剥片が多く伴っている。318・346区の様相については未だ整理中のため提示できないが、同じように石核や剥片に伴い、打製石器の未製品などもみられる。また、少数ではあるが黒曜石の小型の原礫素材もみられ、本遺跡への素材搬入のありかたを示す資料といえる。

表を見る限り、各遺構における石材比率は、黒曜石がサスカイトと同じかやや上回る傾向が読み取れる。ただし未報告資料を含めて概観すると、全体的にサスカイトのほうが多い。もっとも、いまだ全体数が把握できていないため、両者の比率は不確定的である。弥生時代の北部九州地域における不定形剥片石器類の石材比率については、福岡平野・早良平野の遺跡では黒曜石が圧倒的主体であるのに対し、筑後地域（小郡市三沢北中尾遺跡）ではサスカイトが黒曜石を大きく上回ることが吉留秀敏氏によって指摘されており、その要因として遺跡の立地差と石材流通のありかたの違いが想定されている（吉留2002、2004）。本遺跡のように原産地により近い佐賀平野の場合、石材比率・数量・重量・器種などが通時的にどのように変遷していくかについては今後の重要な課題である。

補足として、316調査区SH2437住居跡出土の石器について触れておきたい。遺構と土器についてはすでに報告されているように（七田編2004）、SH2437は径6.10m～6.44mの円形松菊里型住居で、中央土坑の外に2主柱穴があり、さらに周囲に複数のピットをめぐらす構造である。出土土器は、城ノ越式土器と共に円形粘土帶土器（窓口縁部破片）と牛角把手の破片が検出されている。石器は、敲石（第18図-125・128の2点）、スクレイパー（第23図の9点）、打製石器（第24図-193・210、第25図-220、第26図-254、第27図-260の5点）、打製石錐（第19図-130）、砥石（第20図-137）、太形蛤刃石斧の小破片（図面未掲載）などが出土しており、そのほか不定形剥片類が大量に検出されている（表3）。このことから、住居内において剥片石器等の製作活動がおこなわれていた可能性が高く、松菊里型住居の中央土坑の機能を考える上でも極めて示唆的な事例といえよう。

### (3) 弥生時代中期の特質とその評価・位置づけ

本遺跡の田手二本黒木地区における弥生時代中期の石器の特質として、見通しも含め、これまでの整理の結果から指摘できるのは大きく以下の2点である。

#### ①大陸系磨製石器群の安定的な供給・使用

本遺跡は石器の「消費地」としての性格を強く示す遺跡であるといえる。各器種がある程度限定された石材を用いていることから、器種と石材との対応関係がより明確化したものとみられる。また、今回報告をおこなった資料の中で、未製品（再加工品を含む）がみられるのは石庖丁・扁平片刃石斧の2器種のみである（+擦切石器1点）。このことから、道具としての石器の獲得は基本的に集落外からの搬入に依存していたと推測され、集落間・地域間を結ぶ日常的な生活材の流通網に沿った安定的な交易によってもたらされていたものと考えられる。

そのほか、器種組成上の特徴として石錐の欠落が挙げられる。これは今回報告対象の田手二本黒木地区だけでなく、本遺跡の他地区においても同様である。その理由として、当該期の集落の生業活動における漁労活動の割合が相対的に低調であったことが想定される。田手二本黒木地区的SD0001環境埋土中からは貝層の堆積が確認されており（細川・

梅崎編2005)、貝塚をともなう詫田西分遺跡など田手川下流域の臨海地域に所在する集落群との交易等によってもたらされたものと考えられる(徳富1996)。

## ②不定形剥片石器類の活発な製作・使用

先述したように未だ整理中の資料が膨大なため、本稿では全てを報告し得ないが、数量的には大陸系磨製石器類をはるかに上回る。そのため、多種多様な用途に対応する便利的な道具として頻繁に製作・使用されていたものと考えられる。

肉眼観察によれば、原産地は黒曜石が伊万里市腰岳、サヌカイトが多久市老松山近辺と推測される。このように膨大な剥片石器類が存在する要因として、原産地からの空間的距離(地理的位置関係)および当該期における石材流通のありかたの反映、つまり、石材が豊富かつ入手が容易であったためであると考えられる。そのほか、打製石器の1点(第25図-215)は肉眼観察によれば佐世保市針尾島産の黒曜石とみられ、腰岳以外の黒曜石産出地からの搬入・交流を示す資料として重要である。なお、島島産黒曜石は本遺跡では確認されていない。

このように、少なくとも本遺跡における弥生時代中期前半(須玖Ⅰ式期)までは、大陸系磨製石器類とともにこれらの不定形剥片石器類が多く製作・使用され、石器組成における一定の位置を占めていたことは明らかである。また、当該調査区内において鉄器は検出されていないが、遺存条件的な問題だけでなく、実際の鉄器の数量が少なかった可能性がある。つまり、本遺跡における弥生時代中期前半までの石器の道具箱(tool-kit)の中身は大陸系磨製石器と不定形剥片石器が圧倒的主体であり、工具などの鉄製利器はそれほど普及していなかったものと考えられる。その後、中期後半(須玖Ⅱ式)になると、遺構からの出土例も継続してみられるものの、数量的には激減し、消滅していく。これは福岡平野周辺の遺跡においてはすでに確認されている現象であり(吉留2002)、本遺跡出土資料は佐賀平野においても同様の傾向であることを示す事例といえる。北部九州地域全体において石器総体が激減し徐々に鉄器への転換が進行していく中期(中葉)後半~後期にかけて、これらの不定形剥片石器類がどのように衰退・消滅し、鉄器へと転換していくのかについては今後の重要な検討課題のひとつである。この問題については、残された膨大な資料の整理を継続的に進め、再検討をおこなうとともに、今後改めて報告をしていきたい。

## <参考文献>

- 梅崎恵司1999「福岡県北九州市の弥生時代石器の素材」『研究紀要』第13号 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室  
梅崎恵司2004「無文土器時代と弥生時代の石器生産」「文化的多様性と比較考古学」考古学研究会50周年記念論文集 考古学研究会  
七田忠昭編2004「吉野ヶ里遺跡—平成11年度~12年度の発掘調査の概要」佐賀県文化財調査報告書第160集 佐賀県教育委員会  
七田忠昭編2007「吉野ヶ里遺跡—国吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書2-1」佐賀県文化財調査報告書第173集 佐賀県教育委員会  
下條信行1994「弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作成と地域間の比較研究」平成5年度科学研究費研究成果報告書  
徳富則久1996「弥生~古墳時代の佐賀平野平坦低地の集落」『Museum Kyushu』第52号 博物館等建設推進九州会議  
能登原孝道・中野信彦・小山内康人2007「いわゆる「頁岩質砂岩」の原産地について」『九州考古学』第82号 九州考古学会  
細川金也・梅崎恵司編2005「吉野ヶ里遺跡一田手二本黒木地区弥生時代前期埋藏出土の土器と石器」佐賀県文化財調査報告書第163集 佐賀県教育委員会  
町田勝則2002「「刃器」研究に向けて」『環瀬戸内の考古学—平井勝氏追悼論文集—』古代吉備研究会  
村田裕一2002「工具一紙石」「考古資料大観」第9巻 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器 小学館  
吉留秀敏2002「北部九州弥生時代中期の剥片石器」『充班Ⅱ—埋蔵文化財研究会25周年記念論文集—』25周年記念論文集編集委員会  
吉留秀敏2004「弥生時代剥片石器研究ノート2—三沢北中尾遺跡における弥生時代剥片石器の様相—」『Stone Sources』No.4 石器原産地研究会

## 第4章 吉野ヶ里遺跡出土の武器形石製品

吉野ヶ里遺跡は、九州地域における弥生時代最大級の遺跡であり、前期から後期に渡るまで多くの土器や石器が出土している。本稿では、武器形石製品に焦点を当て、吉野ヶ里遺跡の特質を明らかにしていきたい。なお、対人用に特化したものないしは「戦闘でもっぱら攻撃に使用する道具」(田中2002)が武器と考えるため、明確に攻撃用、対人用ということを証明していないもの、しえないものないしは戦いに使いうるものという意味で、「武器形」と呼称する。また、これまで石劍と一括して呼称されてきたものの中には、寺前直人氏や中川和哉氏が指摘しているように、柄まで石で作り出しているもの、木製などの柄をつけなければ劍として機能し得ないものが存在する。また、棒などの先に着装し槍などとして使用された可能性も指摘されている(中川2001・寺前1998など)。このことから、一般的には、石劍と称されているものを、本稿では大形磨製尖頭器と呼称する。

分析対象資料は、基本的には磨製石器を中心として叙述する。磨製石器の特徴を示すため、打製石器を比較資料として用いる。具体的には、打製および磨製石器、大形磨製尖頭器、石戈である。適宜、佐賀平野や玄界灘周辺の関連資料なども使用する。また、しばしば弥生時代の戦いの議論にも使われる吉野ヶ里遺跡の墓域出土の武器形石製造物について、集落域出土例との比較や、玄界灘沿岸地域や佐賀平野等の状況をあわせて考えることにより、弥生時代の戦いにおける吉野ヶ里遺跡の特質についても指摘を行う。

### 第1節 吉野ヶ里遺跡各地区出土石器

#### (1) 磨製石劍 (第28・29・30図)

270はSD0308中・下層出土の無茎抉入式で、砂質泥岩製である。抉り部は研磨が行われておらず、打ち欠きなどで抉り部を作り出した後に、表面の研磨を行っていることがわかる。抉り部より上も刃が作り出されておらず、面取りされている。

271はP779出土の有茎式で、砂岩製である。茎の中央に円孔を施すが、茎の幅に比べて孔径が大きいため、孔の部分で破損している。側面は全面研磨により面取りされている。

272は複乱出土の無茎式で、黒色粘板岩製である。下端から5cmほど研磨による刃潰しを行っているが、左右で若干の研磨面の長さが異なる。刃部は折損が激しく、刃こぼれの可能性もある。

273はSD003出土の無茎抉入式で、凝灰質粘板岩製である。下端から7.7cm研磨による刃潰しを行っており、さらに端には、横方向の研磨による抉りもみられる。

274は表採の無茎式で、黒色粘板岩製である。下端から5cmほど研磨による刃潰しを行っており、全体的な研磨も粗い。身が厚く、北九州地域で散見される石矛のような形態である可能性もある(下條1982)。

275はP28出土のもので、下端から12.4cm研磨による刃潰しが行われており、手に直接把握することも可能であることから、有柄2式と仮称する<sup>311)</sup>。

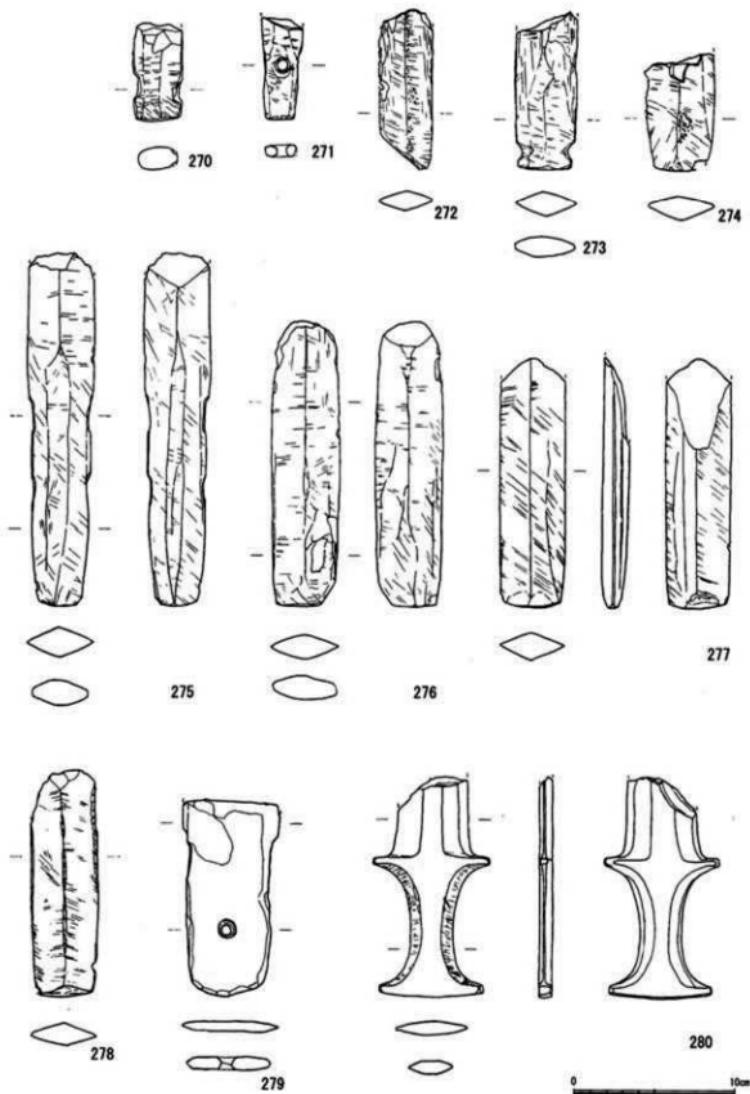
276はN0153トレンチ出土の有柄2式で、凝灰質頁岩製である。下端から10cmほど研磨による刃潰しを行っており、直接手で把握することが可能である。

277は包含層出土の無茎式で、凝灰質粘板岩製である。下端から12cmほどは表面の研磨が雑で、側面は全て刃潰しされている。しかし、側面研磨面の幅が15mm程度で直接把握するには向きなことから、無茎式とした。裏面左側には柄を作り出そうとしたような痕跡が認められるが、切先付近ではなく基部端付近であることから、類例と照らし合わせても、その意義は不明である。

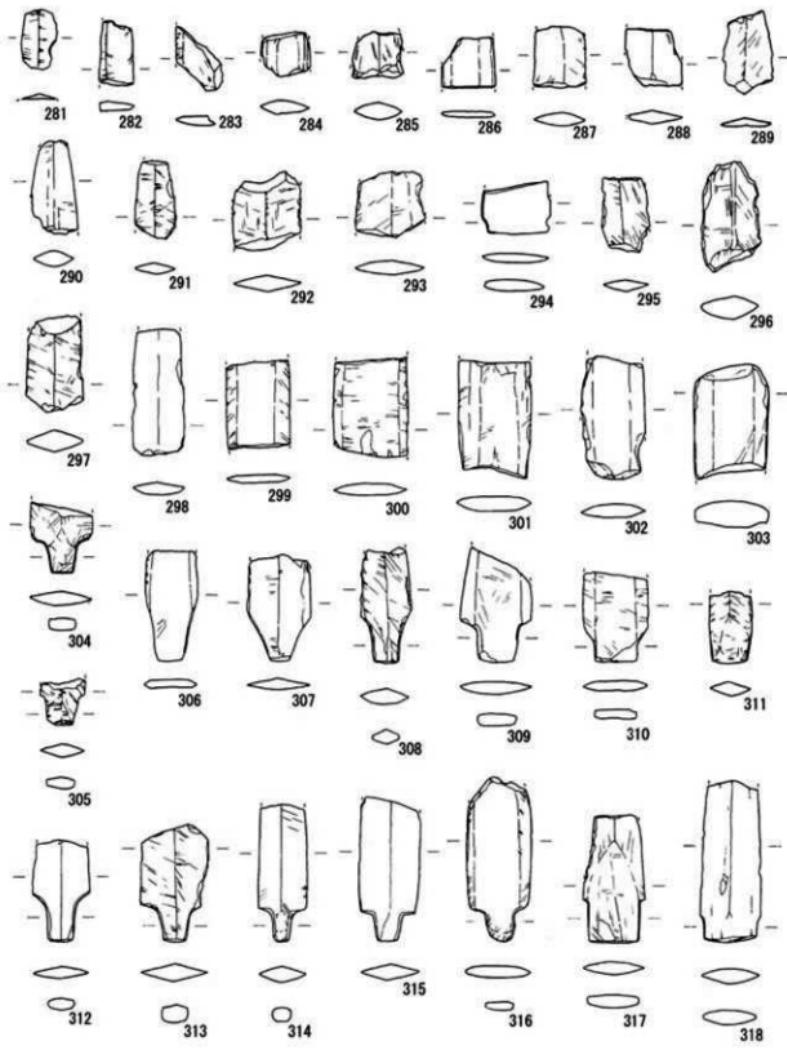
278は表採の無茎式で、凝灰質粘板岩製である。ほかの例とは異なり、下端まで刃を作り出しており、側縁の一部には二段の刃付けも見られる。刃こぼれのような折損も一部に見られることから、研ぎ直しの可能性もある。

279は出土地不明の無茎円孔式で、凝灰質粘板岩製である。側面の折損が激しいが、一部面取りを行っている。ほかの例と比べて扁平で幅広であり、基部中央には一つの孔が穿たれる。

280はSH0089出土の朝鮮式有柄式磨製石劍(有柄1式)で、層灰岩製である。柄部には節を持たず、また刃部と柄部



第28図 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣（大形磨製尖頭器）① (1/3)



0 10cm

第29図 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣（大形磨製尖頭器）②（1/3）

の間に段を有しない。

281はSK1913出土の身で、凝灰質砂岩製である。裏面は完全に剥離している。

282はNo.59トレンチSD02一括出土の身で、凝灰質粘板岩製である。半分しか残っていない。

283はSD10132アゼ南出土の身で、凝灰質粘板岩製である。右側縁を欠損している。

284は出土地不明の頁岩製、285は表採の黒色粘板岩製の身である。

286はNo.55トレンチSD01-150出土、287はSK1009出土、288はSK0107出土の身で、いずれも凝灰質粘板岩製である。

289はSK0866出土の凝灰質粘板岩製の身で、裏面は完全に剥離している。

290はSD0068出土の細粒砂岩製の身で、切先に近い部分である。

291はNo.12トレンチ表層出土の凝灰質粘板岩製の身である。鎌がやや中央からずれ、曲がっている。

292はSH396検出中出土の身で、凝灰質粘板岩ホルンフェルス製である。

293は表採の身で、凝灰質粘板岩製である。

294はSD2507日トレンチ内出土の無茎挿入式であり、凝灰質粘板岩製である。下端付近にわずかに抉りを入れる。

295はSH1304出土の身で、凝灰質粘板岩製である。側縁の刃こぼれが激しい。

296はSD790下層出土の身で、赤紫色泥岩製である。研磨粗く、鎌が左方向に寄っている。

297はSD06015アゼ北出土の身で、細粒砂岩製である。

298はSK1694 Fトレ・Hトレ間上層出土の無茎式で、凝灰質粘板岩製である。

299は表採の身で、凝灰質粘板岩製である。

300は検出面出土の身で凝灰質粘板岩製である。側縁に上端から15cmほど、不明瞭ながらも研磨が見られ、刃潰しを行っている可能性もある。

301はSD0051上面出土の無茎式で、凝灰質粘板岩製である。現存長で2cmほどは刃を作り出している。

302はP677出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。広めに弧状の研磨を行い茎状にしている。

303はSK0886出土の基部で、泥岩ホルンフェルス製である。刃は無く、無茎の基部になるか幅が広いため276のように把握部になる可能性もある。

304は222調査区No.276の有茎式で、黒色泥岩ホルンフェルス製である。

305はSD0003出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。裏面の鎌は不明確である。

306はSH1163出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。側面を下端から3cmほど研磨して、茎を作り出している。

307はSD0784検出面出土の有茎式で、凝灰質粘板岩ホルンフェルス製である。茎端まで鎌が入る。

308はSH0077出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。鎌が曲がるが、茎端まで入っている。

309はSK0240出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。

310はNo.7トレンチ北落込出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。佐賀県文化財調査報告書第100集『吉野ヶ里遺跡』の第47図195番と同一遺物である。

311はST1001-SD10112～3アゼ間出土の無茎式で、凝灰質粘板岩製である。下端から2cmほど側面に研磨を行い面取りしている。鎌が入るところで厚みが変わっており、基部側のほうが薄い。

312はAJ-97-11グリッド出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。茎端まで鎌が入る。

313は包含層出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。茎端まで鎌が入る。

314は検出面出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。刃こぼれはほとんど見られない。

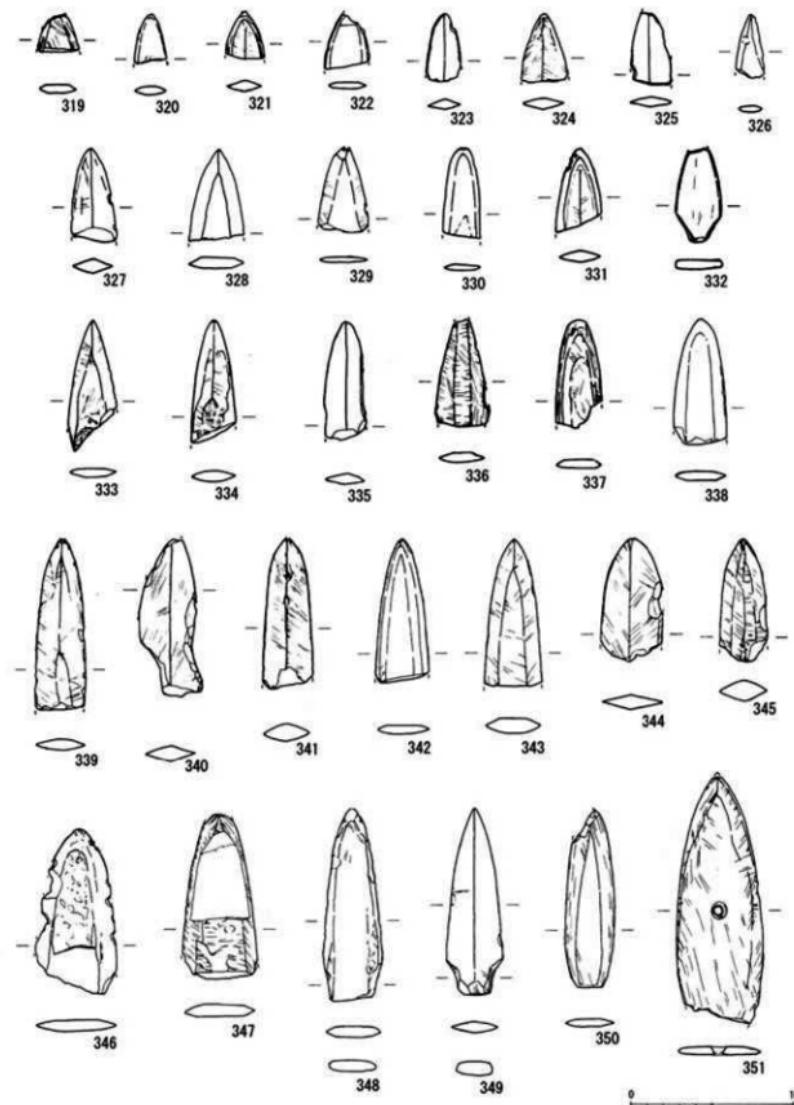
315はP305出土の有茎式で、凝灰質粘板岩ホルンフェルス製である。間から1cmほど研磨により刃潰しを行う。

316は上段北側検出面出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。刃部中央に片面から穿孔途中の孔があり、穿孔中に破損したものと考えられる。左側側縁の間から2cmほどは刃付けがされていない。

317はSD0831出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。やや刃部が内傾しており、刃部が短くなる可能性がある。

318はST1001出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。

319はSK0873出土の切先で、凝灰質粘板岩ホルンフェルス製である。先端を欠損している。



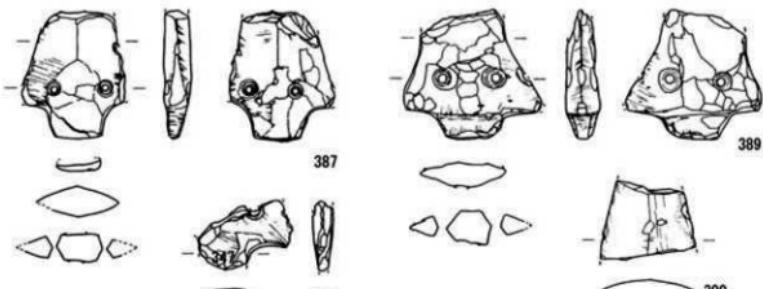
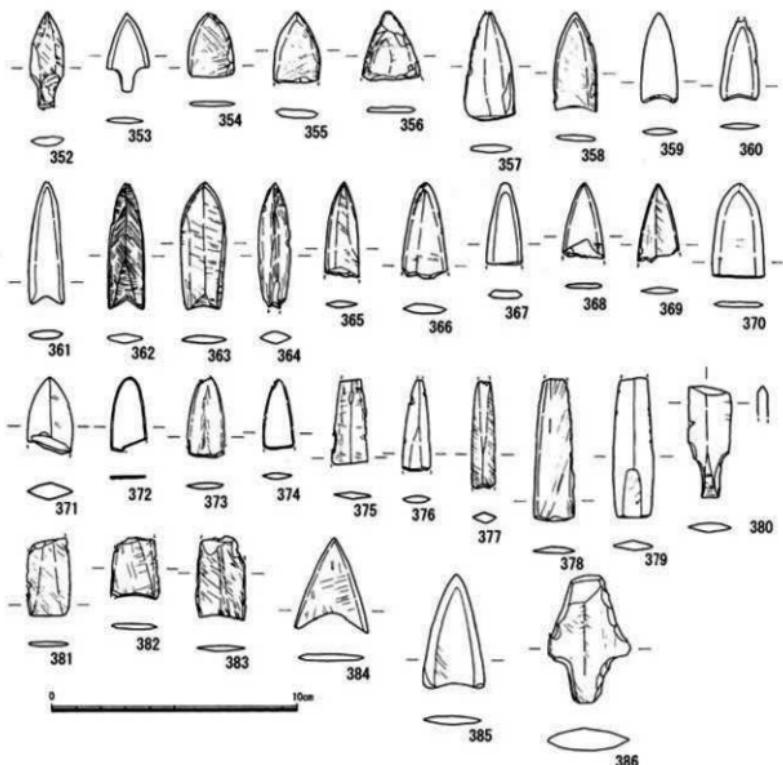
第30図 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣（大形磨製尖頭器）③（1/3）

- 320はSB1311出土の切先で、黒色粘板岩製である。鎌を有しない。
- 321は包含層出土の切先で、層灰岩製である。鎌が不明瞭である。
- 322はSD790下層出土の切先で、凝灰質粘板岩ホルンフェルス製である。
- 323は検出面出土の切先で、凝灰質粘板岩ホルンフェルス製である。側縁に刃こぼれのような欠損が見られる。
- 324はSK261出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。
- 325はSJ0069甕棺墓内上部出土の切先で、層灰岩製である。表面は剥落が激しく、鎌も不明確である。
- 326は包含層出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。他の例に比べやや細身である。
- 327はSD569トレンチ出土の切先で、凝灰質粘板岩ホルンフェルス製である。
- 328はSJ0228甕棺墓内中央部棺底付近出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。先端は全く欠損していない。
- 329は表採の切先で、凝灰質粘板岩製である。
- 330は22トレンチSK04出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。佐賀県文化財調査報告書第100集「吉野ヶ里遺跡」の第47図196番と同一遺物である。
- 331はSD1896内ミカン穴出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。
- 332はSH0017出土で片岩製である。表面・側面・開部に研磨を行っており、再利用品とも考えられるが、長さから考えると有茎式の磨製石鎌の未成品の可能性が高い。
- 333はSK0247・SK248混入の切先で、黒色泥岩ホルンフェルス製である。
- 334はSB0669上面出土の切先で、砂岩製と考えられる。先端から4.5cm程のところで横方向に研磨し、鎌を消している。
- 335はSJ1578甕棺墓埋土内出土の切先で、黒色粘板岩製である。一部再加工を行う。
- 336はSX563出土の切先で黒色粘板岩製と考えられる。表面に横方向の研磨を行い、鎌が二本入る。
- 337はSH590出土の切先で、凝灰質粘板岩ホルンフェルス製である。一部に刃こぼれと考えられるものが認められる。
- 338はSK0601出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。
- 339は表採の切先で、凝灰質粘板岩ホルンフェルス製である。一部刃こぼれが見られる。
- 340はSK0854上層出土の切先で、凝灰質粘板岩ホルンフェルス製である。側縁に二次加工が見られるが、用途不明である。
- 341はSP0306甕棺墓出土の切先で、赤紫色泥岩製である。
- 342はSH1149出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。風化が激しいが、先端には鎌が残る。
- 343はSJ1740甕棺墓出土の切先で、砂岩製である。
- 344はSK0858検出面出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。鎌や不明瞭で、側縁に打ち欠きが見られる。
- 345はN612トレンチ東側褐色土出土の切先で、黒色頁岩製である。先端に縱方向の研磨を行っており、再加工したよううに見えるが、先端から1cmほど側面は研磨により刃潰しをおこなっている。
- 346は222調査区3グリッド4層出土の無茎式で、黒色粘板岩ホルンフェルス製である。幅のわりに長さが短く、側縁には刃こぼれが見られる。
- 347はSD0925環壕跡8-9アゼ出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。表面の一部が大きく欠損している。
- 348はSH1002出土の無茎式で、凝灰質粘板岩製である。下端から2cmほどは刃を作り出していない。
- 349はSD003上面出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。ほぼ完形品である。
- 350はSK800の隣の検出面出土の無茎式で、凝灰質粘板岩ホルンフェルス製である。下端まで刃付けをおこなっており、先端に行くほど厚くなっている。
- 351は包含層出土の無茎式で、凝灰質粘板岩製である。身中央に孔が穿たれ、鎌は認められない。石庖丁の再利用品の可能性もあるが、孔は一つしかなく、その機能的意味も不明である。

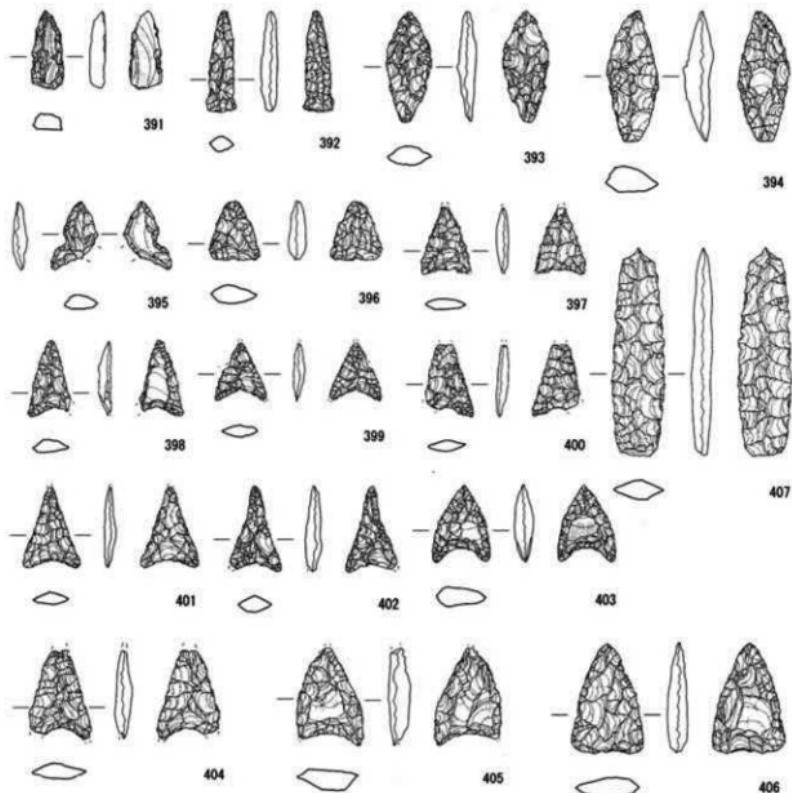
(2) 磨製石鎌・石戈（第31図）

第31図352～386が磨製石鎌、387～390が石戈である。

- 352はSD1918 Aトレンチ南半4層出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。明確な間をもたず、緩やかなカーブを持つ茎がつく。
- 353は検出面出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。身は扁平で、無茎凹基式に茎がついたかのような形態をしている。
- 354はP1033横検出土の平基式で、灰色凝灰岩製である。
- 355はSB1870N<sub>2</sub>出土の平基式で、片状蛇紋岩製である。
- 356はSH575出土の平基式で、砂岩製である。
- 357はSP0720土壤墓出土の平基式だが、基端がやや丸みを持ち円基に近い形態をもつ。石材は蛇紋岩である。
- 358はSJ0248甕棺墓出土の凹基式で、凝灰質粘板岩製である。
- 359はSH1305出土の凹基式で、凝灰質粘板岩製である。
- 360はST1001D-2トレス下出土の凹基式で、凝灰質粘板岩製である。折損面が新しいため、本来は完形品と考えられる。
- 361は出土地不明の凹基式で、凝灰質粘板岩製である。他の例に比べやや細長い形態をもつ。
- 362はSP1057土壤墓出土の凹基式で、黒色粘板岩製である。身中央に鏽が入るが曲がっている。抉りは直線的で三角形を呈する。
- 363はP20(包含層中)出土の凹基式で、灰色凝灰岩製である。ほかの例とは異なり、先端に近いところで最大幅を持つ。
- 364はBトレンチ検出土の有茎式で、繊粒砂岩製である。形態は柳葉形であるが、石材や刃部が木葉状であることなどから、玄界灘周辺で見られるいわゆる柳葉形とは若干異なる。
- 365は検出面出土の切先で、片状蛇紋岩製である。
- 366はSD1102.18アゼ-Aトレ間出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。
- 367はSH1291出土の切先で、層灰岩製である。
- 368は中包含層2段目出土の切先で、緑色片岩製である。
- 369はSK0764出土の切先で、蛇紋岩製である。不明瞭ながらも稜を持つの。
- 370はP2582周辺出土の平基式で、凝灰質粘板岩製である。
- 371は検出面出土の切先で、泥岩ホルンフェルス製である。菱形の断面形を持ち、木葉状である。やや厚いことから石剣の再利用の可能性もある。
- 372はSD415出土の平基式で、凝灰質粘板岩製である。厚さ1mmと非常に薄く、中央に影らみも無く完全に扁平である。
- 373はSX1042出土の切先で、繊粒砂岩製である。
- 374は検出面出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。
- 375はP2531出土の切先で、層灰岩製である。
- 376はN<sub>1</sub>85トレ包含層出土の切先で、凝灰質粘板岩製である。風化が激しい。
- 377は表鉄の切先で、砂岩製である。茎がついて柳葉形のようになる可能性があるが、幅狭で作りも粗い。
- 378はSK532N<sub>6</sub>3出土の切先に近い身で、結晶片岩製である。
- 379はSJ0790甕棺墓出土の細長い平基式で、層灰岩製である。先端および身下部の鏽付近が欠損している。
- 380は出土地不明の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。先端研磨により側縁と直行する刃部作りにしており、もやは石鎚としての機能を有しない。
- 381はN<sub>1</sub>85トレ包含層出土の平基式で、片状蛇紋岩製である。
- 382はN<sub>6</sub>39出土の凹基式で、繊粒砂岩製である。
- 383は検出面出土の凹基式で黑色粘板岩製である。
- 384は中溝入口西SH切合部出土の凹基式で凝灰質粘板岩製である。
- 385はトレンチ最北東ミニトレ内出土の凹基式で、凝灰質粘板岩製である。
- 386はSD1122出土の有茎式で、凝灰質粘板岩製である。形態から石剣の再利用品と考えられる。
- 387、388は出土地不明の石戈で砂岩製である。ともに基部のみが残存している。389は出土地不明の石戈で、赤紫色凝灰岩製である。基部が残存している。390は検出面出土の石戈身で、黒色粘板岩製である。裏面には鏽がなく、石



第31図 吉野ヶ里遺跡出土磨製石器 (1/2)・石戈 (1/3)



第32図 吉野ヶ里遺跡出土打製石器（墳墓出土）(2/3)

矛である可能性もある。

(3) 墳墓出土打製石器（第32図）

391はSJ124壺棺墓縫内出土の尖基式で、黒曜石製である。横長薄片を利用しており、裏に主要剥離面を残す。

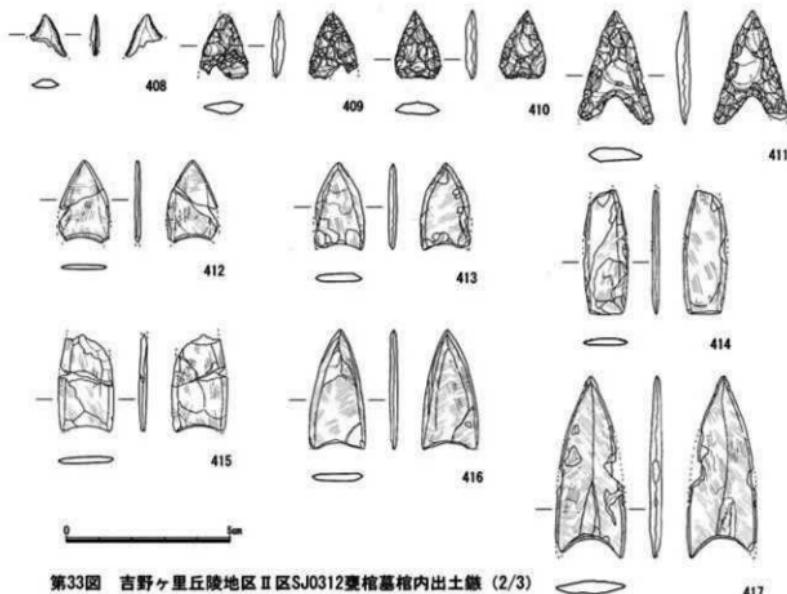
392はSJ733壺棺墓出土の石器で、サスカイト製である。基部は凸にならず平坦であるが、幅狭であることから、尖基式の部類に入れてよいものと考える。

393はSJ124壺棺墓縫内出土の尖基式で、黒曜石製である。中心部よりやや上よりで最大幅を持つ木の葉形を呈す。

394はSJ373壺棺墓縫中出土の尖基式で、サスカイト製である。剥離がやや粗く、ほかの例に比べて厚い。

395はSJ1438壺棺墓出土の凹基式で、側縁に抉りを持つ、いわゆるアメリカ式石器である。サスカイト製で、片方の脚部を欠損しており、裏に主要剥離面を残す。

396はSJ1740壺棺棺内出土の平基式で、黒曜石製である。先端をごくわずかに欠損するが、ほぼ完形である。



第33図 吉野ヶ里丘陵地区II区SJ0312壺棺墓棺内出土鐵(2/3)

417

397はSJ1716壺棺墓出土の凹基式で、先端をわずかに欠損する。

398はSP267土壙墓出土の凹基式で、黒曜石製である。片方の脚部をガリによって欠損し、裏に主要剥離面を残す。

399はSJ1405壺棺墓棺内埋土出土の凹基式で、黒曜石製である。先端および身の一部が欠損している。

400はSJ665壺棺墓人骨片中から出土した凹基式で、黒曜石製である。先端および片方の脚部が欠損している。

401はSJ373壺棺墓棺内出土の凹基式で、サスカイト製である。完形品で、側縁がやや内済する。

402はSJ1938壺棺墓棺内出土の凹基式で、黒曜石製である。片方の脚部をわずかに欠損し、側縁が内済する。

403はSJ1740壺棺墓棺内出土の凹基式で、サスカイト製である。完形品で、両面に主要剥離面を残す。

404はSP282土壙墓出土の凹基式で、サスカイト製である。先端と両脚部が欠損しているが、そのうち長いほうの脚部はガリによる欠損である。

405はSJ1419壺棺墓棺内埋土出土の凹基式で、サスカイト製である。先端と片方の脚部を欠損するが、ガリによるものであり、表に主要剥離面を残す。

406はSJ506壺棺墓出土の平基式で、サスカイト製である。やや大形の完形品で、裏に主要剥離面を残す。

407はSJ267壺棺墓出土の尖基式で、サスカイト製である。先端と基部の両端が欠損している。大形で6.8gを計り、石槍の可能性もある。

#### (4) 吉野ヶ里丘陵地区II区(YGK-II) SJ0312壺棺出土鐵(第33図)

第33図は吉野ヶ里丘陵II地区(YGK-II)のSJ0312壺棺(立岩式)棺内から出土した鐵で、内訳は打製が3点、磨製が6点、駒の歯が1点の計10点である。出土状況としては、人骨の腹部から胸部にかけての椎骨周辺から検出され、そのうち数個は脊椎骨に嵌入した状態であった(佐賀県教育委員会1992:第113集)。素材は、408が駒の歯(メジロザメ科)、409が黒曜石、410・411がサスカイト、412・417が粘板岩、413・415・416が片状蛇紋岩、414が黒色粘板岩で

ある。408は牙鑑である。歯の形態の特性上、凹基式に類似する形態になるものと考えられる。409は打製石鑑で、平基式になるものと考えられる。410は円基に近い平基式の打製石鑑である。411は凹基式の打製石鑑である。抉りが深く、両面に素材面を残す。412は凹基式の磨製石鑑で、先端は折れているものの接合している。413は凹基式の磨製石鑑である。414は平基式の磨製石鑑である。他の例とは異なり細長で、先端を欠損している。415は凹基式の磨製石鑑で、二片が接合するが、先端は欠損している。416は凹基式の磨製石鑑である。417は凹基式の磨製石鑑で、両側縁が抉りのように欠損している。ほかの例と比べて大形で、残存重量も5gある。

## 第2節 分析と考察

### (1) 分析

吉野ヶ里遺跡では、凹基式・平基式の無茎式の磨製石鑑が6割を占めており、中期末を中心に、墳墓出土例が多い。ただし中期末の例は、SJ0312から磨製石鑑6点が一括で出土しているため、これを除けば吉野ヶ里遺跡の存続時期を通じて、一定量存在している。(表4)これは、吉野ヶ里遺跡を除く佐賀平野の他の遺跡と比較すると、墳墓出土例の多さに大きな特徴がある。また、玄界灘周辺の遺跡と比較すると、墳墓出土例が多い点は共通するが、前期から中期にかけて出土する柳葉式磨製石鑑を中心とする様相とは大きく異なる。法量を見ると、有茎式と無茎式との間に、一点を除いて大きな差異ではなく、重量も同様である。例外の1点(386)は、大形磨製尖頭器の再利用品である。(表5)佐賀平野出土例には、完形品が少ないが、吉野ヶ里遺跡出土例との間に大きな差異は見出せない。しかし、玄界灘周辺では、無茎式は吉野ヶ里とはほぼ同じ様相を呈するものの、柳葉形および有茎式は無茎式よりも大きく、吉野ヶ里遺跡を含む佐賀平野例とは大きく異なる。

ここで、磨製石鑑と打製石鑑との比較を行い、磨製石鑑の特徴を考察する。吉野ヶ里遺跡出土の打製石鑑は、凹基式が最も多く、次いで尖基式が2割ほどを占める。また、前期末～中期前半の時期を中心として出土しており、出土遺構は墓を含め多くの遺構で均等に出土している。磨製石鑑との比率を見ると打製石鑑が8割以上を占め、石鑑の中では、弥生時代を通じて打製石鑑が中心である。(表6)佐賀平野出土打製石鑑と比較すると、型式では大きな差異がないものの、墓出土例が非常に少ない。ところが、玄界灘周辺では、凹基式が最も多いものの、尖基式は5%にも満たず、磨製石鑑と同様、型式の上で吉野ヶ里遺跡を含む佐賀平野と大きく異なる。(表7)形態では、磨製石鑑は打製石鑑の無茎式よりもやや大きく、薄いという傾向がある。また、有茎式の磨製石鑑は、法量上有茎式の打製石鑑より尖基式の打製石鑑により近い傾向がある。重量を見ても、無茎式は打製石鑑よりやや重く、有茎式は形態同様、打製石鑑有茎式よりも尖基式のほうにより近い傾向にある。(表5・8)これは、形態が特徴的な柳葉形磨製石鑑を除けば、佐賀平野や玄界灘沿岸でも同様な傾向が認められる。

吉野ヶ里遺跡では、大形磨製尖頭器の欠損品がおよそ6割と多いため、型式はあまり明確ではない。型式が明らかなものでは、有茎式や無茎式が多く、有柄式は3点のみである。時期の不明なものが多いが、中期を中心と後期まで一部存続している。土壤や環境を含む溝、そして墓からも一定量が出土している。(表9)佐賀平野内の遺跡と比較すると、有茎式が多いこと、中期を中心として出土することは、それほど差異はない。ただし出土する遺構では、佐賀平野内より墳墓出土品の割合が少ない傾向にあり、差異が見られる。また、佐賀平野において朝鮮式有柄石剣が吉野ヶ里遺跡にのみ認められることも特徴と言える。ちなみに、玄界灘周辺も、有柄式石剣が若干多いことを除いては、佐賀平野とはほぼ同じ特徴を示している。形態的にも、吉野ヶ里遺跡出土の完形品が少ないことから明確ではないが、佐賀平野、玄界灘周辺とも大きな差異はないものと考えられる。

### (2) 考察

#### ①石鑑・大形磨製尖頭器・石戈の特徴

磨製石鑑や打製石鑑の形態に関して、吉野ヶ里遺跡および佐賀平野では、無茎式と有茎式の間に法量の差が認められないことは、主として、有茎式磨製石鑑の時期的な特徴によるものと考えられる。有茎式磨製石鑑は、早期段階に柳葉形磨製石鑑などの規格性のあるものが、玄界灘周辺に朝鮮半島から流入し、早期後半段階からやや弛緩した形態

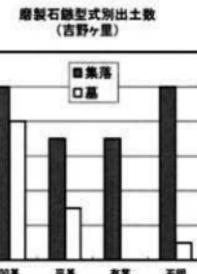
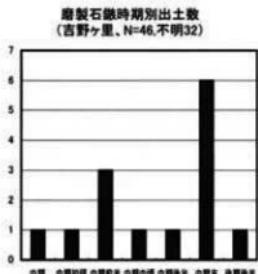
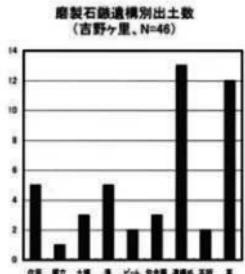


表4 磨製石器型式・時期・遺構別出土数(吉野ヶ里)

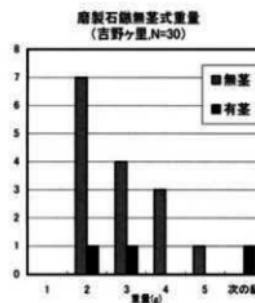
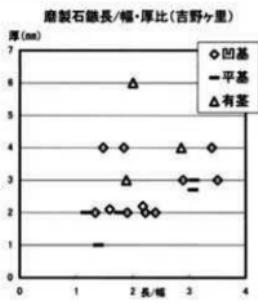
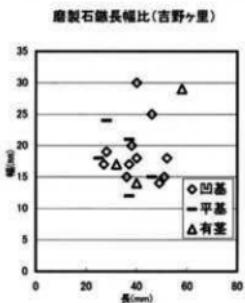


表5 吉野ヶ里遺跡磨製石器法量

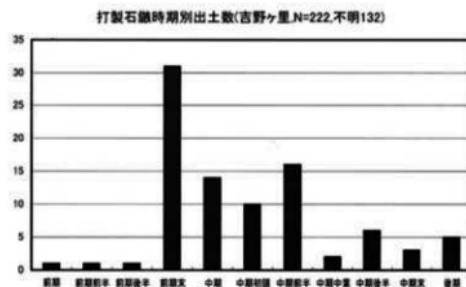
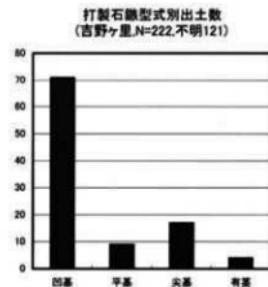
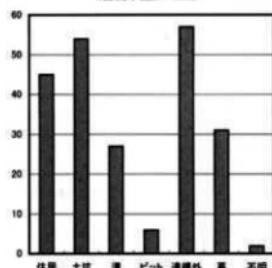


表6-1 打製石器 型式・時期別出土数(吉野ヶ里)

打製石器遺構別出土数  
(吉野ヶ里,N=222)



打製・磨製石器時期別出土比率(吉野ヶ里)

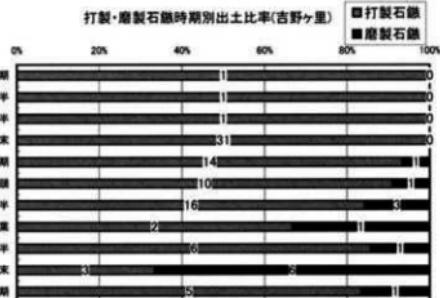


表6-2 打製石器型式・時期・遺構別出土数、打製石器磨製石器出土比率(吉野ヶ里)

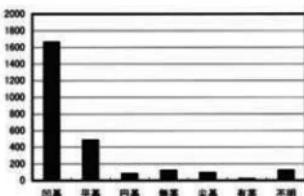
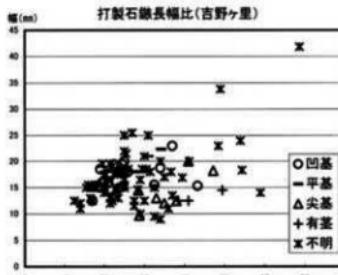
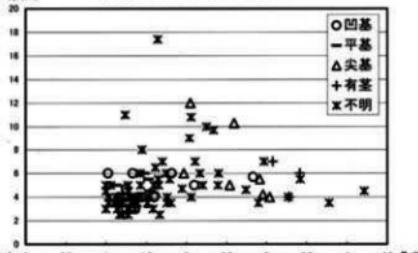


表7 玄界灘沿岸地域打製石器型式別出土数(N=3020)



打製石器長/幅・厚比(吉野ヶ里)



打製石器重量(吉野ヶ里)

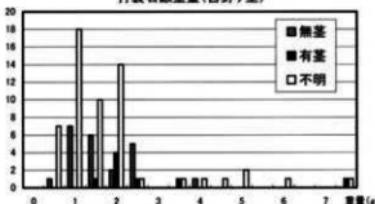


表8 打製石器重量(吉野ヶ里)

のものが北部九州で製作されるなど、流入してから変容する速度が早い。また、有茎式石獣は、前期段階を中心として出土し、中期になると出土量が激減するという傾向がある。実際に有茎式磨製石獣の時期を見ても、玄界灘周辺では前期までの出土例が多く中期以降に下るものは少数である。それらは形態的にも小型化し、やや厚いものの無茎式と近くなっている。(表10)このことから、吉野ヶ里遺跡出土例は、前期末以降中期に属するものと考えられ、この点で言えば、玄界灘とも差はない。

また、有茎式の磨製石獣の法量が有茎式の打製石獣より尖基式により近いという傾向も、現段階では、磨製石獣が北部九州一円で量的にも形態的にも衰退していく中で、吉野ヶ里遺跡においては、尖基式打製石獣に法量上近いものが出土したとしておく。ただし、出土数の少なさに見るよう、さほど隆盛せずに、ほかの地域同様それでいていたといえる。

磨製石獣は打製石獣の無茎式よりもやや大きく、薄いという傾向に関しては、無茎式磨製石獣を見てもわかるように、表面を研磨して薄く仕上げるため、その製作技法を反映していると考えられる。無茎式磨製石獣は、前期後半期になってから玄界灘周辺を中心として本格的に流入するが、その出現当初から薄い身で、大きな形態変化も認められない。これは、特定の打製石獣を念頭におき模倣して製作したのではなく、打製とは違う磨製石獣の形を意識しながら製作したことと示していると考える。

吉野ヶ里遺跡における最大の特徴の一つに、打製石獣尖基式が多いことがある。この傾向は、佐賀平野内では同様であるものの、玄界灘沿岸とは大きく異なる。尖基式は無茎式よりやや大きく、有茎よりやや小さいという特徴を持つが、法量の面よりも矢柄への固定の方法やその製作技法において無茎式とは異なる意識を持って製作されたことは確実であり、そこにどのような違いがあるかが重要となる。無茎式よりやや大きく、重量もあることから、使い分けがされていた可能性もあるが、出土遺構を見る限りでは、大きな差異はない。墳墓出土例も少ないことから、畿内で論じられているような武器としての機能を想定するのも難しい。石材を検討すると、尖基式はサスカイトで製作されたものが主体を占め、無茎式はサスカイトと黒曜石の両方がある。このことから、近隣の多久でサスカイトが安定して入手できることが、その要因である可能性が高い。しかし、同じく多久に近い唐津では尖基式はさほど多くなく問題点が多い。現段階では、石材を含めた何らかの理由により佐賀平野では尖基式が他地域より流行していたことを指摘できるに過ぎない。

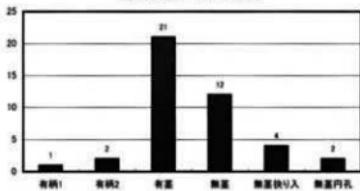
大形磨製尖頭器については、形態的にも型式的にも、有柄式石劍を除いて地域間で大きな差はない。無柄式は、北部九州全体で見ると、有茎式・無茎式とともに、前期後半に玄界灘沿岸地域に出現し、前期末～中期前半にかけて盛行するが、後期にはほとんど認められなくなる。また、前期末～中期初頭期になると出土量の増大に伴い、弛緩した形態を示すものなど多様なヴァリエーションが認められるようになる。その他、粗雑化するものが出でてくる以外には、時期を通じて形態的な変化は認められないという特徴がある。つまり、有茎式や無茎式を中心として、研ぎ直しが可能と言う特徴を持つため、さまざまな形のものが地域に関係なく存在していたと言える。

一方、朝鮮式の有柄式磨製石劍（有柄1式）は、玄界灘沿岸地域を中心として早期から前期前半までに、ほとんど資料が出土する。主に墳墓に供され盛行するが、前期後半期になるとほとんど認められなくなる。しかし、これに入れ替わるように前期後半からは有柄2式が出現しており、中期いっぱい少量はあるが認められる。

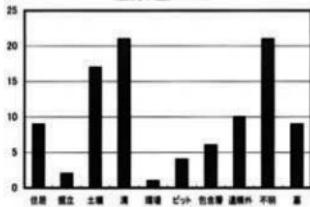
このような流れの中で吉野ヶ里遺跡例を見ると、有柄2式に関しては、散発的に多くの地域で認められるため、本遺跡例もそのような中の一つであると捉えられる。有柄1式については、朝鮮半島例などとは違い柄部が刃部から段を持って連続しないものの、明確に突出部を持つものである。このことから、早期～前期前半を中心として遅くとも前期後半までに収まるものと考えられる。また、有柄式が佐賀平野内で吉野ヶ里遺跡のみに認められることは、前期の早い段階から佐賀平野内において、吉野ヶ里遺跡が交流の結節点として中心となっていた可能性がある。

石戈は、4点の出土であるが、退行した内を持つ中村修身氏の無柄型石戈Ⅲ類と、内がほかの例に比べて長い無柄型石戈Ⅱ類が出土しており、これらは、遠賀川流域で前期末～中期初頭期に細形銛戈の模倣品として出現した石戈が退行したものである。このうちⅢ類のほうは、北部九州に広く認められるものであり、Ⅱ類のほうは遠賀川流域以外の北部九州域からは少數ながら広く出土している。また、本遺跡資料は時期が不明だが、形態から推察するに、Ⅲ類

大形磨製尖頭器型式別出土数  
(吉野ヶ里,N=100,不明58)



大形磨製尖頭器遺構別出土数  
(吉野ヶ里,N=100)



大形磨製尖頭器時期別出土数  
(吉野ヶ里,N=101,不明74)

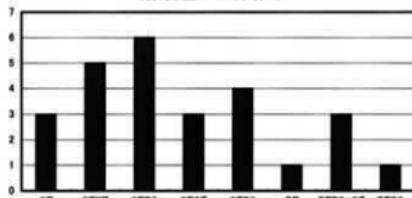
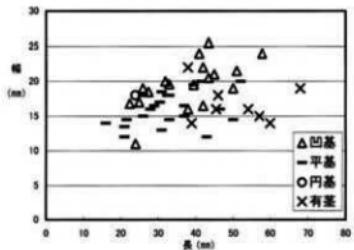
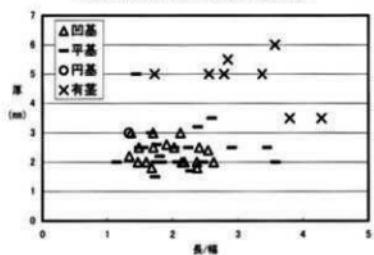


表9 大形磨製尖頭器型式・時期・遺構別出土数(吉野ヶ里)

磨製石鎌長幅比(玄界灘,中期以降)



磨製石鎌長/幅・厚比(玄界灘,中期以降)



吉野ヶ里		佐賀平野	
墓域	集落域	墓域	集落域
大形磨製尖頭		大形磨製尖頭	
切先	8) 完形 3) 切先	3) 完形 4) 切先	
先端欠損	3) 切先	29) 切先 15) 切先	27
		13) 先端欠損 9) 先端欠損	10
		38) 基部のみ 2) 基部のみ	22
		18) 身のみ 1) 基部欠損	1
			身のみ 31
打削石器		打削石器	
完形	11) 完形 10) 腳部欠損	1) 完形 165	
	12) 腳部欠損	2) 腳部欠損 83	
基部欠損	13) 先端欠損 9) 切先	切先 9	
	5) 先端欠損 5) 基部欠損	先端欠損 73	
身欠損	9) 身のみ 10) 破損	基部欠損 15	
		基部のみ 1	
		身のみ 1	
磨製石器		磨製石器	
完形	5) 完形 4) 切先	10) 完形 3) 完形	6
	8) 先端欠損 2) 切先	2) 先端欠損 6	
基部欠損	5) 基部欠損 2) 基部のみ	先端欠損 13	
	5) 基部欠損 2) 基部のみ	基部欠損 2	
身欠損	9) 身のみ 9) 先端欠損	身欠損 1	
	2) 身のみ		

表10 磨製石鎌法量(玄界灘周辺,中期以降)

表11 武器形石製品折損状況

は中期中葉～中期後半、Ⅱ類は中期前葉～中期後半あたりに位置づけられるものと考えられる。なお、中村氏は、Ⅰ・Ⅱ類は研ぎ直しが認められることから武器としての機能を持っていたと想定し、Ⅲ・Ⅳ類は内の退行や石材が蛇紋岩や滑石などの柔い石になることから実戦用武器としての機能を失っていくと指摘している（中村1997）。しかし、Ⅰ類の評価は別として、Ⅱ類に関しては、すでに退行の始まっているものであり、武器として使用することは可能であっても、武器ではないと考える<sup>註2</sup>。

## ②墳墓出土例について

吉野ヶ里遺跡では、墳墓出土例に関しても特徴が認められた。打製石器および磨製石器は佐賀平野内でも出土品が多い傾向にあり、逆に大形磨製尖頭器は少ない傾向にあった。そこで、吉野ヶ里遺跡や他地域の墳墓出土例を詳細に見ていき、その特徴や意味を考えたい。

まず、研究史でも取り上げられてきた、折損状況についてみていく（表11）。吉野ヶ里遺跡では、墳墓から出土する大形磨製尖頭器のすべてが切先例であり、集落出土の多様な欠損状況とは差異が見出せる。しかし、佐賀平野内では、切先例も多いものの、完形品や基部のみを副葬する例が佐賀市増田・津留遺跡で出土している。逆に打製・磨製石器は完形品や先端欠損品、身欠損品など集落内出土例ほどではないものの多くの種類が認められ、大形磨製尖頭器とは逆に切先例は集落内でのみ認められる。また、吉野ヶ里遺跡の墳墓出土例のうち全てが無茎式というのも特徴のひとつである。

墳墓から出土する武器形遺物は、特に大形磨製尖頭器や石鎚については、スダレ遺跡から人骨に刺された例が見つかって以来、戦いの結果であり、戦死者のものであるとされてきた（横口1976・1995など）。しかし、佐賀平野で基部のみや完形のものが見つかっていることから、大形磨製尖頭器の副葬行為が存在していたことは明らかである。また、嘉麻市原田・鎌田原遺跡では切先を合わせたように出土している例があり、福島日出海氏も指摘するように切先副葬の習俗が存在していたことは疑いない（福島1998）。さらに、骨に嵌入したり、刺さっていたものとしても、戦闘で命を落としたのか、処刑されたのか、模擬戦での被害者なのか、事故によるものなのかの判別はきわめて困難である（松木2000）。吉野ヶ里遺跡例にもして墳墓から出土する大形磨製尖頭器は切先が全てであることから戦死者が含まれる可能性は高い。特に、SP1411土壤墓やSJ0312壺棺墓では、棺内から鐵が多数出土しており、処刑や儀礼的殺人の可能性も考えられる。また、他の墳墓でも棺内の埋土中や上面出土のものがあるなど多様な解釈が可能である。これは、弥生時代前期末～中期にかけて、壺棺墓という特徴的な墓制が広がることによって、人骨が遺存しやすくなったり、同時に石製の武器形遺物という残りやすく、受けやすいものが武器として使用できる状況であったことで、この時期に戦いが多く見えててしまうという可能性も考える必要がある。このように墳墓出土品や武器形遺物という観点から見た段階では、まだまだ不明な部分が多く、弥生時代の戦いについて論じる場合には戦いに関する要素総体の中で位置づけていく必要がある。

吉野ヶ里遺跡は、前期の朝鮮式有柄式石剣の存在、また中期の墳丘墓をはじめとして銅剣が出土することなど、佐賀平野の中で中心として交流を行い、多くの文物を得ていたことは確実であり、交流の結節点ともいえる。また、中期は環境が拡大し、人口の増加が予想される時期である。人口の増加は多くの研究史によても指摘されているように、集団間接触の増により摩擦も増加すると考えられ、戦いの数自体も増加するものと考えられる。つまり、戦いも交流の一つの形態としてみると、交流の結節点であるがために吉野ヶ里遺跡は戦いも多かった可能性があると言えるだろう<sup>註3</sup>。

註1～有柄2式は、茎長及び握り研磨面が75mm以上のものである。北部九州出土の大型磨製尖頭器の茎長及び握り研磨面および朝鮮式磨製石剣の柄の長さから設定したものである。これは寺前氏が、畿内の磨製尖頭器において「握り研磨面」を8cm前後で設定しているのとほぼ同様であるといえる（寺前1998）。

註2～武器として使用可能であることと、武器であることとは、先に述べたようにまったく意味が異なる。柳葉形磨製石鎚なども横

口達也氏は、新町遺跡で嵌入例があることから、武器であると述べているが(橋口1996など)、それが戦いによるものか、儀礼によるものか、事故によるものか判断はできず、また、柳葉形が玄界灘周辺で主に副葬用に用いられることを勘案すれば、武器として使用可能であるが、専用として特化した「武器」ではないということはご理解いただけると思う。

註3-このようないくつかの視点で見ると、受傷人骨や墓内出土の武器形遺物が多い小都市・筑紫野市・鳥栖市付近も同じく地峡帯であり、交流の結節点であるために、緊張関係も多かったと捉えることが可能である。

#### 【参考文献】

- 下條信行 1982 「石矛の提唱—木葉形磨製石製武器について—」『賀川光夫先生還暦記念論集』 pp.83-94. 大分:賀川光夫先生還暦記念論集編集委員会
- 田中琢 2002 「戦う」『日本考古学事典』(田中琢・佐原真編)pp.536-539. 東京:三省堂
- 寺前直人 1998 「弥生時代の武器形石器」『考古学研究』45-2 pp.61-80. 岡山:考古学研究会
- 中川和哉 2001 「弥生時代の石剣の分類と操作概念」『京都府埋蔵文化財論集』4(創立二十周年記念誌) pp.133-142. 向日:財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 中村修身 1997 「石戈の形態分類と編年(再考)」「地域相研究」25 pp.33-51. 北九州:地域相研究会
- 橋口達也 1976 「磨製石剣嵌入骨について」「スダレ遺跡-福岡県嘉穂郡穂波町椿所在道路の発掘調査報告-」 pp.40-45. 穂波・穂波町教育委員会
- 橋口達也 1995 「弥生時代の戦い」『考古学研究』42-1 pp.54-77. 岡山:考古学研究会
- 福島日出海 1998 「石製及び青銅製武器の初先副葬について」『九州考古学』73 pp.9-34. 福岡:九州考古学会
- 松木武彦 2000 「戦死か刑死か副葬か? -館内の石製武器から見た弥生社会像-」「シンポジウム 新方遺跡からの新視点 濱戸内弥生文化のバイオニア」 pp.69-76. 爱知:文部省科学研究費(地域連携推進研究)古人骨と動物遺存体に関する総合研究「シンポジウム実行委員会

### 第3章 武器形石製品出土の壺棺について

武器形石製品を出土した壺棺のうち、3基について報告する。(第34図)

吉野ヶ里地区1区 SJ0069壺棺

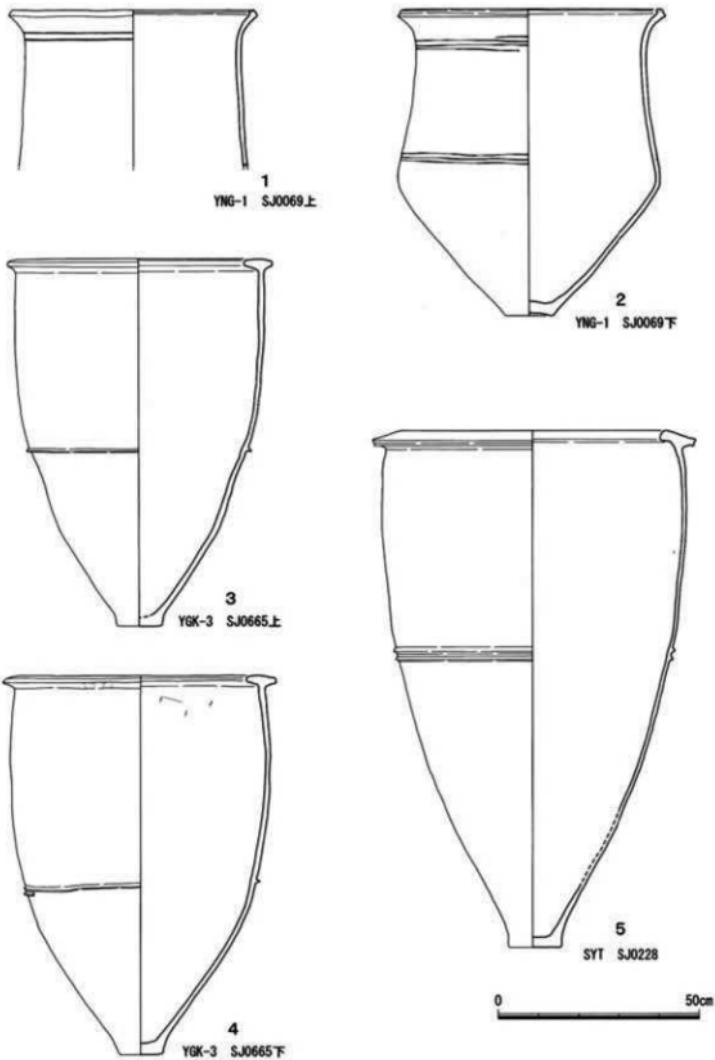
SJ0069壺棺内から325が出土。1は上壺。口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部上端に粘土帯を貼付。口縁部下に2条の沈線を廻らせる。復元口径58.6cm、現存器高38.0cm。内外面色調暗褐色。最終調整内外面ナデ。金海式期。2は下壺。口縁部から胴部にかけて一部欠失。胴部下位に最大径を持ち、上げ底を呈する。口縁部下と胴部に3条の沈線を廻らせる。復元口径61.0cm、器高74.2cm、底径12.6cm。内外面色調にぶい橙色。調整外ハケメのちナデ。内面ナデ。金海式期。

吉野ヶ里丘陵地区3区 SJ0665壺棺

SJ0665の人骨片中から400が出土。3は上壺。口縁部から底部にかけて約1/2周欠失。胴部中位に1条の突帯を持ち、突帯部から口縁部にかけてまっすぐ立ち上がる。口縁部は断面T字状を呈する。復元口径63.6cm、器高89.0cm、復元底径10.8cm。色調は外面橙色、内面にぶい黄橙色。調整は外面ハケメのちナデ、口縁部及び突帯部は横ナデ。内面ナデ。汲田式期。4は下壺。完形。胴部下位の1条突帯は、巻き付け始めと終わりが繋がらず部分的に2条になる。胴部から口縁部にかけてすばまりながら立ち上がる。口縁部は断面T字状を呈する。口径64.8cm、器高91.8cm、底径10.6cm。色調は外面橙色、内面にぶい黄橙色。調整は外面ハケメのちナデ、口縁部及び突帯部は横ナデ。内面ナデ。汲田式期。

志波屋四の坪地区 SJ0228壺棺

SJ0228壺棺内中央部底付近から328が出土。5は單棺。口縁部から胴部にかけて一部欠失。胴部中位に2条の突帯を廻らせる。口縁部は断面T字状を呈し、外傾する。胴部から底部にかけて細く縮まり小さな底部を持つ。口径79.2cm、器高122.6cm、底径12.6cm。色調は内外面黄褐色。調整は外面ハケメのちナデ。口縁部及び突帯部は横ナデ。内面ナデ。須玖式期古段階。



第34図 石函出土壺棺 (1/8)

## 第5章 まとめ

ここでは第3・4章で述べた石器の石材について概略をまとめた。石材の肉眼鑑定は北九州市立自然史・歴史博物館の藤井厚志氏の協力を得た。吉野ヶ里遺跡出土の大陸系磨製石器は1万点を越えている。そのなかで、弥生時代中期の大陸系磨製石器と剥片石器の石材、石材産出地、石器生産地などについて述べる。また器種と石材が一目できるよう表12にまとめたので参考にして頂きたい。

### (1) 石材

まず石材の名称を器種毎に列挙した。石庵丁は灰色凝灰岩、粘板岩ホルンフェルス、赤紫色泥岩、白色片岩、石英玄武岩。石鎌は粘板岩ホルンフェルス、凝灰岩ないし細粒砂岩。磨製石劍は頁岩質砂岩、層灰岩、凝灰岩、赤紫色泥岩、片岩。石戈は砂岩、赤紫色凝灰岩、黒色粘板岩。磨製石鎌は頁岩質砂岩、ホルンフェルス、黒色粘板岩、細粒砂岩、層灰岩、片状蛇紋岩。伐採石斧はカンラン石玄武岩、細粒砂岩、砂岩、蛇紋岩。柱状片刃石斧は層灰岩、黒色泥岩ホルンフェルス、砂岩。扁平片刃石斧は柱状片刃石斧と同様であるが他に緑色片岩が使用されている。紡錘車は片岩。砥石は砂岩。剥片石器はサヌカイトと黒曜石。他に磨石や敲石には変成した花崗岩系の石材が使用されている。

石材 石器	玄 武 岩	石 英 玄 岩	安 山 岩	黑 曜 石	サ ヌ カ	花 崗 岩	砂 岩	凝 灰 岩	粘 ホ ル	黑 色 粘	黑 泥 水	层 灰 岩	赤 紫 泥	蛇 紋 岩	片 蛇 紋	片 岩	綠 色 片	白 色 片	流 紋 岩	
石庵丁	○																○	○	○	
石鎌								○	○	○	○									
圓刃石斧	○		○					○									○			
柱状片刃石斧								○												
扁平片刃石斧							○				○	○								
紡錘車																	○	○		
磨石・敲石	○				○															
砂岩								○	○											
石盾(磨製)					○	○														
石盤(打製)		○	○																	
スクレイパー																				
打製石鎌		○	○																	
磨製石劍								○			○	○								
磨製石鎌								○			○	○				○	○			
石戈																				

註: 石英玄=石英玄武岩、サヌカ=サヌカイト、粘ホル=粘板岩ホルンフェルス(頁岩質砂岩)、黒色粘=黒色粘板岩ホルンフェルス、黒泥水=黒色泥岩ホルンフェルス、赤紫泥=赤紫色泥岩、赤紫凝=赤紫色凝灰岩、片蛇紋=片状蛇紋岩、綠色片=綠色片岩、白色片=白色片岩

表12 吉野ヶ里遺跡出土の石器と石材

### (2) 石材からみた石器生産地

(1) で述べた石材名称の筆頭が一番多くみられる石材である。石庵丁は立岩遺跡のシンボルである赤紫色輝緑凝灰岩が目につくが色調でいうならば灰緑色が多い。選択された岩層は中生代白亜紀の関門層群中の古藍野亞層群で、凝灰質砂岩、頁岩、泥岩からなる。この層群の岩種を、近年の岩石研究者は輝緑凝灰岩ということは少ない。点数を数えたならば首位にせまるのは粘板岩ホルンフェルスである。この種は実測図でもみとれるように薄身で細片が多い。それは剥離しやすい性質と固くてもろい石材の特徴をしめしている。この種の石材は從来、下條信行氏は「頁岩質砂岩」とよんでいた。最近では能登原孝道氏による科学的な調査の末、小山内康人氏命名「董青石ホルンフェルス」という名称を提案している。その产地は長崎県対馬南部に分布する第三紀の対州層群下部層ホルンフェルス帯の可能性を示している。いずれにしても泥鰌が花崗岩類と接触して変成作用を受けたと考えられている材質に変わりないのである。石鎌もこの類が多い。

磨製石劍や磨製石鎌などの頁岩質砂岩は中生代の古藍野亞層群中の可能性をもつもので、石庵丁に多い第三紀の粘板岩ホルンフェルス(頁岩質砂岩)とは異なる。石戈は砂岩、赤紫色凝灰岩、黒色粘板岩である。伐採石斧は今山の石斧を象徴している玄武岩が主体である。ちなみに高模型石斧が佐賀県文化財報告書第173集で報告されている。片

刃石斧類は層灰岩が主体で黒色泥岩ホルンフェルスが次に多くみられる。紡錘車は片岩が多い。砥石は第三紀の砂岩である。剥片石器は当地を代表している伝統的な石材である佐賀県多久市のサヌカイトと佐賀県伊万里市腰岳の黒曜石である。腰岳の黒曜石は均質透明な漆黒色の自然ガラスで知られている。これと比較して発色がくろい黒灰色で透明度が低い黒曜石の打製石器が出土している（第25図-215）。これは長崎県佐世保市針尾島産とされている。他に磨石や敲石に花崗岩類が利用されている。

終じて伐採石斧は今山のカラン石玄武岩が圧倒している。そして石庵丁は凝灰質の砂岩、頁岩類と粘板岩ホルンフェルスが拮抗しているものの頁岩質砂岩製などの武器型や片刃石斧類も含めて古豊野亞層群からの選択が主体を占めている。これに対して剥片石器の主要石材であるサヌカイトと黒曜石を中心に片岩製の石庵丁、磨製石剣、柱状片刃石斧、紡錘車、石英玄武岩の石庵丁。蛇紋岩の伐採石斧。片状蛇紋岩の磨製石鐵。花崗岩類の磨石と敲石。第三紀の砂岩の砥石が散見出来た。これらはおそらく、サヌカイトや黒曜石などの採集地点周囲で容易に採取できたため利用された可能性を持つ石材である。つまりこれらの石器群はブランド製品である福岡市今山の今山産石斧、福岡県飯塚市笠置山の立岩産石庵丁、北九州市金剛山の石庵丁、片刃石斧、磨製石剣、石戈などの主要流通物産が大勢を占めている。一方、佐賀県多久市や伊万里市腰岳の伝統的な石材利用である剥片石器が示す割合は、点数を数えた場合5割をはるかに超えている。またこの他の在地製物産のありかたも興味深い内容が予測される。これら双方のあり方は今後の研究課題でもある。

各章で発掘調査の経緯や遺構説明そして土器と石器の事実報告を行った。それは膨大な資料から選択された資料であった。全体を網羅した上で組成や量的比較からの十分な検討は出来ないまま、以下に大略をまとめた。

### (3) 土器

時間軸として土器の相対的編年観は欠かせない。ここでは出土した土器のおよそを検討したうえ分類作業を行った。その基本は先が押し進めてきた北部九州の弥生時代の編年観である。中期土器の様式は城ノ越式、須玖Ⅰ式、須玖Ⅱ式で、遠賀川以西の須玖式土器編年を中心にしている。これまでに踏襲したままの状況であった土器群を、改めて中期土器の基準として主な土器群を不十分ながら列挙した。その変遷は城ノ越式をはじめに各須玖式を新古に二分し全5段階とした。その地域は筑後川以北のなかの佐賀県東部地域である。これらの土器群に伴い朝鮮無文土器の粘土盤を貼り付けた甕、牛角把手付甕が出土している。これはもじどおり吉野ヶ里遺跡と朝鮮半島との関わりを具体的に示すものとして象徴的である。他方、北部九州周辺の地域色を示す土器としては、瓢形土器、脚付無頭甕が出土している。そして遠賀川以東の須玖Ⅱ式にみられる跳ね上げ状口縁をもつ甕と口縁端部に突帯をもつ長頭甕も出土している。これは以下に述べる石器群と共に流通した関係を明確にする資料として重要である。これらは周辺がとりまく時代背景のなかで異国との関わりと北部九州の地域社会の相互関係を探る上で非常に貴重な資料である。石器の時代決定はこのような土器の年代観にたよった。

### (4) 大陸系磨製石器

石庵丁は外湾刃半月形が主である。断面形の形態は紡錘形か否かに二分される。つまり孔部分に厚みを持たせられるかがその性能を物語っているようである。具体的には立岩や金剛山周辺の石庵丁には孔と背部、孔と刃部の間の幅を観た場合、刃部側のほうがより狭い例もある。これは丁寧な使用とそれに対応できた耐久性を示している。石材により立岩遺跡、遠賀川中流域金剛山付近の辻田遺跡を中心に、粘板岩ホルンフェルスの新たな産地予測の可能性が示されている。石鎌は大小があり粘板岩ホルンフェルス製が多い。伐採石斧は平基が主体であるが円基も残っている。身の最大幅は7cmを越えるものが多いが幅と厚みの比率は3対1に近く扁平である。また厚みも最大幅付近にあり重心が刃部に置かれている。他に砂岩製や蛇紋岩製がある。北九州市の円筒形を主体とした高模型石斧は佐賀県文化財報告書第173集で報告されている。柱状片刃石斧は全体に細身で、刃部は偏刃で身部断面は薄鋸形である。小型の身部は直線状である。扁平片刃石斧は小型が主体で身の断面が長方形である。紡錘車は片岩で断面は長方形と台形に分

かれている。武器型は無茎の鉄剣型が多い。切先片や茎を持つ基部の多くは研ぎ直しで細くなっていることから、やはりその性能をよく示しているようである。石戈はやはり金剛山周辺産と模倣品がみられる。磨製石鎌は凹基式が多いが有茎式もみられる。石材からやはり金剛山周辺のものとみられる。片状蛇紋岩製の凹基式は金剛山周辺の石鎌と形態や大きさが類似している。砥石は第三紀の砂岩で多数出土しているが、詳細な検討はこれからである。打製石器は凹基式石鎌とスクレイバーが多く、有茎式や凸基式石鎌、石錐もみられる。これらは消耗品的に使用され使い捨て用品のように考えられる利器である。これも膨大な出土量が確認されているが、整理作業はこれからである。

さりとて佐賀県文化財報告書第163集の弥生時代前期編の石器群と比較した場合、質量ともに豊富な内容であり明らかに変化に富んでいる。生産と流通研究の好資料である。今後、第163集でまとめた前期資料と比較検討し、また中後期の継続整理作業のためにも本報告が基礎資料として活用されることを希望したい。

#### （参考文献）

- 梅崎恵司1999「福岡県北九州市の弥生時代石器の素材」『研究紀要』第13号 北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室
- 梅崎恵司2004「無文土器時代と弥生時代の石器生産」「文化の多様性と比較考古学』考古学研究会50周年記念論文集考古学研究会
- 七田忠昭編2007『吉野ヶ里遺跡—国営吉野ヶ里歴史公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書2』佐賀県文化財調査報告書第173集 佐賀県教育委員会
- 能登原孝道・中野伸彦・小山内康人2007「いわゆる「貞岩質砂岩」の原産地について」『九州考古学』第82号 九州考古学会
- 細川金也・梅崎恵司編2005『吉野ヶ里遺跡—田手二本黒木地区弥生時代前期環境出土の土器と石器』佐賀県文化財調査報告書第163集 佐賀県教育委員会

表13:田手二本黒木地区(316・318・346調査区)出土石器観察表

石器登録番号	探査番号	測定番号	状態(部位)	石材	法量(cm, g)			出土位置		時期	備考
					長	幅	厚	重量	地区・測量区		
<b>三面石刀</b>											
10063	第7面-1	1	完形	赤紫色泥岩	11.0	4.1	0.7	47.3	318区	SK732・SK733 P1092	中期前半
1466	2	1	完形	赤紫色泥岩	14.5	4.4	0.8	65.6	346区	P120	中期後半
9734	3	1	完形	赤紫色泥岩	16.7	4.8	0.7	102.0	318区	SD334上部	前期後半～中期初頭
1434	4	1	完形	砂岩	15.7	4.7	0.9	93.8	346区	SK338	後生
918	5	1	完形	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	14.5	3.95	0.6	48.0	318区	SH743	中期前半
1499	6	1	端部欠	赤紫色片岩	(12.0)	6.0	1.0	(105.2)	318区	SD333	中世
9860	7	1	端部欠	赤紫色泥岩	(9.45)	4.0	0.55	(34.8)	318区	SH686東半部	中期前半～中期初頭
1504・1505	8	1	完形	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	14.8	5.4	0.75	71.6	346区	SK686	中期後半(前輪屋人)孔部分接合完形
9733	9	1	約2/3	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	(10.9)	5.4	0.7	(53.2)	318区	SD336上部	前期後半～中期初頭
617	10	1	端部欠	灰色凝灰岩	(16.6)	8.55	0.65	(164.1)	318区	SK811	前期後半
9790	第8面-11	1	端部片	凝灰質粘板岩	(3.05)	(3.15)	0.5	(5.4)	318区	SD336-1～2レンシ間上層	前期後半～中期初頭
9853	12	1	端部片	凝灰岩	(2.35)	(4.2)	0.6	(7.2)	318区	SH591-1下げる	中期後半
4135	13	3	青部小片	石英玄武岩	(3.8)	(4.1)	0.7	(16.1)	314区	SD236上部	中期前半～中期後半
9838	14	3	青部小片	赤紫色泥岩	(4.9)	(4.0)	0.55	(19.6)	318区	SK886	中期前半
9854	15	3	刃部小片	凝灰質粘板岩	(5.65)	(3.9)	0.35	(13.0)	318区	SK724	古代
9858	16	3	刃部小片	凝灰質粘板岩	(6.6)	(4.6)	0.33	(30.9)	318区	SK731	中期前半
9778	17	3	端部片	凝灰質粘板岩	(3.7)	(2.7)	0.35	(5.0)	318区	SD336-1レンシ上層東	前期後半～中期初頭
4152	18	3	刃部小片	凝灰質粘板岩	(7.65)	(4.1)	0.4	(17.6)	314区	SK2411	中期前半
4155	19	3	刃部小片	凝灰質粘板岩	(7.9)	(3.6)	0.55	(18.5)	318区	SK2418	中期後半
9855	20	3	刃部小片	凝灰質粘板岩	(3.75)	(4.65)	0.6	(16.1)	318区	SK724	古代
4129	21	3	端部片	凝灰質粘板岩	(5.1)	(3.3)	0.8	(18.6)	318区	SD1831櫛標面	前期前半～中期前半
2250	22	3	端部片	赤紫色泥岩	(5.85)	(3.3)	1.3	(17.4)	318区	SD1902・SD2298上部切合	中期前半～中期後半
2253	23	3	端部片	凝灰質粘板岩	(6.95)	(4.3)	0.7	(25.4)	318区	SK2480下層	中期初頭
811	24	2	端部欠	赤紫色泥岩	(12.85)	3.9	0.75	(59.8)	318区	SK79	中期後半
9825	25	3	端部片	凝灰質粘板岩	(6.05)	(3.1)	0.45	(10.9)	318区	SK817等土	中期前半
9859	26	約2/3	凝灰質粘板岩	(10.5)	5.5	0.5	(54.4)	318区	SK886	中期前半	
9844	27	約1/2	砂岩	(7.3)	5.65	0.7	(34.6)	318区	SK717	中期前半	
9852	28	約2/3	凝灰岩	(9.85)	4.8	0.6	(46.6)	318区	SH591	中期後半	
1416	29	2	約1/3	石英玄武岩	(10.05)	6.4	1.0	(86.6)	346区	SD182上層	中世
810	30	2	約1/2	凝灰質粘板岩	(10.9)	7.6	0.4	(54.0)	318区	SK791	大型石舟丁
9813	31	3	刃部小片	凝灰質粘板岩	(5.5)	(6.65)	0.3	(15.6)	318区	SK565	中期後半～中期初頭 大型石舟丁
9806	32	3	刃部小片	凝灰質粘板岩	(4.6)	6.5	0.4	(19.5)	318区	SH686櫛出面	中期初頭～中期前半 大型石舟丁
9837	33	2	端部欠	赤紫色泥岩	(9.6)	4.4	0.9	(43.2)	318区	SH529	中期前半～中期後半 未製品
9838	34	2	端部欠	白色片岩	(8.6)	(8.2)	0.78	(83.3)	318区	SH529	中期前半～中期後半 未製品
2204	35	2	端部欠	石英玄武岩	(11.6)	5.5	1.0	(89.1)	314区	SD236未製品	中期前半～中期後半 未製品
9759	36	2	約1/3	凝灰質粘板岩	(6.6)	(5.9)	0.7	(37.6)	318区	SD336上層	前期後半～中期初頭 未製品
<b>圓刃石斧</b>											
1525	第9面-37	4	完形	玄武岩	17.1	7.64	4.55	985.8	346区	P304	
2211	38	4	基部片	玄武岩	(16.2)	7.5	5.25	(1060.0)	318区	SK2490	中期初頭
1519	39	4	基部片	玄武岩	(13.9)	(9.75)	4.3	(700.0)	346区	P68	
1445	40	4	基部片	細粒砂岩	(11.2)	(6.6)	(2.8)	(245.0)	318区	SD333	中世
9847	41	4	基部片	玄武岩	(10.35)	(6.65)	(4.6)	(515.0)	318区	SK718	中期前半
8894	42	4	基部片	玄武岩	(7.4)	(7.4)	(4.2)	(304.3)	318区	SK399	中期前半
2201	43	4	基部片	玄武岩	(10.2)	7.7	4.9	(921.5)	318区	SD236東邊	中期後半
9727	44	4	基部片	玄武岩	(10.7)	(6.4)	(4.4)	(411.4)	318区	SD336西部	前期後半～中期初頭
4154	第10面-45	7	完形	蛇紋岩	10.7	5.3	3.2	263.9	318区	SK2411	中期前半
10016	46	完形	細粒砂岩	11.2	6.6	3.1	316.8	318区	No.16		

9922	47		完形	安山岩	6.85	6.85	3.85	403.8	318区	SK809	中葉前半	
9795	48	7	基部片	顯微砂岩	(12.1)	6.4	3.2	(407.0)	318区	SH353	中期初頭～中期後半	刃部再加工
9785	48		基部小片	砂岩	(7.9)	(5.05)	(2.3)	(127.0)	318区			
9961	50	7	基部片	不明(堆積岩系)	(13.0)	(5.3)	(2.7)	(247.0)	318区	SD336-11-レ	東側20-21-24番	露葉巖系～中期初頭
2210	51	7	刃部片	顯微砂岩	(7.5)	6.0	2.8	(163.3)	318区	SK728	中期前半～中期後半	
9915	51	5	基部片	玄武岩	(7.05)	(6.9)	(4.05)	(206.9)	318区	SK399	中葉前半	
9929	53		基部片	玄武岩	(8.7)	(8.6)	(4.5)	(370.2)	318区	SH060-SH061合	中葉前半	
9796	54	5	基部片	玄武岩	(9.0)	(7.8)	(4.3)	(341.0)	318区	SH353上層	中期初頭～中期後半	
9791	55		基部小片	顯微砂岩	(8.5)	(4.85)	(2.0)	(76.4)	318区	SD336-1H-レ	東側1層	前期後半～中期初頭
4126	56	5	網狀片	玄武岩	(9.8)	(8.35)	(3.8)	(265.0)	318区	SK3475	中葉初頭	
9827	57		刃部片	砂岩	(9.0)	7.3	(3.6)	(361.4)	318区	SH096横出中	—	
2194	58	5	網狀片	玄武岩	(5.35)	8.0	(5.1)	(302.2)	318区	SD2524		
9724	59	5	刃部片	砂岩	(8.3)	8.1	(3.7)	(291.1)	318区	SD336西部	中世	
10024	60		刃部片	玄武岩	(9.85)	8.15	(4.6)	(532.0)	318区	P464埋土No.58		
10026	61		刃部片	玄武岩	(9.3)	6.6	(4.4)	(364.6)	318区	P2366.21		
9865	62		刃部片	玄武岩	(7.0)	7.85	(4.7)	(348.2)	318区	SH349	中期前半～中期後半	
9797	63	5	刃部片	玄武岩	(8.6)	8.0	(4.7)	(315.1)	318区	SH353上層	中期初頭～中期後半	
4146	第12區-44	6	刃部小片	玄武岩	(10.85)	(10.4)	(3.2)	(186.1)	318区	SD2507	中間後半	
4172	65	6	刃部小片	砂岩	(4.05)	(7.0)	(2.3)	(45.6)	318区	SK2525	中葉初頭	
9817	66		刃部片	砂岩	(4.45)	8.4	(1.8)	(54.4)	318区	SH096横出中	—	
9787	67		刃部小片	玄武岩	(5.0)	(4.25)	(3.1)	(76.0)	318区	SD336-1-2H-レ	東側上層	前期後半～中期初頭
9867	68	6	刃部小片	玄武岩	(4.7)	(5.1)	(0.75)	(243.0)	318区	SK328	後期後半	
9766	69		小片	玄武岩	5.25	2.55	0.75	11.6	318区	SD336上層	前期後半～中期初頭	スクリーバーに転用
9881	70	6	刃部小片	玄武岩	7.3	3.9	0.95	41.6	318区	SK346-2H-横出上面	—	スクリーバーに転用
2213	第13區-71	8	完形	層灰岩	12.6	2.65	3.1	201.2	318区	素振	—	
9941	73	8	刃部片	黑色泥岩ホルンフェルス	(12.85)	2.95	3.5	(223.0)	318区	SK708	中葉前半	
9855	74	8	刃部片	黑色泥岩ホルンフェルス	(11.4)	3.55	3.8	(276.0)	318区	SH416 No.1	前葉～中葉	
4137	第14區-77	9	基部片	層灰岩	(3.73)	(1.25)	2.7	(18.7)	318区	SD2396	中期前半～中期後半	
610	86	9	完形	層灰岩	5.25	1.2	0.8	9.9	318区	SD2274上層	/E	
1222	89	9	完形	層灰岩	6.8	1.2	1.25	18.9	318区	SD333	中世	/E
9812	90	9	完形	層灰岩	6.55	1.3	1.5	25.1	318区	SH091埋土	中期初頭～中期後半	/E
4142	第15區-21	10	基部片	黑色泥岩ホルンフェルス	(2.2)	3.3	2.3	(124.4)	318区	SD2368-01-レチ	中葉後半	
9839	92	10	刃部片	層灰岩	(7.05)	(1.9)	2.3	(54.2)	318区	SH641アゼ内	前期後半～中期初頭	
4131	93	10	刃部片	層灰岩	(7.4)	(1.75)	(3.1)	(52.2)	318区	SD1902	中葉前半	
9852	94	10	刃部片	黑色泥岩ホルンフェルス	(8.25)	3.2	3.5	(158.4)	318区	SK723	中葉前半	
2240	95	10	刃部片	黑色泥岩ホルンフェルス	(8.6)	(2.9)	(2.7)	(107.4)	318区	SH2405下層(底)	中期初頭～中期後半	
4183	96	10	刃部片	層灰岩	(5.25)	2.95	(5.15)	(142.4)	318区	SK345-2段下	前期後半～中期前半	
12641	97	10	基部片	砂岩	(10.1)	3.17	3.3	(191.3)	318区	SD567-レチ		
12462	98	10	基部片	層灰岩	(7.98)	2.97	(4.15)	(152.6)	318区	S-J82基礎	中期前半(深部)	
9846	第12區-72	8	刃部片	黑色泥岩ホルンフェルス	12.95	4.1	1.95	(196.6)	318区	SH575 No.9	中葉前半	
9860	第14區-75	9	基部片	層灰岩	(2.9)	2.7	0.8	(10.2)	318区	SK722 P1092上面	中葉前半	
9744	76	9	基部片	層灰岩	(4.1)	3.05	1.35	(33.2)	318区	SD336上層	前期後半～中期初頭	
1457	77	9	刃部片	層灰岩	(4.1)	1.54	0.6	(6.5)	318区	SD336上層	前期後半～中期初頭	
9850	78	9	刃部片	層灰岩	(3.7)	(1.4)	0.8	(7.0)	318区	SH686	中葉前半	
1500	79	9	基端部	層灰岩	3.09	1.30	0.66	(5.0)	318区	SK391	露葉末	
9882	80	9	刃部片	層灰岩	(2.6)	(2.1)	0.57	(5.0)	318区	SK381	中葉初頭	
4519	81	9	完形	層灰岩	4.0	1.75	0.85	12.8	318区	SH081	中葉前半	
2257	82	9	完形	層灰岩	4.7	2.20	0.7	14.9	318区	SK2420	中葉初頭	
1440	83	9	完形	褐色片岩	5.15	2.05	0.75	18.8	318区	SD792横出面	—	

9775	84	9	完形	墨灰岩	5.3	2.4	1.2	28.2	318区	SD336-1レンチ東上層	前期後半～中期初頭	
9802	85	9	約2/3	墨灰岩	5.2	(2.6)	0.9	(16.1)	318区	SH408底出層	—	
9731	86	9	ほぼ完形	綠色片岩	5.05	2.6	1.3	32.3	318区	SD336上層	前期後半～中期初頭	
9900	第16回-99	10		墨灰岩	7.2	4.2	1.5	53.0	318区	SK537埋土上層	前駆末～中期初頭	再加工品(未製品)
9845	100	10		墨灰岩	6.25	5.1	1.6	94.2	318区	SH575 No.4	中期後半	再加工品(未製品)
9784	101	10		綠色片岩	7.8	3.9	0.95	50.4	318区	SD336-1レンチチ東上層	前期後半～中期初頭	再加工品(未製品)
4414	102	10		墨灰岩	7.05	3.05	2.2	58.0	318区	SH403	中期初頭～中期後半	再加工品(未製品)
2252	103	10		墨色泥岩ホルンフェルス	(5.87)	3.87	1.03	(40.7)	318区	SK2455	中期前半	再加工品(未製品)
2227	104	10		墨灰岩	(4.25)	(4.2)	(1.6)	(30.9)	318区	SH2409	中期初頭	再加工品(未製品)
9856	105	10		墨灰岩	9.3	3.85	1.5	65.4	318区	SH416 No.4	中期前半	再加工品(未製品)
<b>三葉岩</b>												
9756	第17回-106	11	基部片	墨灰岩	(3.95)	(3.95)	0.6	(10.4)	318区	SD336上層	前期後半～中期初頭	
4165	107	11	基部片	墨灰質砂岩	(7.7)	(6.8)	0.9	(82.2)	318区	SK2463	中期初頭	
9782	108		刃部片	墨灰質頁岩	(6.5)	(4.6)	0.75	(25.4)	318区	SD336上層	前期後半～中期初頭	
9758	109		刃部片	墨灰質頁岩	(8.9)	(4.25)	0.6	(39.2)	318区	SD336上層	前期後半～中期初頭	
4427	110	11	刃部片	墨灰岩	(7.2)	(4.2)	1.1	(38.4)	318区	SH559	中期前半	
13630	111	11	刃部片	凝灰岩ホルンフェルス	(11.45)	4.5	0.7	(58.0)	318区	SD367-1レンチ内		
<b>鰐鱗岩</b>												
4149	第17回-112	12	完形	片岩	4.0	4.05	1.2	36.8	318区	SD2523上層	中期後半	
2305	113	12	完形	片岩	5.15	5.1	0.6	27.2	318区	SH4544	前期後半	
4140	114	12	約1/4	片岩	4.6	4.6	0.8	(12.4)	318区	SD2398	中期後半	
9892	115	12	約1/4	片岩	(3.6)	(3.4)	0.6	(9.0)	318区	SK397	中期前半	
9782	116	12	約1/2	片岩	(5.8)	(5.6)	0.6	(15.0)	318区	SD336-1レンチチ東上層	前期後半～中期初頭	
<b>石・隕石</b>												
2258	第18回-122	16	完形	火成岩系	8.2	6.85	5.4	434.2	318区	SK2425西側完形	中期初頭	
9875	123	16	下端部久	火成岩系	(10.75)	7.5	4.7	(550.0)	318区	SK371	中期後半	
9749	124	16	片面礫片	火成岩系	(8.7)	(9.25)	(2.9)	(321.2)	318区	SD336上層	前期後半～中期初頭	
4120	125	16	側面礫片	火成岩系	(9.9)	(3.2)	(5.9)	(203.8)	318区	SH2437底面	中期初頭	
4156	126	16	完形	火成岩系	7.8	7.1	5.5	454.1	318区	SK3419下層	前期後半～中期初頭	
4188	127	16	側面礫片	安山岩	(7.95)	(3.4)	(4.5)	132.9	318区	SK3484	前期後半	
4122	128	16	下端部久	火成岩系	(7.2)	4.5	3.3	(148.0)	318区	SH2437	中期初頭	
<b>苔綿(穿孔異)</b>												
9792	第19回-129	15	基端部久	墨綠岩	(2.15)	1.2	0.55	(1.2)	318区	SD336第1層	前期後半～中期初頭	
2302	130	15	上下端部久	サスカイト	(3.35)	1.5	0.3	(2.0)	318区	SH2437底面	中期初頭	
2222	131	15	基端部久	サスカイト	4.0	2.6	0.3	4.5	318区	SH2407	中期初頭～中期前半	
1507	132	15	先端部久	サスカイト	(4.2)	(2.2)	0.8	(5.6)	346区	SK346-SK348	中期前半	
13706	133	15	先端部久	サスカイト	3.64	2.25	1.35	10.9	318区	SD336上層	前期後半～中期初頭	
13794	134	15	先端部久	サスカイト	(4.9)	3.9	1.3	(13.6)	318区	SD336-1レンチチ東上層	前期後半～中期初頭	
9811	135	15	完形	花崗質砂岩	4.1	2.7	2.5	37.2	318区	SH391	中期初頭～中期前半	磨製
4158	136	15	先端部久	砂岩	12.5	5.3	4.0	(72.0)	318区	SK2419上層	前期後半～中期初頭	磨製, 花石に転用。
<b>二石</b>												
2229	第20回-137	20	下端部久	砂岩	(3.2)	0.8	0.6	(2.6)	318区	SH2427	中期初頭	仕上げ石。
10037	138	20	下端部久	砂岩	(6.9)	2.0	1.8	(34.4)	318区	P1301		中砾。
10015	139	20	下端部久	墨灰岩	(10.4)	1.45	1.2	(19.4)	318区	No.15		仕上げ砾。
2236	140	20	完形	砂岩	8.3	2.8	1.3	45.8	318区	SH2474	中期後半	中砾, 使用痕Clz。
2261	141	20	完形	砂岩	(7.1)	(3.5)	(2.5)	(68.8)	318区	SK2415	前期後半～中期初頭	中砾, 使用痕D(RD)。
9728	142	20	ほぼ完形	砂岩	5.8	3.75	2.3	(82.2)	318区	SD336 西部	前期後半～中期初頭	中砾。
2254	143	20	完形	砂岩	4.45	3.0	2.0	40.7	318区	SK2490下層	中期初頭	中砾。
2255	144	20	端部片	砂岩	(5.1)	(4.95)	2.3	(77.0)	318区	SK2490下層	中期初頭	粗砾。
4181	145	20	下端部久	砂岩	(4.4)	(6.05)	1.0	(43.6)	318区	SK2439	中期前半	粗砾。
9854	146	20	端部片	砂岩	(8.2)	8.0	2.3	(159.4)	318区	SH598Na.11	古砾	粗砾。

4141	147	20	端部片	砂岩	11.2	5.2	1.8	121.5	316区	SD2288-1トレンチ	中期後半	仕上げ面、使用痕RC。
2292	148	17	完形	砂岩	6.5	6.5	3.8	138.1	316区	SH2405上層	中期前半	粗底、使用痕D、合形。
2236	149	17	端部片	砂岩	(8.7)	(3.4)	(3.0)	(86.3)	316区	SK2527	中期前半	仕上げ面。
2199	150	17	下端部欠	砂岩	(9.05)	5.25	4.8	(295.7)	316区	SH2444上層	中期前半	粗底。
2364	151	17	端部片	砂岩	7.45	5.55	6.65	(294.5)	316区	SD1831層幅西上層	前期前半～中期前半	粗底。
4136	152	17	端部片	砂岩	(11.4)	3.6	2.3	(104.5)	316区	SD2287-2トレンチ内	中期前半	仕上げ面、使用痕RC1a。
2212	153	17	下端部欠	砂岩	(8.85)	4.1	3.15	(167.7)	316区	SH2400P458	中期前半	粗底。
1522	154	17	下端部欠	砂岩	10.1	4.5	2.7	(180.0)	316区	SK268上面	前期後半	粗底、使用痕C2a。
9842	155	17	下端部欠	砂岩	(11.25)	5.0	4.25	(338.0)	316区	SH541No.5	前期後半～中期初頭	粗底。
9854	第21回-156	16	端部片	砂岩	(11.15)	(10.35)	(2.8)	(397.2)	316区	SH538複出露	—	中层、使用痕E2L。
9857	157	18	完形	砂岩	9.85	6.55	4.7	288.2	316区	SK985	中期前半	粗底、使用痕E1a。
9841	158	18	上下端部欠	砂岩	(21.4)	(18.6)	1.4	(645.0)	316区	SH541No.3	前期後半～中期初頭	粗底。
9899	159	18	端部片	砂岩	(13.0)	5.5	(3.8)	(195.2)	316区	SK523埋土	中期前半	中层、使用痕C1a。
9895	160	18	端部片	砂岩	(10.05)	(9.75)	2.9	(358.7)	316区	SK530埋土上層	前期後半～中期前半	中层、使用痕D(RO)。
9751	161	19	端部片	砂岩	(10.2)	(5.7)	(5.1)	(420.6)	316区	SD338上層	前期後半～中期初頭	仕上げ面、使用痕G。
9846	162	19	完形	砂岩	23.4	5.3	4.5	72.0	316区	SK717	中期前半	粗底。
9729	163	19	下端部欠	砂岩	(13.4)	7.4	4.8	(755.0)	316区	SD336西部	前期後半～中期初頭	中层。
9861	164	19	下端部欠	砂岩	(11.0)	11.7	4.95	(600.0)	316区	SH686裏半部	中期前半	中层、使用痕RAZ。
2256	165	19	下端部欠	砂岩	(13.45)	11.0	4.6	(83.0)	316区	SK2451No.8	中期前半	中层、使用痕E1a。

### スクレイパー

15590	第22回-166	20	完形	黒曜石	1.6	3.3	1.0	10.2	316区	SH526上層	中期前半	
4074	167	20	完形	黒曜石	4.2	2.7	1.2	10.8	316区	SH2400	中期前半	
15814	168	20	完形	黒曜石	6.1	2.7	1.1	13.9	316区	SH520-括	中期前半	
15598	169	20	完形	黒曜石	4.75	4.1	1.0	13.6	316区	SK399	中期前半	
15782	170	20	完形	サスカイト	7.2	5.9	1.2	46.7	316区	SK327上層	前期末(浅谷1号入)	
15813	171	20	破損	サスカイト	7.3	4.2	1.4	(32.0)	316区	SH520-括	中期前半	
15588	172	20	完形	サスカイト	5.0	6.85	1.5	44.6	316区	SK564	前期末(浅谷1号入)	
15587	173	20	完形	サスカイト	8.55	6.4	2.3	104.2	316区	SK705	中期初頭	
5059	第23回-174	21	完形	黒曜石	3.15	1.55	0.8	4.2	316区	SH437	中期初頭	
5082	175	21	完形	サスカイト	3.45	2.9	0.9	5.8	316区	SH437	中期初頭	
5100	176	21	完形	黒曜石	2.7	2.1	0.85	8.0	316区	SH437	中期初頭	
4990	177	21	完形	サスカイト	2.8	4.0	1.0	12.6	316区	SH437	中期初頭	
4954	178	21	完形	サスカイト	2.4	5.8	1.0	16.4	316区	SH437	中期初頭	
4957	179	21	完形	サスカイト	4.85	4.0	1.4	22.8	316区	SH437	中期初頭	
5063	180	21	完形	サスカイト	5.0	4.2	1.2	26.0	316区	SH437	中期初頭	
4961	181	21	完形	サスカイト	5.75	5.2	1.6	45.0	316区	SH437	中期初頭	
4970	182	21	完形	サスカイト	4.0	2.1	1.0	7.1	316区	SH437	中期初頭	

### 打削石器

9871	第24回-183	25	圓部欠	サスカイト	1.4	(1.1)	0.25	(0.4)	316区	SK369	前期末～中期初頭	
9872	184	24	圓部欠	サスカイト	1.25	(1.25)	0.3	(0.4)	316区	SK369	前期末～中期初頭	
9893	185	24	圓部欠	サスカイト	(1.65)	(1.3)	0.3	(0.4)	316区	SK549-括	索良	
4416	186	24	先端部欠	サスカイト	(1.6)	1.55	0.35	(0.6)	316区	SH353	中期初頭～中期後半	
9858	187	24	完形	サスカイト	1.4	1.2	0.25	0.2	316区	SH671P3	古墳	
9748	188	24	完形	サスカイト	1.7	1.25	0.3	0.4	316区	SD338上層	前期後半～中期初頭	
9869	189	24	完形	サスカイト	1.65	1.5	0.35	0.6	316区	SK362	中期後半～中期末	
9843	190	24	完形	サスカイト	1.8	1.5	0.25	0.4	316区	SH757	中期前半	
4132	191	26	先端部欠	サスカイト	(1.7)	1.25	0.3	(0.4)	316区	SD2286上面	中期前半～中期後半	
442	192	26	完形	黒曜石	1.95	1.6	0.4	0.8	316区	SK3425	前期後半～中期前半	
2224	193	27	完形	サスカイト	1.9	1.5	0.4	0.8	316区	SH2427裏面	中期初頭	
1481	194	24	完形	サスカイト	2.0	1.4	0.5	1.0	346区	SD783	中世	
9895	195	25	圓部欠	黒曜石	1.7	1.25	0.3	0.4	316区	SK361	中期初頭	

1450	196	24	完形	サスカイト	1.7	1.5	0.35	0.6	346区	SK931	前期末～中葉初頭	
9857	197	24	脚部欠	黒曜石	2.0	(1.5)	0.4	(0.6)	318区	SH671	古墳	
8877	198	24	完形	サスカイト	2.0	1.75	0.3	1.0	318区	SK977	中期前半	
2251	199	24	先端部欠	サスカイト	(2.1)	1.6	0.3	(0.6)	316区	SH2404埋土	中期後半	
1421	200	24	完形	サスカイト	(2.1)	1.65	0.5	(1.6)	346区	SK938	衍生中期(運入多い)	
9857	201	24	完形	サスカイト	2.33	1.75	0.37	1.0	318区	SK726	中期後半	
1420	202	24	完形	サスカイト	2.5	1.65	0.35	1.2	346区	SD336上層	前期後半～中葉初頭	
2225	203	24	脚部欠	サスカイト	1.9	1.5	0.35	(0.7)	316区	SH2444P635	中期前半	
1799	204	24	脚部欠	サスカイト	2.2	(1.25)	0.4	(1.0)	318区	SH368換出面	中期初頭～中期前半	
10023	205	24	完形	サスカイト	2.35	1.3	0.35	0.8	318区	No.52		
9891	206	25	脚部欠	黒曜石	2.5	(1.5)	0.25	(0.8)	318区	SK977	中期前半	
10019	207	24	完形	黒曜石	2.15	1.3	0.5	1.0	318区	No.37		
1433	208	25	完形	黒曜石	2.3	1.5	0.4	1.0	346区	SK935	中期後半	
9866	209	25	脚部欠	黒曜石	(2.5)	(1.6)	0.35	(1.2)	318区	SK927上層	前期末(須致立運入)	
2223	210	27	脚部欠	サスカイト	(2.8)	(1.85)	0.35	(1.5)	316区	SH2437直面	中期初頭	刃部磨刃状
9840	211	25	先端・脚部欠	サスカイト	(2.3)	(1.45)	0.3	(0.6)	318区	SH541	前期後半～中葉初頭	
13742	212	24	完形	黒曜石	2.14	1.77	0.29	1.0	318区	SK708	中期前半	
1427	213	25	脚部欠	黒曜石	(2.15)	(1.95)	0.35	(1.0)	346区	SK904	前期末	
9834	214	25	脚部欠	黒曜石	2.3	(1.8)	0.45	(1.4)	318区	SH529換出面	—	
9730	第25回-215	26	先端部欠	黒曜石	(1.95)	1.5	0.4	(1.0)	318区	SD336上層	前期後半～中葉初頭	針尾島産黒曜石か
9825	216	24	脚部欠	黒曜石	2.2	(1.8)	0.35	(1.0)	318区	SH680-SH681合宿	中期前半	
9859	217	24	脚部欠	黒曜石	1.95	(1.95)	0.45	(1.2)	318区	SH684	中期前半	
1458	218	25	先端部欠	サスカイト	(2.6)	1.9	0.4	(1.0)	346区	SK931	前期末～中葉初頭	
9746	219	25	先端・脚部欠	サスカイト	(2.2)	(2.0)	0.35	(1.0)	318区	SD336上層	前中期後半～中葉初頭	
2196	220	27	先端・脚部欠	サスカイト	(2.5)	(2.6)	0.3	(1.1)	316区	SH2437中央ビット直面小穴	中期初頭	
4478	221	24	先端部欠	サスカイト	(2.4)	1.85	0.4	(1.6)	318区	SK939	中期前半	
4491	222	23	完形	黒曜石	2.4	1.8	0.35	1.4	318区	SH680	中期前半	
2208	223	26	脚部欠	黒曜石	1.9	(1.85)	0.6	(2.1)	316区	SH2440	中期初頭	
9835	224	24	先端・脚部欠	サスカイト	(2.4)	1.5	0.4	(1.1)	318区	SH529	中期前半～中期後半	
1429	225	24	完形	サスカイト	2.6	1.85	0.4	1.6	346区	SK987	中期初頭	
13751	226	24	先端・脚部欠	黒曜石	(2.4)	(2.05)	0.43	(1.2)	318区	SK923埋土上層	中期前半	
1425	227	24	完形	黒曜石	(2.65)	2.05	0.5	1.6	346区	SK975	中期初頭	
4138	228	26	脚部欠	サスカイト	3.1	(2.1)	0.6	(2.1)	318区	SD2246	中期後半	
9773	229	26	脚部欠	サスカイト	(3.5)	(1.7)	0.4	(1.8)	318区	SD336-1引レシテ裏	前中期後半～中葉初頭	
1437	230	24	完形	サスカイト	2.95	1.85	0.5	2.0	346区	SK912	中期前半	
1456	231	24	完形	サスカイト	3.05	1.85	0.55	1.8	346区	SK973	中期後半	
9834	232	24	完形	サスカイト	3.0	2.1	0.6	3.4	318区	SK993	中期前半	
9829	233	24	完形	黒曜石	2.5	2.2	0.4	1.2	318区	SH681埋土	中期前半	
10022	234	26	完形	サスカイト	2.5	2.5	0.5	2.0	318区	No.50		
9745	235	26	完形	サスカイト	2.7	2.55	0.5	2.4	318区	SD336上層	前中期後半～中葉初頭	
1465	第26回-236	25	基礎部欠	サスカイト	(1.8)	0.9	0.4	(0.6)	346区	SK931	前期末～中葉初頭	
9819	237	25	基礎部欠	サスカイト	(1.95)	(0.8)	(0.3)	(0.4)	318区	SK989-一段下げる	中期前半	
9863	238	25	基礎部欠	サスカイト	(2.6)	1.0	0.35	(1.0)	318区	SH749サブレシテ	中期前半～中期後半	
9850	238	25	先端・基礎部欠	黒曜石	(2.75)	1.15	0.5	(1.4)	318区	SK939	中期初頭	
9783	240	25	先端・基礎部欠	サスカイト	(2.0)	0.9	0.4	(1.0)	318区	SD336-1引レシテ裏2層	前中期後半～中葉初頭	
9747	241	25	完形	黒曜石	2.9	1.0	0.35	1.0	318区	SD336上層	前中期後半～中葉初頭	
10029	242	25	完形	黒曜石	3.25	0.95	0.55	1.6	318区	P391		
4445	243	25	完形	黒曜石	2.75	1.25	0.5	1.6	318区	SH559	中期前半	
4164	244	25	完形	黒曜石	3.0	1.25	0.6	2.0	318区	SK2457	中期前半	
9844	245	25	完形	サスカイト	3.4	0.9	0.35	1.2	318区	SH575	中期前半	両側縫に研磨面取り加工
1518	246	25	完形	サスカイト	3.6	1.1	0.4	1.6	346区	SK949	前中期(板1歩行)	

841	247	25	基礎部欠	サスカイト	3.8	1.25	0.4	2.0	316区	SK2419中層	前期後半～中期初頭	
985	248	25	先端部欠	サスカイト	(3.7)	1.35	0.46	(2.0)	316区	SH529	中期前半～中期後半	
972	249	25	基礎部欠	サスカイト	(3.7)	1.55	0.55	(3.2)	316区	SD236-11+レンチ上層	前期後半～中期初頭	
991	250	25	基礎部欠	サスカイト	(4.15)	1.25	(0.4)	(1.6)	316区	SK565	前期後半～中期初頭	
2303	251	25	基礎部欠	サスカイト	(4.7)	1.15	0.45	(2.7)	316区	SH2405下層(底)	中期前半	
2241	252	25	完形	サスカイト	4.95	1.45	0.6	3.4	316区	SK2451	中期前半	
4171	253	25	完形	サスカイト	3.5	1.2	0.55	2.1	316区	SK2503	中期初頭	
2226	254	27	完形	サスカイト	3.85	1.25	0.7	2.5	316区	SH2437	中期初頭	
2217	255	25	先端部欠	サスカイト	(4.1)	1.25	0.4	(1.9)	316区	SK2419中層	前期後半～中期初頭	
18016	256	25	基礎部欠	サスカイト	(5.9)	1.4	0.45	(3.6)	316区	No.35		
18010	257	25	側縫部欠	サスカイト	3.67	(1.8)	0.9	(4.6)	316区	No.1		先端部は残存
1449	258	25	完形	サスカイト	4.85	2.3	0.7	4.8	346区	検出面	—	
9808	259	25	先端部欠	蜜蠻石	3.25	1.5	0.6	2.0	316区	SH091	中期初頭～中期前半	
2228	260	27	基礎部欠	サスカイト	(2.6)	0.9	0.6	(1.0)	316区	SH2437	中期初頭	
9807	261	25	基礎部欠	サスカイト	(2.0)	1.5	0.8	(1.8)	316区	SH091	中期初頭～中期前半	
2200	262	23	完形	サスカイト	2.5	1.55	0.65	1.8	316区	SK2509	中期初頭	
1478	263	25	先端・側縫部欠	サスカイト	(2.6)	(1.5)	0.5	(1.8)	346区	SH821	中期後半	
13749	264	25	基礎部欠	蜜蠻石	(5.44)	1.83	0.7	(6.4)	316区	SK864埋土	前期前半(底迄)古	側縫部と先端部に研磨面あり
2220	265	23	完形	サスカイト	5.4	2.4	1.0	13.4	316区	SH407	中期初頭～中期前半	
13771	266	23	先端部欠	サスカイト	(4.72)	1.82	1.03	(9.5)	316区	SH508	中期前半	
1443	267	26	完形	蜜蠻石	2.55	2.15	0.35	1.0	316区	SK003		
1472	268	23	完形	サスカイト	3.1	2.5	1.1	5.8	346区	SK832	前期末～中期初頭	
2218	269	23	完形	サスカイト	3.4	2.0	0.7	4.2	316区	SK2419中層	前期後半～中期初頭	
<b>その他(不明)</b>												
1432	第17回-117	14	完形	不明(複数個体)	8.3	2.85	0.35	13.0	346区	SK034	中期前半	磨切石器、磨削石器未製品か、
4127	118	14	完形	不明(複数個体)	6.0	3.4	2.7	72.1	316区	SK2487	中期前半	墨りか
1906	119	13	完形	緑色片岩	7.6	7.9	1.0	91.0	316区	SK548埋土	中期初頭	新器章未製品か
9897	120	13	完形	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	11.1	9.4	0.4	73.8	316区	SK531埋土	中期初頭	素材
4166	121	13	完形	凝灰質砂岩	18.1	9.85	1.3	280.9	316区	SK2464	前期後半	素材

表14:吉野ケ里遺跡出土武器形石製品一覧表

<b>鑿製石剣</b>													
1140	第21回-270	33	基部片	砂質泥岩	(8.1)	3.0	1.4	(32.6)	TDN- I - 244B	SD208中-下層	中期前半～古墳		
3116	271	33	基部片	砂岩	(8.3)	(2.6)	0.8	(14.2)	YOK-VI	P779	穿孔、孔部分で滑り、		
1673	272	33	基部片	白色粘板岩	(9.9)	3.3	1.2	(57.3)	YOK-VI	229B	櫛状	—	
552	273	33	基部片	凝灰質粘板岩	(9.8)	3.8	1.45	(79.0)	TDN- II - 340B	SD003	後期前半～後期中層		
4087	274	33	基部片	黑色粘板岩	(7.2)	(4.0)	1.4	(58.7)	YOK-VI	表層	—		
637	275	33	基部片	(21.85)	4.1	1.8	(189.4)	YOK-VI	185B	P28			
515	276	33	基部片	凝灰質粘板岩(駆野)	(17.7)	4.3	1.5	(181.9)	TDI-I	No.153+レンチ			
5602	277	33	基部片	凝灰質粘板岩	(15.6)	4.1	1.7	(126.0)	TDN- III - 356B	西包古墳3段目			
1841	278	33	基部片	凝灰質粘板岩(駆野)	(13.6)	4.15	1.85	(103.1)	YOK- VI	表層	—		
13924	279	33	基部片	凝灰質粘板岩	(12.1)	6.07	0.64	(96.0)	TDI- I - 378区	SD0275中層			
1	280	37	柄部	墨玉岩	(13.7)	7.25	0.86	(92.2)	SRO	SH889	中期初頭	有柄式	
3036	第29回-281	32	身部片	凝灰質砂岩	(3.7)	(2.25)	(0.36)	(3.0)	YOK-VI	187B	SK1913		
540	282	32	身部片	理質變岩	(4.0)	(2.15)	(0.6)	(8.4)	YOK-V	No.55+レンチSD001-1番			
2755	283	32	身部片	凝灰質粘板岩	(3.9)	(2.6)	(0.63)	(7.0)	YOK-V	211区	SD1013-27セラ	中期前半～後期後半	
5497	284	32	身部片	頁岩	(2.8)	(0.1)	(0.93)	(8.4)	YOK-V	316B	SD2525	中期初頭	
4091	285	32	身部片	黑色粘板岩	(2.9)	(3.2)	1.1	(10.2)	YOK-VI	表層	—		
541	286	32	身部片	凝灰質粘板岩	(2.1)	(3.5)	0.4	(6.0)	YOK-V	No.55+レンチSD001-15番			
82	287	32	身部片	凝灰質粘板岩	(3.8)	3.3	0.8	(14.4)	YOK-V	SK1008			
226	288	32	身部片	凝灰質粘板岩	(3.5)	(3.55)	(0.6)	(12.4)	TDN- II	SK107			

456	288	32	舟部片	凝灰質粘板岩	(5.15)	3.05	0.55	(9.6)	YNG-V	SK0886(AN-88)	中期初頭～中期前半	
229	290	32	舟部片	鐵鈣鈣砂岩	(5.75)	(2.85)	(1.6)	(22.4)	TDN-II	SD068		
491	281	32	舟部片	凝灰質粘板岩	(4.6)	(2.95)	0.65	(14.0)	吉種	No.124Hレンチ裏層		
3815	292	32	舟部片	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	(4.9)	4.2	1.05	(24.6)	316区	SK096提出中	中期前半～中期後半	
57	293	32	舟部片	凝灰質粘板岩	(4.1)	(4.35)	(0.65)	(22.0)	SSO	表層	—	
4150	294	32	舟部片	凝灰質粘板岩	(3.3)	3.7	0.7	(12.6)	316区	SD2507Hレンチ内	中期後半	
1718	295	32	舟部片	凝灰質粘板岩	(4.6)	(2.8)	0.7	(12.4)	YOK-VI	SH1304		
13444	296	32	舟部片	青紫色泥岩	(6.0)	(3.7)	1.4	(40.0)	346区	SD790下層		
386	297	32	舟部片	細粒砂岩(礫岩)	(5.95)	(3.95)	(0.8)	(31.6)	YOK-III	SD0601-57ゼ北	後期後半	
2751	298	32	基部片	凝灰質粘板岩	(7.6)	3.2	0.75	(31.5)	YOK-V	SK1699F-Hレンチ裏層上部	中期後半	
457	299	32	舟部片	凝灰質粘板岩	(5.45)	(3.95)	(0.5)	(18.0)	YNG-V	表層	—	
9672	300	32	舟部片	凝灰質粘板岩	(6.2)	4.7	0.7	(29.4)	YOK-2E 350区	横出面	—	
285	301	32	基部片	凝灰質粘板岩	(7.0)	(4.95)	0.6	(54.6)	YOK-II	SD0051上層		
2822	302	32	基部片	凝灰質粘板岩	(7.6)	4.0	0.8	(44.3)	YNG-V	P-677(AO-95)		
467	303	32	基部片	泥色泥岩ホルンフェルス	(7.1)	4.65	1.6	(94.0)	YNG-V	SK0886	中期初頭～中期前半	
673	304	34	基部片	泥色泥岩ホルンフェルス	(4.35)	3.9	0.8	(16.6)	TDN-II 222区	No.276		
668	305	34	基部片	凝灰質粘板岩	(2.85)	(2.85)	(0.8)	(6.6)	TDN-II 221区	SD003	後期前半～後期中層	
2807	306	34	基部片	凝灰質粘板岩	(6.6)	3.3	0.4	(18.3)	YNG-V 304区	SH1183	後期後半	
1490	307	34	基部片	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	(6.5)	4.0	0.7	(25.1)	346区	SD784(中世漢)横出面	—	
489	308	34	基部片	凝灰質粘板岩	(7.1)	3.1	0.8	(24.8)	SPO	SH077		
1816	309	34	基部片	凝灰質粘板岩	(7.0)	(4.6)	0.8	(30.3)	TDN-II	SK240	中期初頭	
431	310	34	基部片	凝灰質粘板岩	(5.5)	4.05	0.65	(23.6)	TDN-I	No.7Hレンチ北側露込		
1784	311	34	基部片	凝灰質粘板岩	(4.6)	2.6	0.85	(14.6)	YOK-V	ST1001-SD1011		
236	312	34	基部片	凝灰質粘板岩	(8.2)	3.6	0.7	(22.2)	YOK-III	AJ-97-11		
745	313	34	基部片	凝灰質粘板岩	(7.25)	(4.2)	1.1	(38.0)	YOK-V 216区	包含層		
819	314	34	基部片	凝灰質粘板岩	(8.5)	3.05	0.95	(34.6)	YOK-VII 310区	横出面	—	
1316	315	34	基部片	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	(8.6)	3.2	1.0	(45.6)	346区	P305		
385	316	34	基部片	凝灰質粘板岩	(10.2)	4.05	0.7	(43.0)	YNG-V	上段北側露出面	—	
333	317	34	基部片	凝灰質粘板岩	(7.9)	3.95	0.8	(37.6)	YNG-V	SD0881		
83	318	34	基部片	凝灰質粘板岩	(9.95)	3.85	1.1	(57.0)	YOK-V	ST1001 D区		
1520	第30區-319	30	切先	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	(2.3)	(2.6)	0.5	(4.1)	346区	SK973	中期後半	
4054	320	30	切先	泥色粘板岩	(3.1)	(2.6)	0.6	(3.6)	YOK-VI	SB1311 No.2		
786	321	30	切先	珪質灰岩	(2.95)	(2.4)	0.65	(5.2)	YOK-VII 185区	包含層		
13413	322	30	切先	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	(3.6)	(2.8)	0.53	(6.2)	346区	SD790下層		
1338	323	30	切先	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	(4.2)	(2.1)	0.67	(6.3)	316区	横出面	—	
325	324	30	切先	凝灰質粘板岩	(4.2)	(2.95)	0.7	(7.4)	TDN-II	SK261		
827	325	30	切先	珪質灰岩	(4.6)	(2.5)	0.6	(6.4)	YNG-I	S.0009箱内上部(AO-92)	前期末	埋蔵出土
719	326	30	切先	凝灰質粘板岩	(3.6)	(1.8)	0.35	(3.1)	YOK-VII	No.185Hレンチ包含層		
13676	327	30	切先	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	(5.6)	2.8	0.9	(14.4)	316区	SD560Hレンチ	中性	
826	328	30	切先	凝灰質粘板岩	(5.7)	(3.4)	0.75	16.7	SYT	SK0229箱内中央柱附近	中期中葉(須波式)	埋蔵出土
727	329	30	切先	凝灰質粘板岩	(5.1)	(3.1)	0.35	(2.7)	YOK-VII 185区	表層	—	
425	330	30	切先	凝灰質粘板岩	(5.5)	(2.25)	0.35	(8.6)	吉種	SK04-22レンチ		
922	331	30	切先	凝灰質粘板岩	(5.15)	(2.85)	0.65	(9.6)	YOK-VII	SD1886内込カン穴(1)		
58	332	30	先端膨張	片岩	(5.6)	2.8	0.58	(13.1)	SSO	SH017		
230	333	30	切先	泥色泥岩ホルンフェルス	(9.15)	(3.6)	0.55	(13.6)	TDN-II	SK0247-SK0248進入		
468	334	30	切先	泥色粘板岩	(7.6)	(2.75)	0.7	(16.4)	SYT	SB0669 No.5上面		
4076	335	30	切先	岩岩	(7.3)	(2.4)	0.7	(15.9)	YOK-V	SJ178埋土	埋蔵出土	
10659	336	30	切先	泥色粘板岩	(6.6)	(3.3)	0.68	(17.3)	316区	SK563		
9851	337	30	切先	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	(6.7)	(2.8)	0.5	(13.2)	316区	SH580	中期前半	
808	338	31	切先	凝灰質粘板岩	(7.0)	(3.3)	0.65	(21.8)	316区	SK801	中期後半(須波式)	埋蔵出土
334	339	31	切先	凝灰質粘板岩ホルンフェルス	(10.5)	3.15	0.7	(31.6)	TDN-II	表層	—	

1471	340	31	切先	基底質粘板岩ホルンフェルス	(9.6)	(3.6)	1.06	(41.9)	346区	SK854上層			
825	341	31	切先	赤紫色泥岩	(9.2)	(2.8)	(3.1)	(36.4)	YOK-VII	SR0306			
1714	342	31	切先	基底質粘板岩	(8.6)	(3.1)	0.5	(22.7)	YOK-VI	SH146内	後期		
844	343	31	切先	巻岩	(9.1)	(3.5)	0.9	(40.0)	YOK-V	SJ740	中層前半	複数出土	
1503	344	31	切先	基底質粘板岩	(7.55)	(3.88)	0.99	(28.1)	346区	SK854中出層	—		
492	345	31	切先	墨色頁岩	(7.55)	(2.9)	(1.3)	(29.4)	YOK-VI	No.121トレンチ裏側褐色土			
679	346	31	切先	墨色粘板岩ホルンフェルス	(10.2)	(5.15)	0.7	(51.6)	TDN-II 222区	3グリッド4層			
530	347	31	切先	基底質粘板岩	(10.1)	(4.7)	0.8	(32.2)	YNG-V	SD0025-8-97ゼ	中期後半～後期		
469	348	31	基端部欠	基底質粘板岩	(11.95)	3.7	0.65	(38.2)	SYT	SH1000			
337	349	31	完形	基底質粘板岩	11.55	3.5	0.65	38.0	TDN-II	SD003上層	後期前半～後期中場		
1479	350	31	先端部欠	基底質粘板岩ホルンフェルス	(10.88)	3.09	0.64	(27.2)	346区	SK854の後出層	—		
1889	351	31	基端部欠	基底質粘板岩	(14.2)	5.3	0.52	(87.2)	OTI 311区	墨色粘質土包含層	漆孔		

### 標記石壁

778	第31回-352	35	基端部欠	基底質粘板岩	(3.95)	1.38	0.37	(2.3)	YOK-VI	192区	SD1981-A-レシテ南半4層			
785	353	35	完形	基底質粘板岩	3.2	1.7	0.2	1.5	318区	模出層	—			
3212	354	35	完形	灰色頁岩	2.6	1.9	0.2	1.7	YOK-VI	P1033の模出層	—			
272	355	35	完形	蛇紋岩	2.8	1.9	0.3	2.7	YOK-VI	SB1870 No.2				
9847	356	35	完形	巻岩	(2.8)	(2.4)	0.25	(2.0)	318区	SH75	発生中期			
9017	357	35	完形	蛇紋岩	4.4	2.0	0.35	3.8	YOK-VI	SP0720	発生中期	複数出土		
821	358	35	完形	基底質粘板岩	4.0	1.8	0.2	1.8	YOK-VI	SJ248	中期後半(立岩伴行)	複数出土		
1736	359	35	完形	基底質粘板岩	3.6	1.5	0.25	1.7	YOK-VI	SH1035	中期前半			
338	360	35	先端部欠	凝灰質粘板岩	(3.25)	1.6	0.2	(1.3)	YOK-V	ST1801 D-2トレチ下				
824	361	35	完形	基底質粘板岩	4.94	1.37	0.35	2.9	不明	不明	—			
820	362	35	完形	墨色粘板岩	5.1	1.45	0.4	3.3	YNG-V	SP1057	発生中期	複数出土、中期中頃か。		
903	363	35	完形	灰色頁岩	5.2	1.8	0.3	3.7	YOK-VI	187区	P20 包含層中か			
872	364	35	基端部欠	細粒砂岩(礁岩)	(5.1)	1.3	0.5	(3.8)	YOK-VI	BHレシテ裏面中央	—			
1320	365	35	基端部欠	片狀變紋岩	(3.9)	(1.5)	0.22	(1.9)	318区	模出層	—			
2217	366	35	基端部欠	基底質粘板岩	(3.9)	(1.9)	0.4	(3.6)	YOK-VI	SD1102-18アゼ-アルシテ間	後期後半			
1717	367	35	基端部欠	變異變岩	(3.3)	(1.5)	0.3	(3.9)	YOK-VI	SH1291内	中期後半			
9865	368	35	基端部欠	綠色片岩	(3.05)	(1.7)	0.18	(1.2)	TDN-II	356区	中包含層2段目			
4218	369	35	基端部欠	蛇紋岩	(3.2)	(1.7)	0.26	(1.4)	318区	SK76 No.4	中期前半			
3143	370	35	基端部欠	凝灰質粘板岩	(3.8)	2.1	0.21	(3.1)	YOK-VI	P2582周辺				
4175	371	36	基端部欠	泥岩ホルンフェルス	(3.1)	1.9	0.6	(3.8)	318区	模出層	—			
1385	372	36	基端部欠	基底質粘板岩	(3.0)	(2.0)	0.05	(0.6)	TDN-II	268区	SD415	中期前半		
2763	373	36	基端部欠	細粒砂岩	(3.2)	(1.5)	0.25	(1.6)	YOK-VI	SX1042 AF-74				
12433	374	36	基端部欠	基底質粘板岩	(2.85)	(1.3)	0.25	(1.2)	346区	模出層	—			
3141	375	36	先端・基端部	理質帶岩	(3.5)	(1.4)	0.29	(1.9)	YOK-VI	P2531				
221	376	36	先端・基端部	基底質粘板岩	(3.7)	1.2	0.3	(1.5)	YOK-VI	No.1851-レシテ包含層				
1945	377	36	先端・基端部	巻岩	(4.4)	0.9	0.5	(3.1)	TDN-II	323区	表層(巻岩面)	—		
9888	378	36	先端・基端部	細粒片岩	(5.0)	(1.7)	0.3	(4.1)	318区	SK322 No.3	中期初期			
239	379	36	ほぼ完	理質帶岩	(5.7)	1.05	0.4	(4.9)	YOK-VI	SJ3790	中期中葉(湧泉式)	複数出土		
10011	380	36	ほぼ完	凝灰質粘板岩	4.5	1.8	0.4	(4.5)	318区	No.8	中央で複合			
730	381	36	破壊	片狀變紋岩	(3.15)	1.7	0.2	(2.1)	YOK-VI	No.1851-レシテ包含層				
10021	382	36	先端部欠	細粒砂岩	(2.5)	(2.0)	0.2	(1.5)	318区	No.29				
1390	383	36	先端部欠	墨色粘板岩	(3.4)	(2.0)	0.2	(2.2)	TDN-II	268区	模出層	—		
1730	384	36	完形	基底質粘板岩	3.8	3.0	0.3	3.0	YOK-VI	中段人口西SH切合部				
930	385	36	完形	凝灰質粘板岩	4.61	2.49	0.34	4.7	YOK-V	204区	トレンチ最北 東外レシテ内			
4055	386	36	基端部	基底質粘板岩	(5.2)	3.4	0.9	(16.1)	YOK-VI	SD1122	発生後期			

### 三之

93	第31回-387	36	茎剖片	巻岩	(7.6)	(6.3)	1.7	(88.7)	YNG-V	AR-92-2 模出層	—		
223	388	36	茎部小片	巻岩	(4.0)	(5.65)	(1.02)	(29.3)	TDN-II	表層	—		

247	389	36	茎部片	赤紫色凝灰岩	(8.0)	(8.6)	(2.2)	(130.0)	TDR-I 226区	SD0025		
2270	390	36	刃部小片	黑色粘板岩	(4.8)	(6.1)	1.3	(53.6)	YOK-II 316区	横出面	—	
<b>打製石器(塊茎出土)</b>												
3167	391	28	完形	黑曜石	2.4	1.0	0.5	1.2	YOK-II	SJ124基坑内	中期前半(淡田式)	塊茎出土
323	392	28	完形	サスカイト	3.1	0.9	0.5	1.2	YOK-II	SJ733		塊茎出土
2761	393	28	完形	黑曜石	3.4	1.4	0.8	2.0	YOK-V	SJ124基坑内	中期前半(淡田式)	塊茎出土
936	394	28	完形	サスカイト	4.0	1.6	0.9	4.6	YOK-II	SJ073基坑内	中期中葉(淡田式)	塊茎出土
843	395	28	片断欠	サスカイト	2.1	(1.5)	0.45	(1.0)	YOK-V	SJ438		塊茎出土
899	396	28	完形	黑曜石	1.8	1.6	0.55	1.2	YOK-II	SJ140堆内	中期前半	塊茎出土
311	397	28	先端部欠	黑曜石	(2.0)	(1.55)	0.4	(1.0)	YOK-II	SJ1716		塊茎出土
834	398	28	片断欠	黑曜石	(2.3)	(1.2)	0.4	(1.0)	YNG-II	SP267		塊茎出土
835	399	28	ほぼ完	黑曜石	(1.75)	1.8	0.35	(1.0)	YOK-II	SJ1405堆内埋土		塊茎出土
831	400	28	ほぼ完	黑曜石	(2.2)	(1.45)	0.35	(1.0)	YNG-II	SJ665人骨片の中		塊茎出土
838	401	28	先端部欠	サスカイト	(2.45)	(1.55)	0.5	(1.2)	YOK-VI	SJ073基坑内	中期中葉(淡田式)	塊茎出土
842	402	28	片断欠	黑曜石	(2.65)	(1.55)	0.5	(1.2)	YOK-V	SJ1133堆内		塊茎出土
875	403	28	完形	サスカイト	2.4	1.7	0.8	1.8	YOK-V	SJ1740堆内	中期前半	塊茎出土
829	404	28	ほぼ完	サスカイト	(2.75)	(1.95)	0.55	(2.0)	YOK-II	SP282		塊茎出土
829	405	28	先端部欠	サスカイト	(3.0)	2.0	0.65	(3.0)	YOK-VI	SJ1415堆内埋土		塊茎出土
830	406	28	完形	サスカイト	3.4	2.2	0.8	4.2	YOK-IV	SJ206	中期中葉(淡田式)	塊茎出土
7158	407	28	完形	サスカイト	6.4	1.6	0.65	6.8	YNG-II	SJ267	中期後半(立岩式)	塊茎出土
<b>S-J0312-1 塵出土物</b>												
3186	第313回-408	29	基礎部欠	サメの骨(マジロザメ科)	3.7	1.7	0.2	(1.0)	YOK-II	SJ0312	中期後半(立岩式)	牙體
3183	409	29	脚部欠	黒曜石	(2.0)	(1.5)	0.4	(0.8)	YOK-II	SJ0312	中期後半(立岩式)	打製石器
3184	410	29	完形	サスカイト	2.1	1.4	0.3	0.8	YOK-II	SJ0312	中期後半(立岩式)	打製石器
3180	411	29	脚部欠	サスカイト	3.4	2.3	0.4	2.4	YOK-II	SJ0312	中期後半(立岩式)	打製石器
3181	412	29	完形	粘板岩	2.5	1.8	0.2	0.8	YOK-II	SJ0312	中期後半(立岩式)	磨製石器。接合完形。
3182	413	29	側縫・脚部欠	片状蛇紋岩	2.7	1.5	0.2	1.5	YOK-II	SJ0312	中期後半(立岩式)	磨製石器
3185	414	29	先端部欠	黑色粘板岩	(2.6)	1.7	0.21	(1.4)	YOK-II	SJ0312	中期後半(立岩式)	磨製石器
3189	415	29	完形	片状蛇紋岩	(1.4)	(1.2)	(0.32)	(0.1)	YOK-II	SJ0312	中期後半(立岩式)	磨製石器
3187	416	29	先端部欠	片状蛇紋岩	(3.0)	1.4	0.2	(1.5)	YOK-II	SJ0312	中期後半(立岩式)	磨製石器
3188	417	29	側縫・脚部欠	粘板岩	5.5	2.1	0.4	(5.0)	YOK-II	SJ0312	中期後半(立岩式)	磨製石器

### 註

\*測定量の数値は、カッコ付きが「残存値」、カッコ無しが「最大値」を示す。

\*出土位置は遺物取り上げ時の註記を記載している。「No.○○」は遺物の取り上げ番号を意味する。

\*黒曜石はJIS規格のサンドベーパーの粒子サイズと比較し、便宜的に10番までを粗粒、180~400番までを中粒、400番以上を上上げ紙と分類する。

# 写 真 図 版



1. 田手二本黑木地区出土石庖丁①



2. 田手二本黑木地区出土石庖丁②



3. 田手二本黑木地区出土石庖丁③



4. 田手二本黑木地区出土両刃石斧①



5. 田手二本黑木地区出土両刃石斧②



6. 田手二本黑木地区両刃石斧③



7. 田手二本黑木地区両刃石斧④



8. 田手二本黑木地区出土片刃石斧①



9. 田手二本黑木地区出土片刃石斧②



10. 田手二本黑木地区出土片刃石斧③



11. 田手二本黑木地区出土石鎌



12. 田手二本黑木地区出土纺锤草



13. 田手二本黑木地区出土板状素材



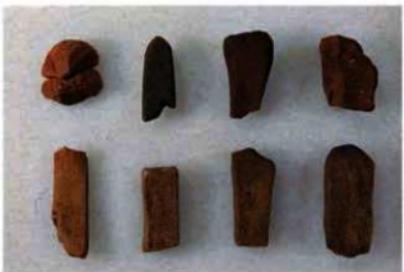
14. 田手二本黑木地区用途不明石製品



15. 田手二本黑木地区出土石錐



16. 田手二本黒木地区出土磨石



17. 田手二本黒木地区出土砾石①



18. 田手二本黒木地区出土砾石②



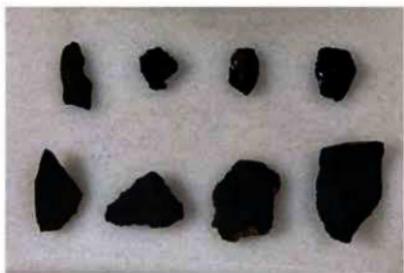
19. 田手二本黒木地区出土砾石③



20. 田手二本黒木地区出土砾石④



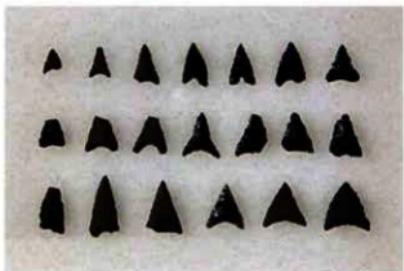
21. 田手二本黒木地区スクレイバー①



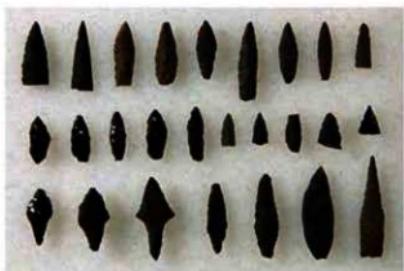
22. 田手二本黒木地区出土スクレイバー②



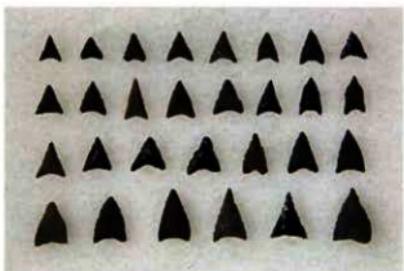
23. 田手二本黒木地区出土打製石鏃



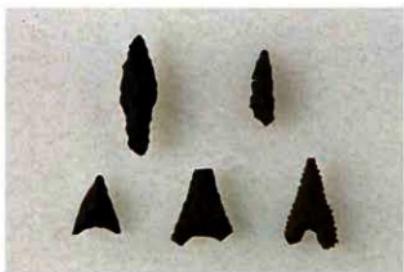
24. 吉野ヶ里遺跡出土打製石鏃①



25. 吉野ヶ里遺跡出土打製石鏃②



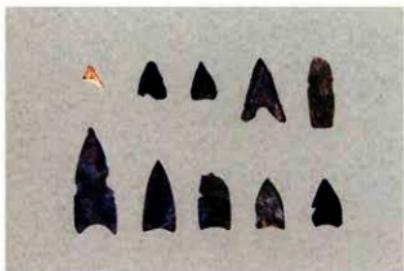
26. 吉野ヶ里遺跡出土打製石鏃③



27. 吉野ヶ里遺跡出土打製石鏃④



28. 吉野ヶ里遺跡出土打製石鏃⑤



29. 吉野ヶ里丘陵地区Ⅱ区 SJ312 号棺出土鏃



30. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣①



31. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣②



32. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣③



33. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣④



34. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石剣⑤



35. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石鐵①



36. 吉野ヶ里遺跡出土磨製石鐵・石戈



37. 吉野ヶ里遺跡出土有柄石劍



38. 吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区調査前風景（南上空から）



39. 歴史公園整備が続く田手二本黒木地区（南上空から）



40. 田手二本黒木地区 316 調査区全景（西上空から）



41. 田手二本黒木 318 調査区全景（南上空から）



42. 田手二本黒木地区 346 調査区全景（北上空から）



43. 田手二本黒木前期環濠（北西から）

## 報告書抄録

ふりがな	よしのがりいせきーたでにはんくろきちのやよいじだいちゅうきせつき						
書名	吉野ヶ里遺跡－田手二本黒木地区の弥生時代中期石器－						
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第177集						
編著者名	細川金也						
編集機関	佐賀県教育委員会						
所在地	〒840-8570 佐賀県佐賀市城内一丁目1-59						
発行年月日	2008(平成20)年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町: 遺跡番号	北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査 期間	調査対 象面積	調査原因
吉野ヶ里遺跡 田手二本黒木地区	佐賀県神埼郡 吉野ヶ里町 田手	413132	—	33°19'24" N 130°22'40" E	1988.01.01 ~ 2005.06.14	約 100,000m <sup>2</sup>	重要遺跡確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
吉野ヶ里遺跡 田手二本黒木地区	集落跡・墓地	弥生時代、古墳、奈良、中世	環濠、變相墓、堅穴住居跡、獨立柱 建物跡、土坑、構跡、前方後方墳、方形周溝墓等	弥生土器、石器	弥生時代前期 の環濠、弥生時代中期の大規模集落		

佐賀県文化財調査報告書第177集

## 吉野ヶ里遺跡

－田手二本黒木地区の弥生時代中期石器－

2008(平成20)年3月30日 印刷

2008(平成20)年3月30日 発行

編集・発行 佐賀県教育委員会

〒840-8570 佐賀県佐賀市城内一丁目1-59

印 刷 鹿島印刷株式会社

〒849-1321 佐賀県鹿島市古核甲249番地3

